兵庫県文化財調査報告　第 450 冊

篠　山　市

雲部車塚古墳
車塚の坪遺跡

－（一）篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成 25（2013）年 3 月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

雲部車塚古墳　車塚の坪遺跡

兵庫県文化財調査報告　第 450 冊

兵庫県教育委員会

24 教Ⓣ1－ 028A4

篠　山　市

くもべくるまづかこふん
雲部車塚古墳
くるまづかのつぼいせき
車塚の坪遺跡

―（一）篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成 25（2013）年 3 月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

雲部車塚古墳垂直写真

平成 13 年撮影（篠山市教育委員会提供）

巻頭カラー図版 2

1. 雲部車塚古墳周辺の航空写真

2. C区　周庭帯外周溝SD 01（東から）

1. C区 周庭帯外周溝SD 01 出土埴輪

2. 旧河道SD 05 出土埴輪

3. 同左

例　言

1　本書は篠山市東本庄に所在する雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡の発掘調査報告書である。

2　この調査は一般県道篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業に伴うもので、兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、平成 17 年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が本発掘調査を実施した。

3　整理作業については兵庫県丹波県民局県土整備部丹波土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、平成 23 年度には兵庫県立考古博物館が、平成 24 年度には公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。

4　調査の推移

（発掘作業）　確認調査　　平成 16 年 10 月 5 日～ 6 日

平成 17 年 3 月 16 日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

本発掘調査　平成 17 年 10 月 28 日～平成 18 年 1 月 27 日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

工事請負：（株）岩本組

（出土品整理作業）　　平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

実施機関：兵庫県立考古博物館

平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

5　本書に使用した航空写真は、朝日航洋株式会社と委託契約を交わして作成した。遺物写真の作成にあたっては、株式会社 タニグチ・フォトと委託契約を交わして撮影した。

6　本文の執筆は第 4 章第 3 節を立命館大学　青木哲哉氏が、それ以外を公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　中川 渉が行った。分析鑑定は、出土木製品の樹種同定を株式会社吉田生物研究所に、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）を株式会社加速器分析研究所に依頼して、それぞれ第 4 章第 1･2 節に分析結果を掲載した。編集は、柏木明子の補助を得て、中川が担当した。

7　本調査において出土した遺物や作成した写真･図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

8　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

篠山市教育委員会、宮内庁書陵部、京都大学考古学研究室

西田　猛・成田雅俊・植木　友・山本明彦（以上、篠山市教育委員会）、徳田誠志・有馬　伸・加藤一郎（以上、宮内庁書陵部）、阪口英毅（京都大学）、櫃本誠一（大手前大学）、青木哲哉（立命館大学）、池田正男　（敬称略、順不同）

凡　例

1　座標・水準高

図版に示す方位・座標は世界測地系に則っており、調査地は国土座標第Ｖ系に属する。

水準高は、周辺 10km 圏内に公共水準点が存在しなかったため、篠山土木事務所が施工する工事用の水準高を準用した。

2　使用地図

本書に使用した地図は下記の通りである。

第１図　国土地理院１／ 25,000 地形図「細工所」、「福住」

図版１　篠山市１／ 5,000 基本地形図

3　地区割り

調査対象範囲の区画ごとに、西からＡ区～Ｇ区とした。

4　遺構番号

遺構の種別の略号は、溝が「ＳＤ」、井戸が「ＳＥ」、土坑が「ＳＫ」、方形周溝墓が「ＳＸ」、柱穴が「Ｐ」とする。

なお報告書の作成に際して、調査時に付けられていた遺構番号を、種別ごとの通し番号で振り直している。そこでこれまでに報告された『年報』や『研究紀要』での遺構番号とずれることになるが、今回の報告を正式のものとする。

5　遺物番号

掲載した遺物の種類には土器・石器・鉄器・木器があり、報告 No. は土器が１～の通し番号、石器がＳ１～、鉄器がＦ１～、木器がＷ１～とする。

6　土器の種別

土器の種別は実測図断面の色を、須恵器が黒ベタ、土師器・埴輪・弥生土器が白抜き、瓦器がトーンで表示することで区別する。

目　次

第１章　遺跡の環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　篠山盆地東部の古墳時代～弥生時代 …… 1

第２章　調査の経過
第１節　はじめに …… 5
第２節　篠山町教育委員会による調査 …… 5
第３節　確認調査 …… 6
第４節　本発掘調査 …… 7
第５節　出土品整理・報告書作成作業 …… 8

第３章　調査の成果
第１節　概要 …… 9
第２節　遺構 …… 10
第３節　遺物 …… 14

第４章　分析・鑑定
第１節　雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡出土木製品の樹種調査結果 …… 19
第２節　雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）…… 21
第３節　雲部車塚古墳の地形環境 …… 24

第５章　まとめ
第１節　雲部車塚古墳について …… 30
第２節　弥生時代の方形周溝墓群・土壙墓群について …… 32
第３節　おわりに …… 34

挿図目次

第１図　周辺の古墳と弥生時代の遺跡（１：25,000）…… 2
第２図　調査区位置図 …… 5
第３図　［参考］暦年較正年代グラフ …… 23
第４図　調査区周辺の地形分類図 …… 25
第５図　完新世段丘Ｉにおける調査区付近の微地形 …… 26
第６図　調査区における堆積物 …… 28
第７図　周庭帯と外周溝 …… 31
第８図　弥生時代の遺構 …… 33

挿図写真目次

写真１　確認調査実施状況 …… 7
写真２　現地説明会の実施 …… 7
写真３　遺物整理作業（土器の復元）…… 8
写真４　遺物整理作業（トレース）…… 8
写真５　プレパラート顕微鏡写真 …… 20

表目次

表１　周辺の古墳と弥生時代の遺跡一覧 …… 3
表２　調査一覧表 …… 7
表３　遺構番号対照表 …… 14
表４　雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡出土木製品同定表 …… 19
表５　ＡＭＳ年代測定結果（補正値）…… 22
表６　ＡＭＳ年代測定結果（未補正値）…… 22

図版目次

図版１　遺跡の位置
図版２　調査区の配置
図版３　Ａ区　平面図・断面図
図版４　Ｃ・Ｄ区　平面図・断面図
図版５　Ｂ・Ｅ区　平面図・断面図
図版６　Ｆ・Ｇ区　平面図・断面図
図版７　遺構(1)　井戸ＳＥ01
図版８　遺構(2)　井戸ＳＥ02
図版９　遺構(3)　古墳の外周溝ＳＤ01
図版10　遺構(4)　方形周溝墓ＳＸ01・02、土坑ＳＫ01
図版11　遺構(5)　方形周溝墓ＳＸ03 ～ 06
図版12　遺構(6)　方形周溝墓ＳＸ07・08
図版13　遺構(7)　焼土、土坑ＳＫ04 ～ 08
図版14　土器(1)
図版15　土器(2)
図版16　土器(3)
図版17　鉄器、木器(1)
図版18　木器(2)
図版19　木器(3)
図版20　石器

写真図版目次

巻頭カラー図版１
　雲部車塚古墳垂直写真
巻頭カラー図版２
　１．雲部車塚古墳周辺の航空写真
　２．Ｃ区　周庭帯外周溝ＳＤ01（東から）
巻頭カラー図版３
　１．周庭帯外周溝ＳＤ01出土埴輪
　２．旧河道ＳＤ05出土埴輪
　３．同左
写真図版１　航空写真
　１．遺跡遠景（南から）
　２．同上（南東から）
写真図版２　調査区全景(1)
　１．Ａ区（西から）
　２．Ｂ区（東から）
　３．Ｃ区（東から）
　４．Ｄ区（西から）
写真図版３　調査区全景(2)
　１．Ｅ区（東から）
　２．Ｆ区（西から）
　３．Ｇ区（西から）
写真図版４　井戸跡
　１．ＳＥ01（北から）
　２．同上　埋土断面（南から）
　３．同上　断ち割り断面（南から）
　４．ＳＥ02（北から）
　５．同上　埋土断面（北から）
　６．同上　断ち割り断面（南東から）
写真図版５　古墳の外周溝(1)
　１．Ｃ区　外周溝ＳＤ01（東から）
　２．同　Ａ断面（東から）
　３．同　Ｂ断面（東から）
　４．同　Ｃ断面（東から）
　５．同　Ｄ断面（東から）
写真図版６　古墳の外周溝(2)
　１．ＳＤ01内　埴輪片出土状況（北から）
　２．同　土器出土状況（西から）
　３．同　鉄斧出土状況

写真図版７　旧河道・溝
１．Ｅ区　旧河道ＳＤ05（東から）
２．ＳＤ05内木製品出土状況（南から）
３．同上（北東から）
４．Ｅ区　溝ＳＤ03・04（北から）
写真図版８　弥生時代の墓(1)
１．Ｃ区　方形周溝墓ＳＸ01（南西から）
２．同上　断面（東から）
３．Ｄ区　方形周溝墓ＳＸ02（南西から）
４．同右　土器出土状況（北東から）
写真図版９　弥生時代の墓(2)
１．Ｄ区　土坑ＳＫ01（東から）
２．同上　遺物出土状況（北から）
３．同上　断面（東から）
４．柱穴Ｐ13　断ち割り断面（南から）
写真図版10　弥生時代の墓(3)
１．Ｆ区　方形周溝墓ＳＸ03・04（真上から）
２．Ｆ区　方形周溝墓ＳＸ05（真上から）
３．Ｆ区　方形周溝墓ＳＸ06（真上から）
４．Ｇ区　方形周溝墓ＳＸ07（真上から）
５．Ｇ区　方形周溝墓ＳＸ08と周辺の土坑群（真上から）
写真図版11　弥生時代の墓(4)
１．Ｆ区　方形周溝墓ＳＸ03・04（南西から）
２．ＳＸ04周溝内土器出土状況（東から）
３．ＳＸ03周溝内土器出土状況（北から）
４．同上　周溝断面（西から）
５．ＳＸ04周溝断面（西から）
写真図版12　弥生時代の墓(5)
１．Ｆ区　方形周溝墓ＳＸ05（北東から）
２．同左　断面（南から）
３．ＳＸ06南周溝断面（南東から）
４．ＳＸ06東周溝断面（南から）
５．ＳＸ06南周溝（南東から）
６．ＳＸ06東周溝（南から）
写真図版13　弥生時代の墓(6)
１．Ｇ区　方形周溝墓ＳＸ07（南西から）
２．ＳＸ07西周溝（北東から）
３．同上　断面（南東から）
４．ＳＸ07東周溝（南東から）
写真図版14　弥生時代の墓(7)、焼土、土坑
１．Ｇ区　方形周溝墓ＳＸ08西周溝断面（南から）
２．同左　南周溝断面（北から）
３．Ａ区　焼土（北西から）
４．同左　断面（北東から）
５．Ｇ区　土坑ＳＫ05（南東から）
６．Ｇ区　土坑ＳＫ04（南東から）
７．Ｇ区　土坑ＳＫ07断面（南から）
８．Ｇ区　土坑ＳＫ08（北東から）
写真図版15　土器(1)
写真図版16　土器(2)
写真図版17　土器(3)
写真図版18　土器(4)
写真図版19　土器(5)
写真図版20　土器(6)
写真図版21　鉄器
写真図版22　木器
写真図版23　石器

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

篠山市の中央を大きく占める篠山盆地は、篠山川が貫流する東西方向に奥深い地形である。盆地の中央に位置する近世篠山城城下町は、現在も行政・観光の中心地となっている。盆地の西部にはＪＲ篠山口駅・舞鶴若狭自動車道丹南篠山口ＩＣ・国道176号があり、交通の玄関口の役割を果たしている。盆地の東部に関しては、国道173号が綾部・福知山方面に、国道372号が園部・亀岡方面に通じており、旧丹波国全体へのアクセスに優れた位置関係になる。

広々とした篠山盆地も日置のあたりから幅が狭まり、篠山川の流れは上宿地内で北東方向へ大きく向きを変える。曽地川・辻川・高野川・籾井川などいくつもの支谷を抱えるこの地域が、篠山盆地東部を構成する。

今回の調査地点は篠山市東本庄地内に含まれる。篠山盆地東側の最奥部で篠山川が籾井川と合する手前に、北側の県守地区の谷から高野川が流れ込み、その谷の入り口を塞ぐようにして雲部車塚古墳が墳丘を東西方向に横たえている。地形としては篠山川右岸の高位段丘上にあたり、高野川が形成する扇状地の中洲状の微高地に、古墳や弥生時代の遺跡が立地する。

ただし景観的な面からみると、東西側は丘陵によって視界が遮られ、南側も篠山川の対岸に山地が接近しているところから、古墳の墳丘を充分に眺望できる地点が乏しい。大型前方後円墳の立地としては、きわめて奇異な印象を受ける。

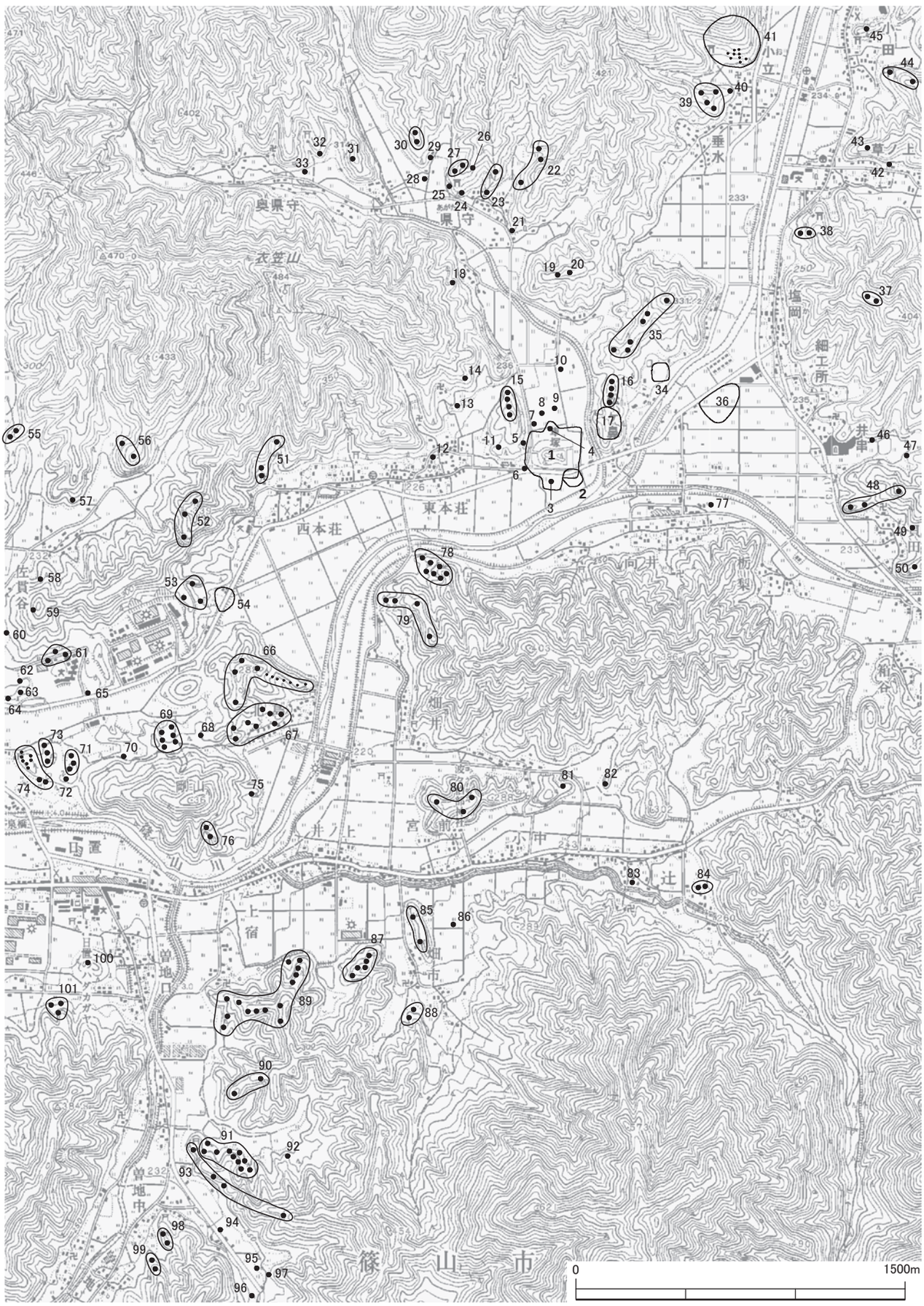
第２節　篠山盆地東部の古墳時代～弥生時代

今回の調査対象となった雲部車塚古墳(1)と車塚の坪遺跡(2)は、古墳時代と弥生時代を中心とする遺跡であるところから、ここでは篠山盆地東部の古墳時代～弥生時代の遺跡の状況を概観する。

古墳時代

雲部車塚古墳は墳丘長140ｍの前方後円墳で、兵庫県内では第４位[(1)]、旧丹波国では最大の規模を誇る。墳丘には盾形周濠と周庭帯・陪塚が伴い、中期の大王墳の典型例を示している。明治29年に主体部が開削された際に、後円部の竪穴式石槨に納められた長持形石棺と、その周囲に副葬された甲冑や刀剣類・鉄鏃などの大量の武具・武器類などの存在が記録された。墳丘の南北には車の両輪のごとく、2つの陪塚が対となっており、いずれも周庭帯で取り込まれているように見える。北陪塚(4)は直径30ｍの円墳、南陪塚(3)は一辺27ｍの方墳状を呈する。当初から雲部車塚古墳と一体のものとして認識されており、明治32年に一括で陵墓参考地に指定された。他の陪塚としては墳丘西側の丘陵裾に飯塚古墳(5)が存在する。これ以外にも5基の墳丘(6～10)が描かれた図面が存在するが、現存していない。

篠山川右岸に沿って北東へ約600ｍ上流に位置する北条古墳(34)は、一辺35ｍの方墳で、粘土槨から鉄剣もしくは鉄ヤリが出土したと伝わる。墳丘からは円筒埴輪や家形・短甲形・靫形などの形象埴輪が出土しており、雲部車塚古墳に先行する首長墳とみられる。また雲部車塚古墳の西方500ｍにも、一辺30ｍの方墳である姫塚古墳(12)があり、東部地域の中期古墳は方墳という墳形に特徴をもつ。



第１図　周辺の古墳と弥生時代の遺跡（1：25,000）

表１　周辺の古墳と弥生時代の遺跡一覧

番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	備考
1	**雲部車塚古墳**	**東本荘字車塚の坪**	**全長140m、周濠、陵墓参考地**
2	**車塚の坪遺跡**	**東本荘字車塚の坪**	**弥生中期土壙墓群**
3	雲部車塚古墳(南陪塚)	東本荘字車塚の坪	一辺27m、高さ3m、陵墓参考地(い号陪塚)
4	雲部車塚古墳(北陪塚)	東本荘字車塚の坪	径30m、高さ3m、陵墓参考地(ろ号陪塚)
5	飯塚古墳	東本荘字車塚の坪	径30m
6	車塚南西古墳	東本荘字車塚の坪	位置は絵図による復元、消滅
7	車塚北西古墳	東本荘字佐凝	位置は絵図による復元、消滅
8	鳥居塚西古墳	東本荘字倉ノ内	位置は絵図による復元、消滅
9	鳥居塚東古墳	東本荘字車塚の坪	位置は絵図による復元、消滅
10	県守塚	県守字高野ノ坪	位置は絵図による復元、消滅
11	東谷古墳	東本荘字佐凝	径6m×7m、高さ1.5m
12	姫塚古墳	東本荘字中筋	一辺30m、高さ3m、埴輪
13	洞光寺古墳	東本荘字中谷	径50m、高さ8m
14	洞光寺山古墳	東本荘字中谷	径10m、高さ1.5m、横穴式石室
15	佐凝古墳群	東本荘字佐凝	径10m×9m、高さ1.5m
16	城山古墳群	東本荘字城山	径10.5m×8.5m、高さ1.3m
17	城山城跡	東本荘字城山	主郭7m×20m、堀切、帯郭
18	片廻し古墳	県守字片廻し	径6m、高さ1m
19	前の山古墳	県守字引立	径7m×9m、高さ1.6m
20	金毘羅山古墳	県守字引立	径9m×13m、高さ1.5m
21	坂の谷古墳	県守字坂の谷	径10m、高さ2m、横穴式石室
22	東坂ノ谷古墳群	県守字東坂ノ谷	墳丘流出、横穴式石室
23	西坂ノ谷古墳群	県守字西坂谷	径10m、高さ1.5m
24	いごり塚古墳	県守字山谷	前方後円墳、全長22m
25	山ン谷古墳	県守字東山谷	墳丘流出、横穴式石室露出
26	春日山古墳	県守字山谷	径6.5m×5m、高さ1.5m
27	春日神社裏古墳群	県守字坂の谷	径10m×7m、高さ1.5m
28	なげや古墳	県守字東ナギヤ谷	径6m、横穴式石室一部損壊
29	西ナギヤ谷東古墳	県守字東ナギヤ谷	径7m、高さ2.5m、横穴式石室
30	東ナギヤ谷古墳群	県守字東ナギヤ谷	径6.3m、高さ1.5m
31	西ナギヤ谷古墳	県守字東ナギヤ谷	径6m、高さ0.7m、横穴式石室
32	稲荷山古墳	奥県守字日ノ谷	径8m、高さ1m
33	万歳谷古墳	奥県守字万歳谷	径6m、高さ1.8m、横穴式石室
34	北条古墳	細工所字北条山田	一辺35m、高さ4m、県指定史跡85
35	北条山田古墳群	細工所字北条山田	径15m、高さ1.5m
36	細工所遺跡	細工所字戸井ノ坪	円形竪穴式住居跡、弥生土器
37	荒木城古墳群	細工所字本谷	径10m、高さ2m
38	塩岡古墳群	塩岡字七ツ谷	径9m、高さ2m
39	谷田山古墳群	小立字谷田	横穴式石室、無袖、全長5.5m
40	地蔵山古墳	小立字谷田	横穴式石室、無袖、全長5.5m
41	岩井山古墳群	小立字岩井	横穴式石室、径7m、高さ2m
42	外谷古墳	草ノ上字外谷	径5m、高さ1m
43	外谷山上古墳	草ノ上字外谷	径11m、高さ1.5m
44	上垣内古墳群	小田中字上垣内	径12m、高さ1.5m
45	稲荷山古墳	小田中字宮林	前方後円墳、横穴式石室、市指定史跡
46	南谷古墳	井串字南谷	径8m、高2m
47	鈴岡山古墳	井串字北谷	径22m、高さ3.5m
48	貝田浦山古墳群	貝田字浦山	径9m、高さ1m
49	貝田稲荷古墳	貝田字奥ノ谷	径12m、高さ3m、横穴式石室
50	貝田前山古墳	貝田字前山	径7m、高さ0.5m
51	雲部奥ノ谷古墳群	西本荘字奥ノ谷	径4m、高さ1.5m
52	雲部西ノ山古墳群	西本荘字西ノ山	全長25m、後円部径18m
53	西代山古墳群	西本荘字西代山	径18m、高さ2.5m
54	大張散布地	西本荘字大張	弥生土器、須恵器
55	包谷古墳群	春日江字包谷	径28m、高さ3.5m
56	佐貫谷古墳群	佐貫谷字中尾	径8m、高さ1m
57	中曽根古墳	佐貫谷字中曽根	径5m、高さ1m、横穴式石室
58	今井谷古墳	佐貫谷字氷室	径20m、高さ4m、二段築成
59	氷室古墳	佐貫谷字氷室	径15m、高さ2.5m、墳頂径7m
60	塚ヶ谷古墳	春日江字塚ヶ谷	径18m、高さ3m
61	野毛浦古墳群	泉字野毛浦	辺8m、高さ2m
62	よし池山上古墳	泉字野毛	径60m、高さ10m、造出し付
63	よし池古墳	泉字野毛	径12m、高さ3m、横穴式石室
64	野毛古墳	泉字野毛	径20m×15m、高さ2.5m
65	狐塚古墳	泉字狐塚	径32m、高さ3.5m
66	北嶋スガ谷古墳群	北嶋字スガ谷	径18.5m、高さ3m
67	北嶋古墳群	北嶋字スガ谷	径8m、高さ2m
68	柏木谷古墳	泉字柏木谷	径12m×13m、高さ2.5m
69	梨木谷古墳群	泉字梨木谷	径7m、高さ1.2m
70	市口古墳	泉字市口	径7m、高さ2m
71	二反田東古墳群	泉字二反田	径8m、高さ1.2m
72	鉄砲山遺跡	泉字鉄砲山	方形台状墓
73	二反田古墳群	泉字二反田	径12m、高さ1.8m
74	宮山古墳群	泉字宮山	径14m×11m、高さ2m
75	東陽寺古墳	北嶋字東陽寺	径9m×11m、高さ2m
76	東陽寺西古墳群	北嶋字東陽寺	径10m、高さ1m
77	向井古墳	向井字岩ヶ鼻	径10m×15m、高さ3m
78	岨谷東古墳群	向井字岨谷	一辺15m、高さ1m
79	岨谷西古墳群	向井字岨谷	径12m、高さ1.2m
80	宮山古墳群	波々伯部	径11.8m×9m、高さ1.6m
81	中の辻古墳	辻字中の辻	径8m×7m、高さ1.6m
82	高山古墳	辻字高山	径8.2m×7.5m、高さ1.3m
83	大仙寺古墳	辻字宇古部	径8.9m、高さ1.9m
84	谷合古墳群	辻字谷合	径12m、高さ1m
85	ふの木山古墳群	宮ノ前字ふの木山	径16.4m、高さ2m
86	ふの木東古墳	宮ノ前字向井	径19m、高さ3m
87	畑市西ヶ辻古墳群	畑市字西ヶ辻	径10m、高さ2m
88	角田ノ坪古墳群	畑市字角田ノ坪	径14.8m、高さ1m、五輪塔1基
89	宝地山古墳群	上宿字西寺庵	全長31.5m、後円部径19m
90	赤穂谷北古墳群	曽地中字赤穂谷	径12m、高さ1m
91	赤穂谷古墳群	曽地中字赤穂谷	径12m、高さ2m
92	赤穂谷奥古墳	曽地中字赤穂谷	径25m、高さ3m、須恵器
93	赤穂谷南古墳群	曽地中字赤穂谷山	径14m、高さ2m
94	洞中１号墳	曽地中字洞中	径30m、高さ4m、市指定史跡
95	洞中２号墳	曽地中字洞中	前方後円墳、全長30m、市指定史跡
96	洞中３号墳	曽地中字洞中	墳丘削平、石材3個露出
97	東山古墳	曽地中字東山	箱式石棺
98	曽地中山古墳群	曽地中字中山	径15m、高さ1.5m
99	曽地オカ古墳群	曽地中字岡	径8m、高さ1.5m
100	堂山古墳	野々垣字堂山	径13m×11m、高さ1m、直刀、鎌
101	御所が谷古墳群	野々垣字御所が谷	径15m、高さ3.5m

※ 遺跡の所在地は「篠山市」を省略

盆地の中央に位置する新宮古墳は直径52.5mの大型円墳で、二段築盛の墳丘の周囲に明瞭な周濠の痕跡が認められる。かつて甲冑・大刀が出土したと伝えられるが、現存しない。円筒埴輪片が出土している。律令期の中枢ともなる郡家地区に所在することもあり、周濠を切り合う碁石塚古墳とともに、篠山盆地を代表する中期古墳の１つといえる。

中期古墳では華やかな系譜がたどれるのに対し、前期古墳は非常に少ない。実際に発掘調査されたものでは、春日江地区の前山19号墳において小規模な竪穴式石室と土器棺が調査された事例があるが、盆地の東部ではほとんど知られていない。

一方、後期には盆地全体に古墳が激増する。まず６世紀前葉には、木棺墓に須恵器を副葬する中小の円墳が現れる。野間地区の塚ノ山１号墳や真南条上地区の真南条上３号墳などが発掘調査された。６世紀後葉以降には、横穴式石室を主体部とする古墳が、各集落背後の丘陵に、数基～十数基の単位で群集する。高野川流域の県守地区には、横穴式石室を内蔵する前方後円墳であるいごり塚古墳(24)や、巨石を用いた横穴式石室が露出する山ン谷古墳(25)が、篠山川上流の小立地区には、棚付きの横穴式石室をもつ岩井山３号墳(41)、その対岸の小田地区には、Ｔ字形の横穴式石室をもつ前方後円墳である稲荷山古墳(45)が、曽地川流域には、丹波最大の横穴式石室である洞中１号墳(94)、横穴式石室が斜めに開口する前方後円墳である洞中２号墳(95)など、地区ごとに特色ある古墳が存在する。

弥生時代

車塚の坪遺跡では弥生時代中期の土壙墓群や方形周溝墓が見つかっており、墓域として利用されていたことが判明している。同時期の集落遺跡としては、高野川・篠山川を渡った約800ｍ東に、細工所遺跡(36)がある。同遺跡は篠山川と籾井川の合流点東側に位置し、多数の弥生土器・石器とともに、円形の住居跡が見つかっている。さらに籾井川をさかのぼった二之坪地区の二之坪遺跡でも、多数の弥生土器・石器などが出土している。

篠山盆地の方形周溝墓は、春日江地区の藤岡山遺跡がもっとも早い調査例である。また最近では、盆地中央の西岡屋地区にあるヤケヤノ坪遺跡でも中期の方形周溝墓７基が見つかっている。

後期になると墳墓は、丘陵上の台状墓といった形態を示すようになり、大山下地区のずえが谷遺跡では台地上に方形周溝墓群が築かれている。東木ノ部地区の内場山墳丘墓は、盆地の西端から平野部全体を見渡す尾根の先端に築かれ、長大な素環頭大刀や鉄鏃などを副葬しており、盆地の弥生時代終末期を代表する首長墳といえる。

盆地の東部においても、鉄砲山遺跡(72)の２基の台状墓から二重口縁壺などが出土しており、首長層の形成が進んでいたことを物語っている。

註

（1）宮内庁による発掘調査によって全長158ｍとする復元案があるが〔徳田ほか2006〕、ここでは『兵庫県遺跡地図』（2011）の数値にしたがう。

参考文献

池田正男2002「何人カノ筆に成ル雲部車塚古墳」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

池田正男2003「20世紀における篠山盆地の考古学史」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

篠山町教育委員会1980『古代祖先のあゆみ』

篠山町教育委員会1984『雲部車塚古墳―道路改良工事に伴う周庭帯の発掘調査報告書―』

篠山町教育委員会1992『教育の森構想に伴う遺跡確認調査―概要報告書―』

多賀茂治2010「周辺の地形と歴史」『兵庫県立考古博物館研究紀要　第3号　雲部車塚古墳の研究』兵庫県立考古博物館

兵庫県1992『兵庫県史』考古資料編

兵庫県教育委員会1995『真南条上３号墳』（兵庫県文化財調査報告第148冊）

兵庫県教育委員会2009『塚ノ山１号墳』（兵庫県文化財調査報告第355冊）

第２章　調査の経過

第１節　はじめに

一般県道篠山京丹波線は、篠山市の市街地から国道173号を経て、京都府船井郡京丹波町にいたる。途中、篠山市域東部の東本庄地内には陵墓参考地である「雲部車塚古墳」が存在し、県道は同古墳南陪塚との間の周庭帯想定域を通過している。

同地では昭和58年に県道の拡幅に伴う発掘調査が篠山町教育委員会（当時）によって行われ、古墳の周庭帯に加えて、弥生時代中期の土壙墓群などが見つかった。結果、この古墳と重複する遺跡については、新たに「車塚の坪遺跡」として周知されるにいたった。

さらにその後、同箇所において特定交通安全施設等整備事業の計画が具体化したことから、兵庫県教育委員会は平成16年度に事業地内において埋蔵文化財の確認調査を実施した。

第２節　篠山町教育委員会による調査

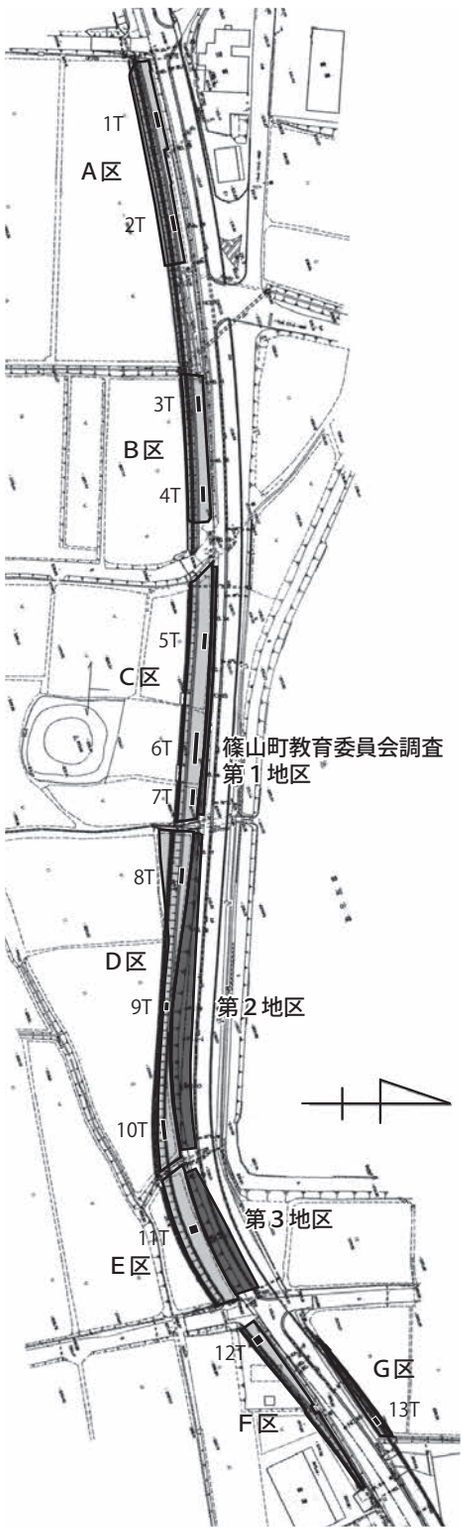
調査は篠山町教育委員会が兵庫県柏原土木事務所より委託を受けて、昭和58年11月７日～11月30日の期間で実施した。県道の南側に沿った水田部の、長さ140m、幅1～6m、面積500㎡を調査対象とし、途中に横断する２本の水路によって、西から第１～３地区の３つに区分した。

第１地区

地表面の標高は230.15mで、３地区の中でもっとも高い。長さ65m、幅1.0～1.5mの細長い調査区である。厚さ約20cmの耕作土を取り除いた遺構検出面では、遺構・遺物は見つからなかった。

第２地区

地表面の標高は229.46mで、第１地区から段差がついて約60cm低くなる。長さ81m、幅2.0～5.5mの調査区で、３地区の中で面積がもっとも広い。



第２図　調査区位置図

厚さ約20cmの耕作土を取り除くと、10cmほどの厚みの磁器片を含む淡灰色土があり、その下の黄茶色土面との間には、弥生土器を含む包含層が調査区の中央付近の一部で存在した。黄茶色土面では、土壙墓群などを検出した。

第３地区

地表面の標高は229.37ｍで、３つの調査区の中でもっとも低い。長さ35ｍ、幅4.0～6.0ｍの調査区で、周庭帯の南端部分にあたる。厚さ約20cmの耕作土を取り除くと、東側を中心に10～15cmほどの厚みの中世の瓦器片・摩耗した埴輪片・須恵器の器台片などを含む灰色土があり、その下が黄茶色土面となる。遺構は見つからなかった。

第３節　確認調査

平成16年度に実施した確認調査は、対象範囲の西端から周濠の東端にあたるラインまでと、それ以東の２回に分けて実施した。

第１次確認調査（遺跡調査番号2004208）

調査は平成16年８月25日付け 丹波（柏土）第1429号の依頼に基いて、平成16年10月５日～６日の２日間で実施した。調査対象地の水田部分に10箇所の調査トレンチ（西から１Ｔ～10Ｔ、面積43㎡）を設け、以下のような成果を得た。

１Ｔ・２Ｔ（本発掘調査のＡ区に相当）では、中世・奈良時代の遺物包含層が存在し、土坑・柱穴などの遺構を検出した。

３Ｔ・４Ｔ（本発掘調査のＢ区に相当）のうち、３Ｔでは遺構は認められなかったものの、安定的な面が続くことを確認した。４Ｔでは洪水性の砂礫層によって面が攪乱されていたが、範囲は限定的なものと予想された。

５Ｔ・６Ｔ・７Ｔ（本発掘調査のＣ区に相当）のうち、６Ｔは南陪塚の直近に位置し、全体の中で最も地表面が高い場所にあたる。最も重要な地点と考えられたため、１×８ｍのトレンチを設定した。遺物包含層中に埴輪片が多数含まれており、遺構面でも埴輪片の集中地点を２箇所検出した。５Ｔでは遺構は見つからなかったものの、６Ｔから続く安定的な面を確認した。７Ｔでは６Ｔの遺構検出面を覆う砂礫層の延長を検出した。

８Ｔ・９Ｔ・10Ｔ（本発掘調査のＤ区に相当）の地表面は、７Ｔより50cm低くなっているが、３つのトレンチでは遺構検出面がほぼ同一レベルで確認できた。そのうち、10Ｔでは柱穴を２基検出した。

第２次確認調査（遺跡調査番号2004316）

調査は平成17年３月７日付け 丹波（柏土）第1908号の依頼に基づいて、平成17年３月16日に実施した。調査対象地の水田および畑地部分に３箇所の調査トレンチ（西から11Ｔ～13Ｔ、面積11㎡）を設け、以下のような成果を得た。

11Ｔ（本発掘調査のＥ区に相当）では南北方向の溝を検出し、埋土からは埴輪片が出土した。

12Ｔ（本発掘調査のＦ区に相当）では弧状の輪郭をした遺構の一部を検出し、埋土からは土師器もしくは弥生土器の破片が出土した。

13Ｔ（本発掘調査のＧ区に相当）では方形の輪郭をした遺構の一部を検出し、埋土からは土師器もしくは弥生土器の破片が出土した。この他、柱穴３基も検出した。

写真１　確認調査実施状況

写真２　現地説明会の実施

第４節　本発掘調査

柏原土木事務所（篠山土木事務所）からの依頼（平成17年７月29日付　丹波（柏土）第1371号）に基づいて、平成17年10月28日～18年１月27日の期間で実施した。調査の対象範囲は、雲部車塚古墳墳丘西側の町道との交差点から約50ｍ西の農道を西端とし、墳丘東側の町道との交差点から約50ｍ東の民家前までを東端とする。現道の南側に沿った水田５筆分と畑地を含む宅地１筆、さらに東端の宅地と対面になる道路北側の水田１筆分を調査対象とした。

調査区は幅２～９ｍ、延長約380ｍの東西に細長い形状で、西から農道・水路ごとの区画でＡ区～Ｇ区の７地区に分けた。

調査はまずバックホウによって盛土・耕土・堆積土を掘削し、次に人力によって遺物包含層の掘削・遺構面の精査・遺構の掘削を行った。掘削残土はダンプトラックによって、事業地内の仮置き場へ搬出した。

調査で見つかった遺構は、ヘリコプターを用いて撮影した空中写真から１／50縮尺の遺構平面図に図化した。その他、撮影用足場からの写真撮影および適宜作成した平面図・断面図などで細部の記録を行った。記録保存した図面・写真は、出土遺物とともに兵庫県教育委員会が保管している。調査にあたっては、大手前大学櫃本誠一教授および立命館大学青木哲哉講師の現地指導を受けた。１月22日には現地説明会を開催して、調査成果を一般に公開した。

表２　調査一覧表

遺　跡　名	調査の種別	期　　間	実施機関	担　当　者	遺跡調査番号
雲部車塚古墳	本発掘調査	昭和58年11月7日 ～11月30日	篠山町教育委員会	山本明彦	
雲部車塚古墳 車塚の坪遺跡	確認調査	平成16年10月5～6日	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	中川渉	2004208
雲部車塚古墳	雲部陵墓参考地墳 塋裾護岸その他工 事に伴う事前調査	平成16年10月18日 ～11月30日	宮内庁書陵部	徳田誠志、有馬伸 加藤一郎	
雲部車塚古墳 車塚の坪遺跡	確認調査	平成17年3月16日	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	中川渉	2004316
雲部車塚古墳 車塚の坪遺跡	本発掘調査	平成17年10月28日 ～平成18年1月27日	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	吉識雅仁 池田征弘	2005143 2005144

第５節　出土品整理・報告書作成作業

出土品の整理作業は平成23年度には兵庫県立考古博物館、平成24年度には公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（兵庫県立考古博物館内）において実施した。実施した内容は、土器・石器・木器の水洗い・ネーミング・接合補強・実測・拓本・復元・写真撮影、金属器の保存処理・実測・写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、木器の保存処理、分析鑑定、報告書印刷である。

平成23年度の整理体制

調査担当職員	主査　池田征弘
整理担当職員	主査　篠宮　正　（工程管理担当）
	主査　岡本一秀　（保存処理担当）
非常勤嘱託員	島村順子、荒木由美子、荻野麻衣、西口由紀　（接合・補強等担当）
	八木和子、尾鷲都美子　（実測等担当）
	岡田美穂、浜脇多規子、桂　昭子　（保存処理担当）

平成24年度の整理体制

担当職員	副課長　中川　渉（調査担当）、副課長　篠宮　正（工程管理担当）
非常勤嘱託員	友久伸子、柏木明子　（トレース・レイアウト等担当）
	島村順子、藤池かづさ、上田沙耶香　（復元等担当）
	今村直子、前田恵梨子　（保存処理担当）

写真３　遺物整理作業（土器の復元）

写真４　遺物整理作業（トレース）

第３章　調査の成果

第１節　概要

調査地は陵墓参考地「雲部車塚古墳」の南側に接する一般県道篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業の事業地部分で、同地は古墳の周庭帯想定域に含まれている。さらに弥生時代を中心とする「車塚の坪遺跡」も重複しており、弥生時代の遺構の存在も予想された。調査の概要については以前に報告されたことがあり（吉識雅仁2010「古墳周辺の発掘調査－1983（昭和58）年・2005（平成17）年」『兵庫県立考古博物館紀要』第３号　雲部車塚古墳の研究）、ここでは該当部分を、一部修正のうえ再掲する。

2004（平成16）年、兵庫県柏原土木事務所の一般県道篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業に伴い確認調査を実施したところ、柱穴などの遺構とともに、埴輪片などが出土したため、翌年に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）が本発掘調査を実施した。

調査区は1983（昭和58）年度の調査区に南接し、総延長380ｍ、面積1,536㎡の細長いものであり、途中水路や農道によって分断されることから、Ａ～Ｇ区の７地区に分けて実施した（第２図）。

Ａ　区　調査区の西端にあたる地区であり、飛鳥時代から奈良時代の土器を含む土層によって埋没した谷部が検出されたほか、平安時代、鎌倉時代から室町時代の遺構が検出された。遺構の検出面は表土直下の標高229.6ｍであり、谷内部は標高228.8ｍである。

谷部は調査区の中央から北西隅にかけて検出され、７～８世紀の土器を含む複数回の洪水砂礫などで埋没していた。谷部の上流側は雲部車塚古墳後円部背後の周濠に向かっている。

平安時代の遺構は谷部の縁辺や埋没途中の谷内部に営まれており、検出された遺構には井戸や柱穴がある。井戸（ＳＥ02）は谷内部に営まれたもので、枠材が抜き取られて素掘りの状態であり、埋土上層から９世紀代の土器が出土している。

鎌倉時代から室町時代の遺構は、谷部が完全に埋没して周辺が平坦化してから営まれたものであり、石組井戸（ＳＥ01）と柱穴が検出された。石組みの底には刳り抜きの井筒が据えられており、埋土から13～14世紀の土器が出土している。

Ｂ　区　一部で遺物を含む土壌化した土層が確認されたが、遺構は検出されなかった。地山面の標高は229.5～229.7ｍを測る。

Ｃ　区　雲部車塚古墳周濠の外堤と「い号陪塚（南陪塚）」の間の調査区であり、1983（昭和58）年度の第１地区に南接する。濠と並行する周庭帯の地割が乱れ、陪塚に向かって突出するような地割となる地区にあたる。

調査の結果、耕作土直下から、周濠とは12ｍの間隔をあけて並行する溝（ＳＤ01）が長さ約40ｍにわたって検出された（図版４）。ＳＤ01は幅3.2～3.5ｍ、深さ約30cmであり、西端はやや浅くなるが、現県道下に連続し、東端は「い号陪塚」の東方に連続する段差によって切られていた。溝内部から土師器甕、鉄斧、埴輪片が出土している。これらの遺物は密集したような状態ではないが、比較的狭い範囲から出土している。

このほか、調査区の北東隅で方形周溝墓の隅と思われる溝（ＳＸ01）が「く」の字形に検出された。

これらの遺構の検出面は、ＳＤ01の検出された部分が高く標高229.7ｍ、調査区東端は一段下がって標高229.4ｍであった。西半の遺構検出面は、黄褐色極細砂上に堆積した砂礫層上であった。

Ｄ　区　現状では周庭帯の地割が確認できないが、周濠修復前の地積図では東西に長い一筆の田として描かれており、周庭帯の地割がかつては存在したのかもしれない。1983（昭和58）年度の第２地区に南接する。

調査の結果、弥生時代の溝や土坑などが検出された。遺構検出面の標高は228.8～229.0ｍであり、ほとんど平坦で水平な面である。検出された溝は方形周溝墓（ＳＸ02）とみられるが、削平によってほとんど失われ、わずかに底付近のみが検出されている。土坑（ＳＫ01）は1983（昭和58）年度に検出された土壙墓群の一連と思われるが、土坑の長辺に並行して柱穴４個（Ｐ10～Ｐ13）が検出されている。ＳＫ01の内部からは弥生土器とともに大型の磨製石包丁が出土している。古墳時代の遺構・遺物はみつかっていない。

Ｅ　区　周庭帯の南東隅にあたる地区であるが、地割にそうした痕跡はみえず、周濠修復前の地積図でも南東隅を示すような地割は確認できない。逆に修復前地積図や1928（昭和３）年の測量図での地割は外に抜けたような形となっている。1983（昭和58）年度の第３地区に南接する。

調査の結果、溝（ＳＤ03・04）と旧河道（ＳＤ05）を検出した。遺構検出面は標高228.8ｍと今回の調査区の中ではもっとも低いが、検出面の上には埴輪片や瓦器片を含む包含層が確認できることから、本来から低い土地であったものと判断できる。

溝や旧河道は北西から南東方向に走行するものであり、周濠あるいは周庭帯から段丘崖に向かって流れ出すという方向性をもつ。溝の時期は不明であるが、旧河道は埋土下層に弥生土器、上層に埴輪を含むことから、弥生時代に形成された後、古墳時代以降も開口していたものとみられる。

また、この旧河道が掘削している土層は細かな堆積物であることから、今回検出したのは幅広い旧河道の埋没最終段階にあたるものと考えている。

Ｆ　区　周庭帯地割の東外側にあたる地区で、Ｅ区から段をなして高くなる。この地区での遺構検出面は標高228.6～229.1ｍを測り、東の高野川に向かって徐々に下がっていく。

検出された遺構は弥生時代中期の溝と土坑で、溝（ＳＸ03）は「コ」の字形や弧状を呈しており、方形周溝墓の溝にあたるものと思われる。溝や土坑内からは弥生時代中期の土器が出土している。

Ｇ　区　県道の北側で、周庭帯地割の東外側にあたる地区である。この地区での遺構検出面は229.1ｍであり、検出面はほぼ平坦である。

検出された遺構は柱穴・土坑・溝などであり、溝（ＳＸ07）は方形周溝墓の可能性もあるが、柱穴などが存在していることから居住区の一部も検出されているものと考えている。出土遺物はほとんどが弥生土器である。

第２節　遺構

遺構の説明は、Ａ区の井戸、Ｃ・Ｅ区の溝・旧河道、Ｄ・Ｆ・Ｇ区の方形周溝墓、その他の焼土・土坑の順に行う。

遺構の略号は、井戸が「ＳＥ」、土坑が「ＳＫ」、溝・旧河道が「ＳＤ」、方形周溝墓が「ＳＸ」、柱穴が「Ｐ」とする。

１　井戸

井戸ＳＥ01（図版７、写真図版４）

Ａ区の中央に位置する。不整円形の掘り方内部に石積みの井戸側を構築し、最下部に丸太を刳り抜いた井戸枠を据えて水溜めとしている。ただし井戸側の石積みは断ち割り時に崩壊したため、下半部の記録をとることができなかった。

掘り方の規模は径1.6ｍ、深さ2.7ｍ、底面の径1.15ｍ。石積みの井戸側の内径は、上部で0.75～0.85ｍ、最下部で0.5ｍ。水溜めの内径は0.65～0.7ｍ、深さ0.6ｍ。

遺物は、埋土から中世の瓦器椀(１)、須恵器こね鉢(２)、板材(Ｗ１)などが出土した他、水溜めに使用されていた井筒(Ｗ２)を図化している。

井戸ＳＥ02（図版８、写真図版４）

Ａ区の西側に位置する。不整円形の掘り方内部に井戸側を構築していたものとみられるが、廃棄時に抜き取られており、どのような枠材を用いていたか不明である。ただし石材の落ち込みは認められないため、板組みであった可能性が高い。

掘り方の規模は径2.3ｍ、深さ2.2ｍ、底面の径1.0ｍ。井戸側の抜き取り痕の径は、上部で1.45ｍ、最下部で0.65ｍ。

遺物は、埋土から奈良時代の須恵器蓋杯(３～６)・皿(７)・壺(９・10)、中世の瓦器椀(８)、板状鉄斧(Ｆ１)、不明鉄器片(Ｆ２)などが出土した。

２　溝・旧河道

溝ＳＤ01（図版４・９、写真図版５）

Ｃ区の北壁から斜めに調査区内を縦断している。ただし東端は削平されて途切れており、検出できたのは延長約40ｍ分である。現状の規模は幅3.5～4.0ｍ、深さ0.1～0.15ｍ程度で、基盤となる砂礫層に掘り込まれているが、大きく削平を受けた遺構の底付近が残存している状況とみられる。なお断面Ｄライン付近では径2.5ｍ、深さ0.4ｍほどの落ち込みとなっていて、その周辺では埴輪・土器片が集中的に出土した。ただし原位置を保った状況の埴輪はなかった。

遺物は、古墳時代の土師器甕(31)、埴輪片(32～37)、袋状鉄斧(Ｆ３)などが出土した。

旧河道ＳＤ05（図版５、写真図版７）

Ｅ区の東側を北西から南東方向に、調査区を横断している。規模は幅4.0ｍ、深さ0. 5ｍで、地下水を含むグライ化した埋土が堆積していた。

遺物は、古墳時代の埴輪片(42～44)の他、下層から板材(Ｗ３)・棒材(Ｗ４)などの木製品が出土した。

溝ＳＤ03・04（図版５、写真図版７）

旧河道ＳＤ05の西側では水路状の溝ＳＤ03・04が並走して、調査区を横断している。

ＳＤ03は「く」の字に弯曲しており、幅0.4～0.9ｍ、深さ0.35ｍに掘り込まれている。遺物は棒状鉄製品(Ｆ4)が出土した。

ＳＤ04は直線的な形状で、幅1.0ｍ、深さ0.45ｍに掘り込まれている。遺物は弥生土器甕(45)が出土した。

３　方形周溝墓

Ｃ区・Ｄ区・Ｆ区・Ｇ区では、溝が弧状あるいは方形にめぐる遺構を５基検出した。多くの遺構からは弥生土器が出土しており、削平のため主体部は見つからなかったものの、これらの遺構は埋葬主体に伴う周溝であると認識して報告する。

方形周溝墓ＳＸ01（図版４・10、写真図版８）

Ｃ区の北東隅に位置する。検出したのは「く」の字を描く弧状の溝で、遺構の延長は北壁の外側へ続く。調査区内には全体の1/4程度がかかっているとみられ、輪郭を復元すると、いびつな円形か隅丸方形のような、円とも方ともとれないような形状が想定できる。検出した範囲では、溝に途切れた箇所はなかった。溝の規模は幅0.55～0.8ｍ、深さ0.13ｍ程度である。検出した溝の延長は東西3.7ｍ分であるが、全体の規模は不明である。

図化できるような遺物は出土しなかった。

方形周溝墓ＳＸ02（図版４・10、写真図版８）

Ｄ区西半部の中央に位置する。検出したのは鉤状に折れ曲がる溝で、遺構の延長は北壁の外側へ続く。方形の輪郭の南辺と南東隅を検出したとみられ、南西隅の溝は途切れている可能性がある。溝の規模は幅0.15～0.7ｍ、深さ0.07ｍ程度である。検出した溝の延長は東西5.85ｍ分で、西周溝は失われていると考えると、方形周溝墓の東西幅は６ｍを超えるとみられる。

南周溝の西寄りで弥生土器甕(41)などが出土した。

土坑ＳＫ01（図版４・10、写真図版９）

Ｄ区中央の東寄りに位置する。東西方向の溝状の掘り込みで、一部は北壁の外側に続く。1983年度の篠山町教委による調査では隣接地に木棺墓群が見つかっているが、この遺構と組み合わさる溝がないため方形周溝墓とはいえない。それでも墓域に存在する遺構であるため、方形周溝墓と併せて報告する。全長2.8ｍ、幅は検出範囲内で0.65ｍ、深さ0.35ｍ。中央付近の南肩部で、弥生土器壺(38～40)、大型石包丁(Ｓ１)などがかたまって出土した。

また土坑の南側で、東西に並ぶ柱穴4基(Ｐ10～Ｐ13)を検出した。掘り方は径18～23cmで、約0.9ｍの間隔でＳＫ01に平行しているが、両者の関係は不明である。

方形周溝墓ＳＸ03・04（図版６・11、写真図版10・11）

Ｆ区の西側に位置する。「コ」の形に溝がめぐるＳＸ03と溝状の掘り込みのＳＸ04が切り合っており、遺構の延長は南壁の外側へ続く。

ＳＸ03は調査区内に全体の1/3程度がかかっているとみられ、輪郭を復元すると、東西幅が約７ｍの隅丸方形の周溝となる。検出範囲内では、溝に途切れた箇所はなかった。溝の規模は幅0.9～1.55ｍ、深さ0.4ｍ程度である。周溝の北西隅で、弥生土器壺(53・54)・鉢(55)などがかたまって出土した。

ＳＸ04は、ＳＸ03の周溝区画内を東西に掘り込む溝状遺構で、延長は南壁の外側に続く。溝の規模は長さ3.85ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.25ｍである。調査区外の状況が不明なため確実に方形周溝墓とはいえないが、隅の途切れた方形周溝の可能性を考えておく。ＳＸ03の周溝埋土を切り込んでおり、時期的にはより新しい段階の遺構となる。周溝内から多量の弥生土器(46～52)が出土した。

方形周溝墓ＳＸ05（図版６・11、写真図版12）

Ｆ区の中央に位置する。検出したのは弧状の溝で、遺構の延長は南壁の外側へ続く。調査区内には全体の1/4程度がかかっているとみられ、輪郭を復元すると、楕円形か隅丸方形のような、円とも方とも

とれないような形状が想定できる。現状では、北側で溝が途切れている。溝の規模は幅0.23～1.25m、深さ0.25m程度である。検出した溝の延長は南北6.55m分であるが、全体の規模は不明である。

遺物は、周溝内から弥生土器壺(56～58)・甕(59)、礫石器(Ｓ４)などが出土した。

方形周溝墓ＳＸ06（図版６・11、写真図版12）

Ｆ区の東側に位置する。検出したのは東西方向と南北方向の溝状の掘り込み２基（南周溝・東周溝とする）で、それぞれ遺構の延長は北壁の外側へ続く。両者は直角に近い角度で組み合うため、隅の途切れた方形周溝の一部として捉える。南周溝は検出範囲内の長さ0.9m、幅0.45m、深さ0.12m、東周溝は検出範囲内の長さ1.0m、幅0.55m、深さ0.2mである。周溝の東西幅は3.3m以上あるが、全体の規模は不明である。

遺物は、両周溝内から弥生土器甕(60・61)などが出土した。

方形周溝墓ＳＸ07（図版６・12、写真図版13）

Ｇ区の西半部に位置する。検出したのは北西－南東方向の２本の溝（西周溝・東周溝とする）で、それぞれ遺構の延長は北壁・南壁の外側へ続く。２つの溝はほぼ同規模で、約8.5mの距離をおいて平行するが、延長方向のＦ地区には続いていないため、一体の方形周溝を構成するものとして捉える。西周溝は幅1.9～2.0m、深さ0.5m、東周溝は幅1.3～1.9m、深さ0.6m、両周溝の外肩間の距離は12.3mである。

遺物は、東周溝内から弥生土器壺(62・63)などが出土した。

方形周溝墓ＳＸ08（図版６・12、写真図版14）

Ｇ区の東端に位置する。検出したのは南北方向と東西方向の溝状の掘り込み２基（西周溝・南周溝とする）で、それぞれ遺構の延長は北壁および南壁の外側へ続く。両者は直角に近い角度で組み合うため、隅の途切れた方形周溝の一部として捉える。西周溝は検出範囲内の長さ1.7m、幅0.75～0.95m、深さ0.3m、南周溝は検出範囲内の長さ0.7m、幅0.3m以上である。周溝の南北幅は3.5m以上あるが、全体の規模は不明である。

遺物は、南周溝内から弥生土器壺(64)などが出土した。

４　その他の遺構

上記以外の、焼土・土坑などの個別の遺構をまとめる。

焼土遺構（図版３・13、写真図版14）

Ａ区の中央西寄りに位置する。検出したのは被熱のために赤く硬化した焼土面で、0.5×0.15m程度の大きさの三日月形をしている。焼土は径0.8m程度の掘り込みの底にあり、埋土にも焼土片が多く含まれていた。さらに焼土面の下層にも15cm程度の掘り込みを伴うが、輪郭ははっきりしない。土器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。

土坑ＳＫ04・05（図版６・13、写真図版14）

Ｇ区の東側に位置し、北壁沿いに2つ並んでいる。東側のＳＫ04は不整円形、西側のＳＫ05は不整長方形の掘り込みで、延長は北壁の外側に続く。規模は、ＳＫ04が東西1.7m、南北1.1m以上、深さ0.1m、ＳＫ05が東西0.9m、南北1.0m以上、深さ0.2m。図化できた遺物はない。

土坑ＳＫ06（図版６・13）

Ｇ区の中央に位置する。不整楕円形の掘り込みで、延長は北壁の外側に続く。長さ1.7m、幅1.0m、深さ0.4m。図化できた遺物はない。

土坑ＳＫ07（図版６・13、写真図版14）

Ｇ区の中央に位置し、ＳＸ07東周溝の東肩に接している。南北方向の溝状の掘り込みで、延長は南壁の外側に続く。検出範囲内の長さ1.5m、幅0.65m、深さ0.43m。埋土から弥生土器壺(66)などが出土した。

土坑ＳＫ08（図版６・13、写真図版14）

Ｇ区の中央に位置し、ＳＫ07の東肩に接している。東西方向の溝状の掘り込みで、両端にピット状の掘り込みを伴う。全長2.65m、幅0.45m。埋土から弥生土器(65)などが出土した。

表３　遺構番号対照表

地区名	報告番号	旧番号	地区名	報告番号	旧番号	地区名	報告番号	旧番号	地区名	報告番号	旧番号
Ａ区	ＳＥ01	—	Ｄ区	ＳＸ02	ＳＤ01	Ｅ区	ＳＤ05	ＳＤ03	Ｇ区	ＳＫ06	—
Ａ区	ＳＥ02	—	Ｄ区	ＳＫ01	—	Ｆ区	ＳＸ03	ＳＤ01	Ｇ区	ＳＫ07	—
Ａ区	Ｐ01	—	Ｄ区	ＳＫ02	—	Ｆ区	ＳＸ04	ＳＤ02	Ｇ区	ＳＫ08	ＳＤ04
Ａ区	Ｐ02	—	Ｄ区	ＳＤ02		Ｆ区	ＳＸ05	ＳＤ03	Ｇ区	ＳＤ06	ＳＤ01
Ａ区	Ｐ03	—	Ｄ区	Ｐ09	Ｐ01	Ｆ区	ＳＸ06東周溝	ＳＫ01	Ｇ区	Ｐ14	Ｐ01
Ａ区	Ｐ04	—	Ｄ区	Ｐ10	Ｐ02	Ｆ区	ＳＸ06南周溝	ＳＫ02	Ｇ区	Ｐ15	Ｐ04
Ａ区	Ｐ05	—	Ｄ区	Ｐ11	Ｐ03	Ｇ区	ＳＸ07西周溝	ＳＤ03	Ｇ区	Ｐ16	Ｐ05
Ａ区	Ｐ06	—	Ｄ区	Ｐ12	Ｐ04	Ｇ区	ＳＸ07東周溝	ＳＤ02	Ｇ区	Ｐ17	Ｐ09
Ａ区	Ｐ07	—	Ｄ区	Ｐ13	Ｐ05	Ｇ区	ＳＸ08南周溝	ＳＫ02	Ｇ区	Ｐ18	Ｐ10
Ａ区	Ｐ08	—	Ｅ区	ＳＫ03	ＳＫ01	Ｇ区	ＳＸ08西周溝	ＳＫ03	Ｇ区	Ｐ19	Ｐ11
Ｃ区	ＳＤ01	—	Ｅ区	ＳＤ03	ＳＤ01	Ｇ区	ＳＫ04	—	Ｇ区	Ｐ20	Ｐ12
Ｃ区	ＳＸ01	ＳＤ02	Ｅ区	ＳＤ04	ＳＤ02	Ｇ区	ＳＫ05	—	Ｇ区	Ｐ21	Ｐ06

第３節　遺物

１　Ａ区出土の土器

井戸ＳＥ01（図版14－１・２）

１は瓦器椀の口縁部で、下半部を欠失する。細片のため不明確だが、口径12.75cmに復元できる。

２は須恵器の片口鉢で、下半部を欠失するが、内面はよく使いこまれている。口径27.8cm。

井戸ＳＥ02（図版14－３～10）

３は須恵器杯蓋の口縁部で、天井部のつまみは欠失する。口径11.8cm。４～６は高台をもつ須恵器杯身である。４・５は底部から斜めに立ち上がる体部にかけての破片で、口縁部は残っていない。底径は４が9.15cm、５が10.0cmの中型品である。６は底部のみの破片で、底径14.0cmの大ぶりな杯である。

７は須恵器皿で、全形を復元できる。器形はやや歪んでおり、底面に火だすき痕が観察できる。口径15.05cm、器高11.55cm、底径11.1cm。

８は瓦器椀の底部で、断面台形の高台が残る。底径6.2cm。

９・10は須恵器壺である。９はゆるく外反する口縁部の破片で、口径12.5cm。10は双耳壺の頸部から体部下半にかけての破片で、両肩に縦長の耳部がつく。口頸部は欠失するが、頸部の基部は細く締まっている。頸部径4.1cm、胴部最大径15.95cm、残存高14.9cm。

包含層（図版14－11～28）

11～15は中世の瓦器椀である。11～14は口縁部の破片で、11・12は口縁を強くナデるのが特徴的である。口径は11が12.5cm、12が12.95cm、13が14.0cm、14がやや大きく15.2cmである。15は底部の破片で、断面三角形の高台がつく。底径5.5cm。

16・17は須恵器杯蓋である。16は扁平なつまみがつく頂部のみが残存しており、奈良時代の所産である。17は口縁部のみの破片で、口縁内面に、退化したかえりが廻る。口径は外径が14.8cm、内径が13.0cm。７世紀後半の遺物である。

18～21は奈良時代の須恵器杯身である。18は高台のある小型の杯で、体部下半に弱い稜をもつ。口径12.4cm、器高4.4cm、底径8.3cm。19・21は高台のある底部の破片で、やや大振りな21の底部外面にはＸ字のヘラ記号が入る。底径は19が7.9cm、21が9.3cm。20は高台をもたない小型の杯である。口径10.3cm、器高2.8cm。

22は古墳時代の須恵器杯身の口縁部で、立ち上がり部は短く内傾する。口径12.2cm。

23は中世の鍋である。扁平な体部の肩に強い段をもって、口縁部が外傾気味に立ち上がり、端部を四角く肥厚させる。体部外面は横位のタタキで調整する。色調はにぶい橙～灰黄褐で、胎土にはφ１mm以下の砂粒とφ２mm大のチャート粒を含む。焼成は硬質である。口径20.4cm、底部を欠失するが、器高は現状で13.15cm。

24は製塩土器の口縁部で、粘土紐の痕跡が明瞭に残る。おそらく奈良時代に属するものである。口径15.7cm。

25～28は土師器甕で、おそらく奈良時代の長胴甕の口縁部と考えられる。器壁は25・27・28が１cm前後の厚みに対し、26は５～６mmでやや薄く、プロポーションが異なる可能性がある。口径は25が18.4cm、26が18.85cm、27が19.6cm、28が24.3cm。

２　Ｂ区出土の土器

包含層（図版14－29・30）

29は須恵器杯身の底部片で、高台をもつ。底径7.9cm。30は須恵器壺の口頸部で、口縁端部を平坦にしている。口径11.8cm。いずれも奈良時代に属するものとみられる。

３　Ｃ区出土の土器

溝ＳＤ01（図版15－31～37）

31は土師器甕で、球形の体部に、口縁部が逆ハの字に開く。器表面の残りはそれ程よくないものの、ハケメなどの調整痕をあまり残さずに仕上げているようである。口径16.6cm。

32～37は埴輪の破片で、確認調査の際に出土した32も併せて報告する。いずれもにぶい橙色を呈し、長石・チャート粒が目立つなど、発色・胎土が共通する。32・33は口縁外面に幅約３cmの突帯をもち、両者は同一個体の可能性もある。33から径を復元すると約40cmにも及ぶため、通常の円筒埴輪とは考えにくい。類例からすると、鰭付楕円筒埴輪か盾形埴輪のような器形が想定できる。34～37は円筒埴輪の突帯部分であるが、36の内面に指頭痕が残る以外、調整はすべて滅失している。35の外径は約35cm。

４　Ｄ区出土の土器

土坑ＳＫ01（図版15－38～40）

38～40は弥生土器壺の破片である。38は広口壺の頸部で、断面三角形の貼り付け突帯を５条めぐらせる。頸部付け根の復元径11.5cm。39は壺の肩部で、縦方向のハケメの器面に、櫛描波状文を２段以上に施す。40は壺の底部で、外面に縦方向のハケメが残る。底径9.2cm。

方形周溝墓ＳＸ02（図版15－41）

41は弥生土器甕で、図上にてほぼ完形に復元できる。やや厚めの平底から卵形の体部が立ち上がり、中位の少し上に胴部最大径をもつ。「く」の字に屈曲する頸部から口縁部が短く開く。器壁の磨滅が著

しいものの、体部の調整は外面が縦方向のハケメ、内面が縦方向のケズリで、外面には煤が付着する。口径11.8cm、器高23.0cm、胴部最大径18.8cm、底径6.9cm。

５　Ｅ区出土の土器

旧河道ＳＤ05（図版15－42～44）

42は壺形埴輪で、同一個体と考えられる３点の接合しない破片から図上復元した。３点はいずれも器面が灰白色、断面が黒色を呈し、チャート粒が目立つ胎土で、外面に赤色顔料が塗布されるという特徴をもち、他の埴輪に比べて際立って精良に作られている。１点は肩部の上部の破片で、斜め方向のハケメの上から突帯の際に横方向のハケメを施すが、頸部付け根の突帯そのものは欠失している。他の２点は肩部の下部とその突帯の破片で、縦方向のハケメの上から突帯の際に横方向のハケメを施しており、突帯の接合面にも下地のハケメが観察できる。ただし壺形埴輪の口縁部は失われ、肩部以下の形状も不明である。復元した頸部径はおよそ13.5cm、肩部径は28cm、肩部の突帯の外径が35.5cm。

43・44は円筒埴輪の破片である。43は外面がにぶい黄橙、内面がにぶい橙色を呈し、長石粒が目立つ胎土で、硬質な焼成である。剥離した突帯の上部には横方向のハケメ、下部から剥離面にかけては縦方向のハケメが観察できる。復元径は約24cm。44は橙色を呈し、長石粒が目立つ胎土で、焼成は不良である。幅2.5cmほどの幅広の突帯をもつが、全体に磨滅が進んでおり、詳細は不明である。

溝ＳＤ04（図版15－45）

45は弥生土器甕で、口縁部が短く外反する。器表面が風化しているため、調整は不明である。口径14.6cm。

６　Ｆ区出土の土器

方形周溝墓ＳＸ04（図版16－46～52）

46は弥生土器鉢で、浅い椀状の体部から口縁がほぼ水平に開く。底部を欠失していて不明だが、脚部が付いて高杯になる可能性もある。口径21.9cm。

47は弥生土器の脚部で、裾部が漏斗状に広がる。外面に縦方向のハケメの調整痕を残し、厚みの大きい武骨な作りで、高杯もしくは台付鉢などの器形になるものとみられる。底径13.05cm。

48・49は弥生土器甕で、短く屈曲する口縁から、外面を縦方向のハケメで調整する体部上半が残る。小型の48は口径15.4cm。大型の49は口径31.4cm。

50～52は弥生土器の底部である。50は体部が卵形に立ち上がる壺で、外面を縦方向のハケメで調整する。底面がやや上げ底状で、中央を円盤充填している。底径10.7cm。51は体部が大きく開く壺である。底径8.2cm。52は甕の底部である。底径5.5cm。

方形周溝墓ＳＸ03（図版16－53～55）

53は弥生土器の大型の広口壺で、頸部に断面三角形の貼り付け突帯を４条めぐらし、その突帯を縦につなぐ棒状浮文を２条一組で５単位貼り付ける。口頸部は上外方に開き、水平にのばした口縁部の内面に櫛描扇形文を連ねる。下垂させて拡張した口縁端面には、円形浮文を貼り付ける。現状は剥離や脱落で途切れているが、本来は扇形文も円形浮文も密に連ねてあったものである。二次焼成を受けたようで、内外面とも剥離が著しく、体部以下は欠失する。口径36.9cm。

54は弥生土器の壺の口縁部で、口縁端部が水平に短く開く。口径19.5cm。

55は弥生土器の鉢もしくは甕の口縁部で、口縁端部が強く屈曲して短く開く。口縁端面にはキザミメを施す。口径25.95cm。

方形周溝墓ＳＸ05（図版16－56～59）

56～58は弥生土器壺である。56は広口壺の口縁部で、上外方に立ち上がる口頸部から口縁が外へ開き、端部が垂直の面をもつ。外面は縦方向のハケメで調整する。口径19.5cm。57は無頸壺で、内傾する体部がやや立ち上がって端部を丸くおさめる。口径10.3cm。58は壺の頸部で、１条の貼り付け突帯にキザミメを施している。頸部の外径は約14cm。

59は弥生土器甕の底部である。底径5.2cm。

方形周溝墓ＳＸ06（図版16－60・61）

60・61は弥生土器甕で、60は南周溝、61は東周溝から出土した。60は口縁部で口径15.9cm、61は底部で、底径5.4cm。

７　Ｇ区出土の土器

方形周溝墓ＳＸ07（図版16－62・63）

62・63は弥生土器壺で、東周溝から出土した。62は端部が外へ折れ曲がる口縁の細片であるが、あるいは裾部となるかもしれない。63は底部で、底径9.9cm。

方形周溝墓ＳＸ08（図版16－64）

64は弥生土器壺の体部で、櫛描直線文を施す。

土坑ＳＫ08（図版16－65）

65は弥生土器の底部で、外面を縦方向のハケメで調整する。底径6.9cm。

土坑ＳＫ07（図版16－66）

66は弥生土器壺の口縁部である。口径17.7cm。

柱穴Ｐ14（図版16－67）

67は弥生土器甕の口縁部で、緩やかにカーブする頸部から口縁が短く外反し、小さめの端部にキザミメを粗く施す。口径19.4cm。

８　鉄器

井戸ＳＥ02（図版17－Ｆ１・Ｆ２）

Ｆ１は板状鉄斧である。長方形の鉄板で、短辺の片側に両刃をもち、反対側は折損している。幅2.75cm、現存長5.8cm、厚み0.8cm。

Ｆ２は両端が折損していて詳細不明だが、断面長方形の基部から扇形に広がっており、鎌の柄の部分の可能性がある。現存長4.0cm、基部の断面1.25×0.8cm。

溝ＳＤ01（図版17－Ｆ３）

Ｆ３は袋状鉄斧で、ほぼ全形が残る。平面形は撥形で、中程がくびれて、刃先に向かって末広がりとなる。袋部の折り曲げは閉じておらず、１cm前後の隙間がある。全長8.1cm、刃幅3.95cm、基部幅3.0×1.75cm。

溝ＳＤ03（図版17－Ｆ４）

Ｆ４は鉄板を細長くした棒状の鉄製品だが、器種･用途は不明である。幅広の方の端部は丸味を帯

びているが、特別な細工はない。反対側に向かって細くなっているが、端部は欠損している。現存長14.8cm、幅1.5～0.65cm、厚み0.4～0.2cm。

９　木器

井戸ＳＥ01（図版17・18－Ｗ１・Ｗ２）

Ｗ１は板材で、井戸を断ち割った際に出土したが、井戸の構造に関わるものではないようである。片側が折損している。現存長38.9cm、幅21.3cm、厚み2.0cm。

Ｗ２は丸太を管状に刳り抜いた井筒で、石積み下部の水溜に用いられていた。樹種はモミ属である。直径76.7～84.0cm、高さ63.1cm、最大の厚み5.5cm。

旧河道ＳＤ05（図版19－Ｗ３・Ｗ４）

Ｗ３は長方形の板材で、長辺の片側中央に刳り込みをもつが、用途は不明である。刳り込み部分は幅6.0～6.5cmの不整方形で、奥行きは片面が３cm弱、他面が６cm前後の斜面となっており、何かを差し込むような形状である。樹種はスギである。全長56.0cm、幅18.1cm、厚み3.0cm。

Ｗ４は丸太の棒材で、部分的に樹皮も残る。先端を段状に加工したような痕跡もあるが、詳細は不明である。全長200.8cm、基部の径10.8～13.6cm。

10　石器

土坑ＳＫ01（図版20－Ｓ１）

Ｓ１は磨製の大型石包丁で、板状に剥離させた、暗青灰色の粘板岩を素材としている。両面を磨いているが、所々に剥離面が残る。刃部は外弯状で、両面から研ぎ出されているが、刃部の稜線は明瞭ではない。背部は、両肩を内弯気味に打ち欠いて中央を把手状に作り出す。打ち欠きは主に片面から行っており、端面には一部擦りも入っている。把手の中央に孔をもつ類例もあるが、本例は穿たれていない。ほぼ完成品の状態ではあるが、未成品の可能性もある。大きさは21.2cm×14.8cm、厚さ1.9cm、重さ577.2ｇ。

柱穴Ｐ21（図版20－Ｓ２）

Ｓ２はサヌカイトの剥片である。末端が蝶番剥離をした厚手の素材から剥離された剥片である。岩質は緻密で、二上山産とみられる。大きさは3.1cm×1.95cm、厚さ0.6cm。

溝ＳＤ01（図版20－Ｓ３）

Ｓ３は円礫を用いた磨石で、磨り面には褐色の付着物がある。酸化鉄を主成分としており、赤色顔料の可能性がある。側面にも赤い筋状の付着物があり、やはり酸化鉄を主成分としている。大きさは11.35cm×9.4cm、厚さ8.8cm、重さ1475ｇ。

方形周溝墓ＳＸ05（図版20－Ｓ４）

Ｓ４は扁平な円礫を用いた磨石で、磨り面の半分ほどが残存している。現状の大きさは5.55cm×8.25cm、厚さ4.0cm。

第４章　分析・鑑定

第１節　雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

１　試料

試料は雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡から出土した井筒（Ｗ２）１点、板材（Ｗ３）１点の合計２点である。

２　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３　結果

樹種同定結果（針葉樹2種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

表４　雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡出土木製品同定表

試料 No.	報告番号	器種名	樹種名
1	Ｗ３	板材	スギ科スギ属スギ
2	Ｗ２	井筒	マツ科モミ属

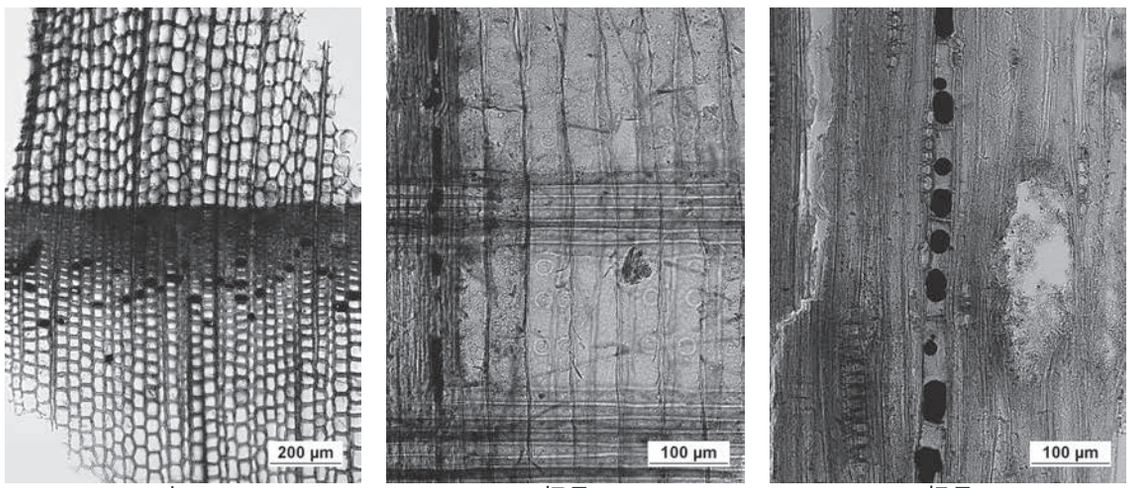
（１）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica D.Don*）（写真５No.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

（２）マツ科モミ属（*Abies sp.*）（写真５No.2）

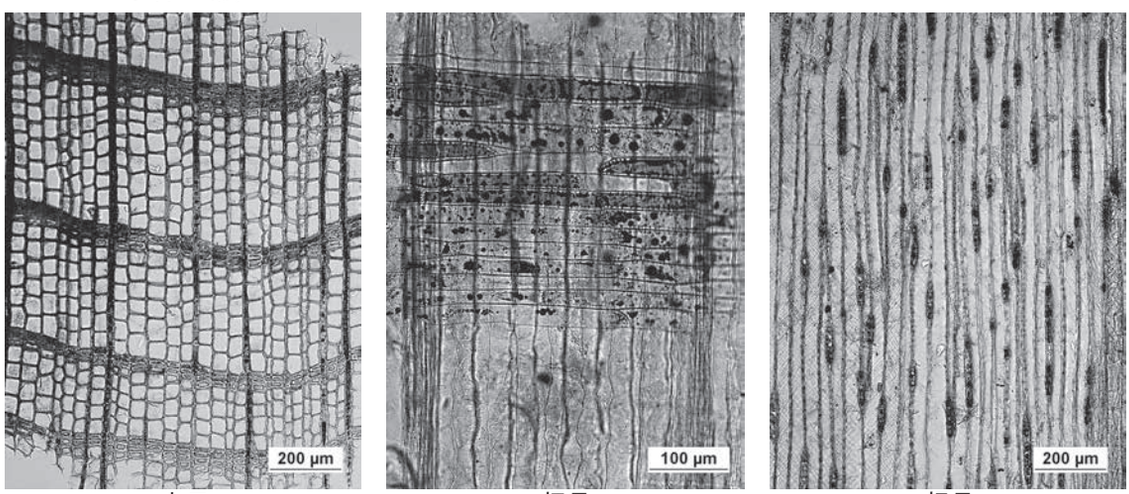
木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

No. 1　スギ科スギ属スギ



木口　　柾目　　板目

No. 2　マツ科モミ属



木口　　柾目　　板目

◆使用顕微鏡◆　Nikon DS-Fi1

写真 5 プレパラート顕微鏡写真

参考文献

林　昭三　「日本産木材顕微鏡写真集」　京都大学木質科学研究所（1991）

島地　謙・伊東隆夫　「日本の遺跡出土木製品総覧」　雄山閣出版（1988）

北村四郎・村田　源　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社（1979）

奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

第２節　雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

雲部車塚古墳・車塚の坪遺跡は、兵庫県篠山市東本荘（北緯35°5′10″、東経135°18′16″）に所在する。測定対象試料は、遺構面の下層から採取された土壌（１：IAAA-120630）、旧河道ＳＤ05下層出土丸太材（２：IAAA-120631）の合計２点である（表５）。

２　測定の意義

試料１の測定により、遺跡地形形成の年代を決める。

試料２の測定により、河道の埋積時期を特定し、また重複する古墳の周濠との前後関係を明らかにする。遺跡からは弥生時代～中世の遺構、遺物が出土しているが、河道の時期は特定できていない。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、付着物や混入物を取り除く。

（２）木片は酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理、土壌は酸処理を実施し、不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。AAA処理を行った試料で、アルカリ濃度が１Mに達したものは「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表５に記載する。酸処理のみの試料は表５に「HCl」と記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表５）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用

する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表５に、補正していない値を参考値として表６に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表５に、補正していない値を参考値として表６に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される（第３図）。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal 09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv 4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表６に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

試料の^{14}C年代は、遺構面の下層から採取された土壌１が7,420±30yrBP、旧河道ＳＤ05下層出土木片２が1,540±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は、１が6,361～6,242cal BC、2が440～567cal ADの間に各々２つの範囲で示される。１は縄文時代早期後葉頃に相当する（小林編2008）。２は古墳時代中期から後期頃の暦年代観に当たる年代値となっている。

試料の炭素含有率は、土壌の１が約２%、木片の２が60%弱で、各々特に問題のない値となっている。

表５　ＡＭＳ年代測定結果（補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-120630	1	遺構面の下層	土壌	HCl	-16.09 ± 0.63	7,420 ± 30	39.70 ± 0.17
IAAA-120631	2（報告番号Ｗ４）	旧河道 SD05　下層	木片	AAA	-26.34 ± 0.36	1,540 ± 20	82.57 ± 0.25

【#5201】

表６　ＡＭＳ年代測定結果（未補正値）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120630	7,280 ± 30	40.43 ± 0.16	7,420 ± 34	6,361calBC – 6,288calBC (49.1%) 6,271calBC – 6,242calBC (19.1%)	6,383calBC – 6,230calBC (95.4%)
IAAA-120631	1,560 ± 20	82.35 ± 0.24	1,537 ± 24	440calAD – 485calAD (32.2%) 532calAD – 567calAD (36.0%)	432calAD – 591calAD (95.4%)

【参考値】

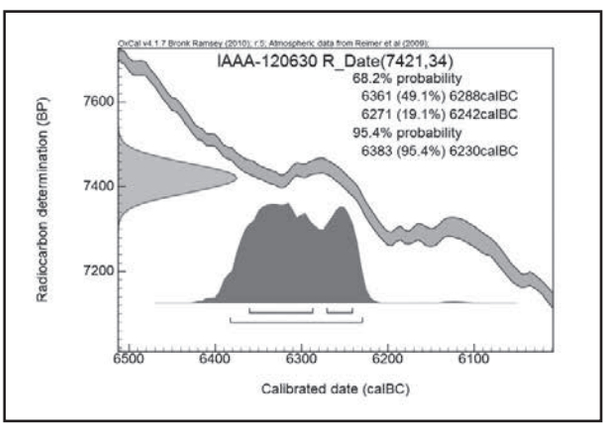
文献

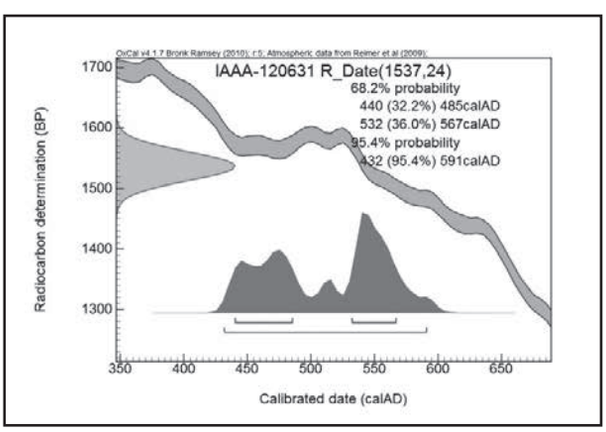
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363





第３図　[参考]暦年較正年代グラフ

第３節　雲部車塚古墳の地形環境

青 木 哲 哉（立命館大学非常勤講師）

１　はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形と堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が可能である。このため、地形環境を細かいオーダーで復原でき、また堆積物に含まれる遺物を通してそれらの時期を明確にすることができる。同時に調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

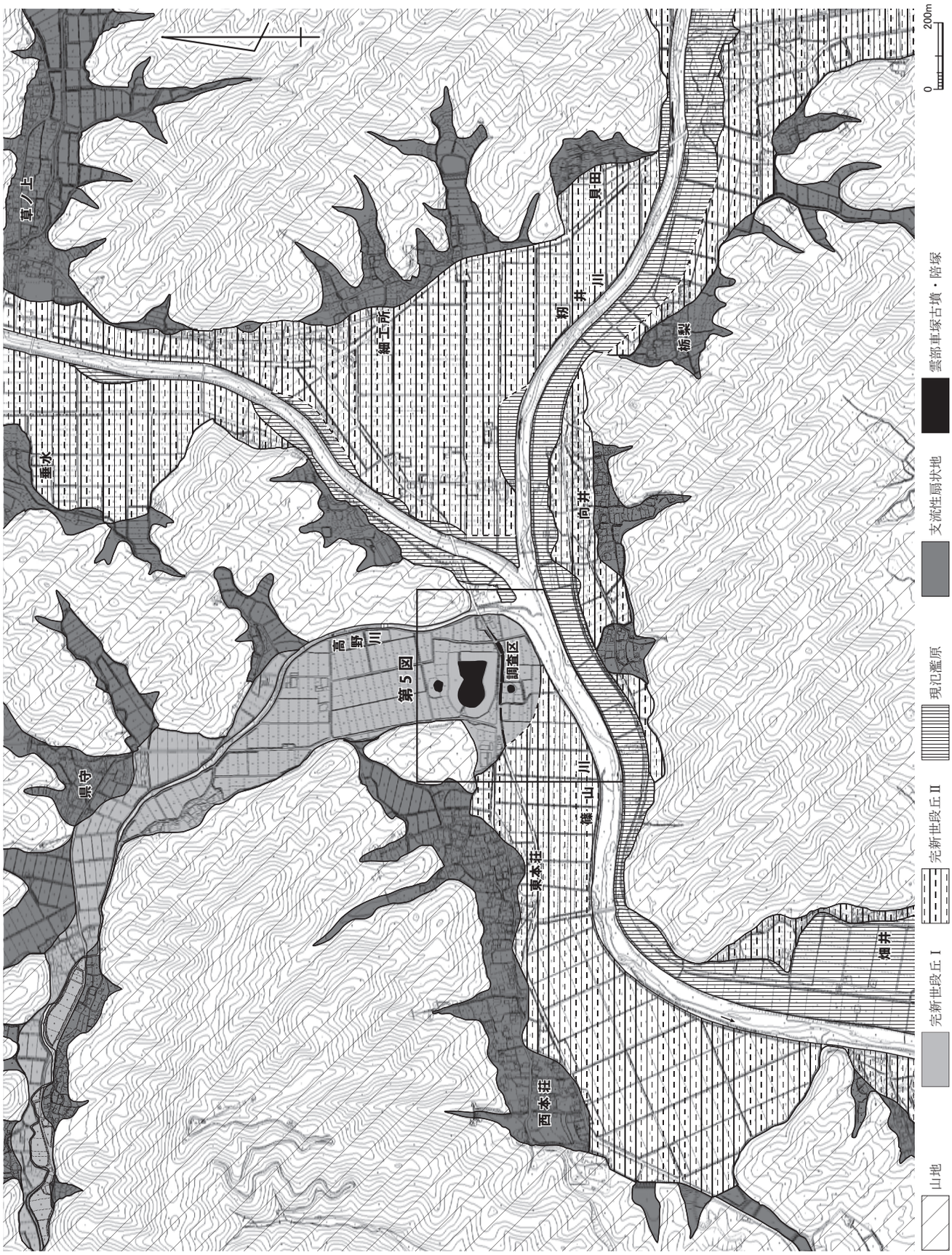
本稿では、雲部車塚古墳における地形環境を明らかにしたい。調査では、当該遺跡付近の地形を分類するとともに、調査区（Ａ区～Ｇ区）で堆積物の観察を実施した。地形分類では、まず２万分の１空中写真を判読することによって調査区周辺の地形面を区分し、ついで5,000分の１空中写真の判読と現地踏査にもとづいて調査区付近における微地形の分類を試みた。他方、堆積物に関しては、各調査区で遺構検出面より上位と下位のものを観察した。とくにＡ区とＥ区では、遺構検出面から深さ2.3ｍおよび３ｍのトレンチを掘削し、堆積物の観察を行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境を考察した。

２　調査区付近の地形分布

（１）調査区周辺の地形

本遺跡の調査区は篠山盆地の東部に位置する。そこでは、標高400～500ｍの山地がみられ、それを縫うように篠山川がおおむね北東から南西へ蛇行して流れる。篠山川は調査区の約200ｍ南東で支流の籾井川と高野川を合わせる。篠山川と籾井川沿いには幅300～700ｍの狭長な平野が開け、規模の小さい高野川に沿う平野は最大350ｍの幅をもつ谷の中に発達する。このような平野は完新世段丘、現氾濫原、および支流性扇状地に分けられる（第４図）。中でも完新世段丘は２面に細分され、本稿では高位のものを完新世段丘Ⅰ、低位のそれを完新世段丘Ⅱと呼ぶ。

完新世段丘Ⅰは、高野川に沿う平野にのみ分布する。段丘面は高野川の下流へ緩やかに傾斜し、南端において比高約１ｍの段丘崖で完新世段丘Ⅱと接している。雲部車塚古墳とその南北にみられる陪塚は完新世段丘Ⅰの南部に立地し、調査区は周溝の南縁付近に位置する。完新世段丘Ⅱは篠山川と籾井川沿いの平野に広く認められる。これは現氾濫原と比高約１ｍの段丘崖で境される。本遺跡より約２㎞南南西に位置する宮ノ前向井遺跡の発掘調査では、この段丘に対比される段丘面から約2,500年前の貯蔵穴跡が検出されている[1)]。これは、完新世段丘Ⅱの形成より古い完新世段丘Ⅰの段丘化が約2,500年前以



第 4 図　調査区周辺の地形分類図

前であったことを示す。また、その西に位置する井ノ上森垣内ノ坪遺跡での調査によると、完新世段丘Ⅱは13世紀以降に段丘化したことが知られる[2)]。

現氾濫原は篠山川や籾井川に沿って分布する。これは、最も低い地形面で、洪水に伴う冠水の危険性が高い。調査区周辺では近年圃場整備が実施され、とくに東本荘と西本荘付近の篠山川右岸ではこの地形面が不明瞭となっている。支流性扇状地は背後の山地から堆積物が供給されてできたものである。これらは、山麓に点々と分布し、細工所や東本荘、西本荘などで複合扇状地をなす。地表傾斜は７～10％と急で、多くは完新世段丘Ⅱと、また高野川沿いの平野では完新世段丘Ⅰと傾斜変換線で接する。

(2) 調査区付近の微地形

高野川沿いに発達する完新世段丘Ⅰには、埋没した旧中州と旧河道がみられる。これらのうち、埋没旧中州は調査区付近に４つ認められる（第５図）。Ａ区中央部からＥ区西半部にかけては完新世段丘Ⅰの中央部にみられる埋没旧中州上に位置する。Ｃ区とＤ区では、この埋没旧中州上から弥生時代中期中ごろの方形周溝墓が１基ずつ検出され、Ｄ区では同時期の土坑が１基確認されている。これと同じ埋没旧中州上には、雲部車塚古墳の墳丘と２基の陪塚も立地しており、Ｃ区では古墳の周溝南端も認められる。Ｆ区とＧ区は東隣の埋没旧中州上に位置する。Ｆ区では、弥生時代中期中ごろの方形周溝墓が３基みられ、Ｇ区でも同時期の方形周溝墓が２基検出されている。

一方、調査区付近の埋没旧河道は２本認められる。ひとつは雲部車塚古墳の周溝北西部からＡ区西部へ延び、他の一つはＥ区東半部を通過する。これらは、ともに高野川の流路跡で、おおむね北北東から南南西へ延びる。Ａ区西部では、８世紀と13世紀の井戸跡が埋没旧河道上および東側の埋没旧中州末端上に分布する。また、Ｅ区東半部の埋没旧河道上では、南東へ延びる弥生時代中期の溝跡と古墳時代中期の流路跡が検出されている。流路跡は幅およそ3.8m、深さ約50cmの小規模なものである。

第５図　完新世段丘Ⅰにおける調査区付近の微地形

３．調査区における堆積物の特徴

調査区では、完新世段丘Ｉの堆積物が観察される（第６図）。その基本層序は下位から暗黄褐色の砂礫（第６図の堆積物27）、黄灰色のシルト（同図の堆積物16）、褐灰色～黄褐色の砂礫（同図の堆積物15）、黄褐色のシルト（同図の堆積物14）、暗褐灰色～暗灰色の砂礫とシルトの互層（同図の堆積物１～４）、および表土（現耕土と盛土）である。これらは表土を除いて洪水堆積物に相当する。

暗黄褐色の砂礫は扇状地の旧中州堆積物にあたる。混入する礫は、径２～８cmの亜角礫～亜円礫を主体とし、最大で径18cmを数える。Ａ区中央部からＥ区西半部にかけてとＦ区では、この砂礫に構成される微高地（旧中州）がみられ、その上面高度は少なくとも2.5m高い。

その上位にみられる黄灰色のシルト、褐灰色～黄褐色の砂礫、ならびに黄褐色のシルトは、連続性がよく、Ｅ区東半部を除く調査区で観察される。これらは全体として70cm以下の厚さで旧中州を覆う。そのうち、褐灰色～黄褐色の砂礫は主に径１～４cmの比較的細かい亜角礫～亜円礫からなる。また、黄灰色のシルトはＢ区で砂質シルトに、褐灰色～黄褐色の砂礫はＢ区とＣ区東部でシルト質砂礫に変化する。さらに上位に位置する暗褐灰色～暗灰色の砂礫とシルトの互層はＡ区西部にのみ認められる。これらは埋没旧河道上の低所を約50cmの厚さで埋めている。中でも最下位にみられる暗褐灰色のシルト（同図の堆積物４）は、土壌化した堆積物で、８～14世紀の遺物を含む。また、砂礫（同図の堆積物１）とシルト質砂礫（同図の堆積物３）は径４cm以下の礫によって構成される。

こうした堆積物には、Ａ区西部とＥ区東半部で旧河道堆積物が挟まれる。Ａ区西部の旧河道は25m以上の幅と2.5m以上の深さをもち、暗黄褐色の砂礫（同図の堆積物27）上面から切り込む。これは黒褐色のシルト（同図の堆積物18）を挟む暗黄灰色の砂礫（同図の堆積物17・19）によって埋積されており、その礫は径2～6cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。

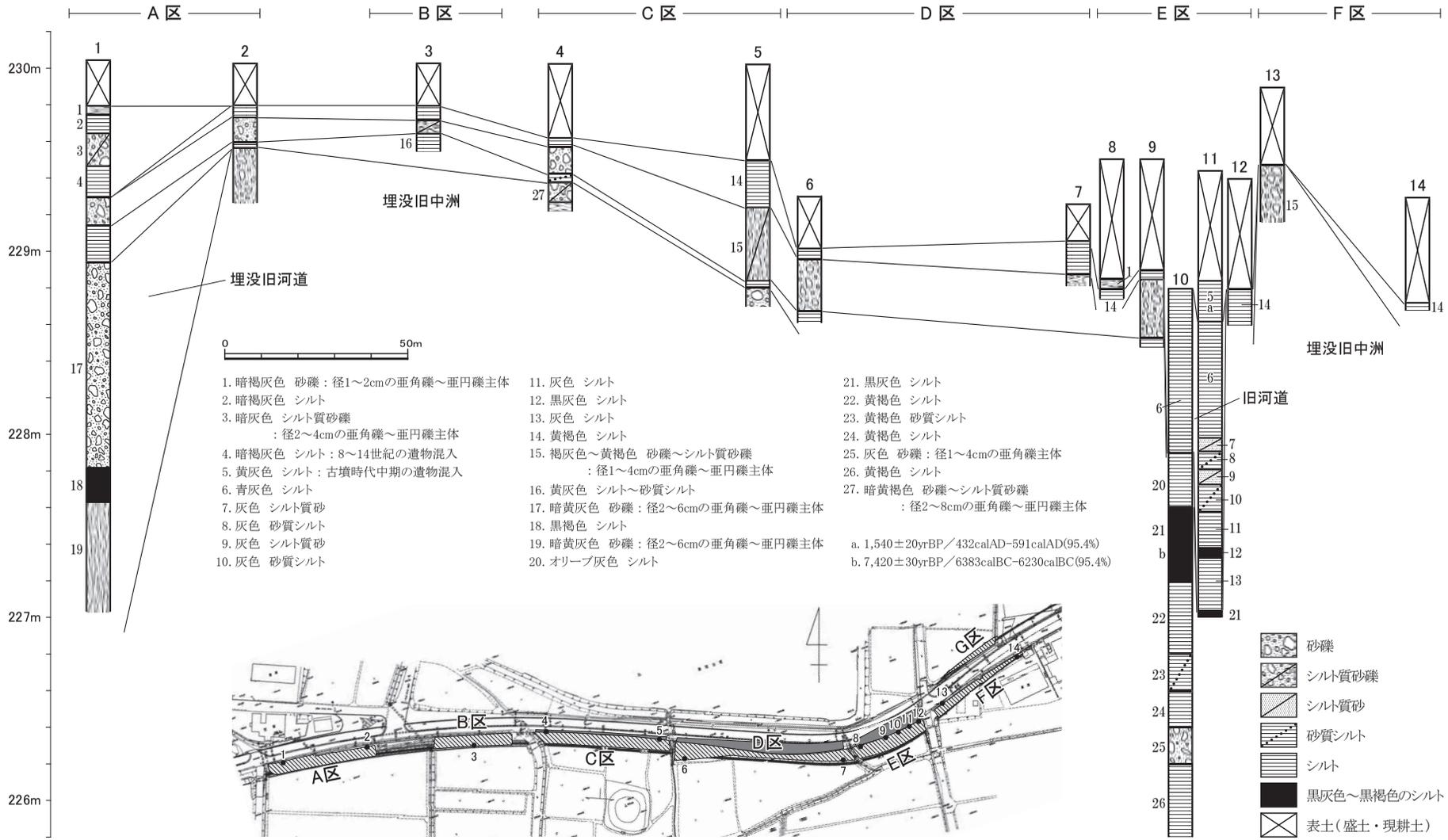
他方、Ｅ区東半部ではほぼ同じ個所に２本の旧河道が認められ、下位の旧河道堆積物が上位の旧河道に切られている。下位の旧河道は暗黄褐色の砂礫（同図の堆積物27）上面から切り込むと推定される。深さは少なくとも2.1mあり、幅は不明である。これは主にシルトなどの細粒堆積物（同図の堆積物20～26）に埋積され、間に灰色の砂礫（同図の堆積物25）や黒灰色のシルト（同図の堆積物21）が挟まれる。湿地性堆積物に該当する黒灰色シルトの放射性炭素年代測定値は7,420±30yrBPである[3)]。

上位の旧河道は、深さが約1.9m、幅がおよそ25mあり、黄褐色のシルト（同図の堆積物14）を切る。これは青灰色や灰色などのシルト質砂や砂質シルト、シルト（同図の堆積物６～13）に埋積されている。Ｅ区東部で検出された小規模な流路跡は、この堆積物を切っており、若干低い旧河道上に水が流れた際形成されたものである。流路を埋積する黄灰色のシルト（同図の堆積物５）は古墳時代中期の遺物を含み、そこから出土した木製品からは1,540±20yrBPの放射性炭素年代測定値が得られている[4)]。

４．調査区付近における地形環境の変遷

これまでに述べた事柄から次のような地形環境の変遷が考察される。

〔ステージ1〕　調査区付近では、高野川によって砂礫が堆積し、扇状地が形成された。これに伴ってＡ区中央部からＥ区西半部にかけてとＦ区では中州がつくられ、Ａ区西部やＥ区東半部には高野川が流れた。Ｅ区東半部の流路は7,400年前ころにシルトをはじめとする細粒堆積物によって、またＡ区西部の流路はその前後に砂礫などによって埋積された。



第 6 図　調査区における堆積物

〔ステージ2〕　約7,400年前以降、数度にわたる高野川の氾濫によってシルトや砂礫などが扇状地上に堆積した。そのため、旧中州と旧河道は地下浅所に埋没していった。

〔ステージ3〕　扇状地の微地形が埋没した後、高野川が再びE区東半部を流下した。このとき形成された流路には洪水に伴うシルト質砂や砂質シルト、シルトが堆積し、それはほぼ埋積された。

〔ステージ4〕　旧河道の埋積以降2,500年前までのある時期に、高野川に沿う埋没扇状地は篠山川や高野川の下方侵食によって段丘化した（完新世段丘Ⅰの形成）。その結果、完新世段丘Ⅰは洪水のほとんど及ばない安定した環境となった。このような環境の下、弥生時代中期には完新世段丘Ⅰの埋没旧中州上に方形周溝墓がつくられた。

〔ステージ5〕　完新世段丘Ⅰでは安定した環境がさらに続き、古墳時代中期には南部の埋没旧中州上に雲部車塚古墳の墳丘とその陪塚が築造された。このころ、段丘面においてわずかに低かったE区東半部の旧河道上では、小規模な流路の形成と埋積がみられた。

〔ステージ6〕　８世紀に入ると、Ａ区西部における完新世段丘Ⅰの埋没旧河道上に井戸がつくられた。また13世紀にも埋没旧河道の東側で再び井戸が掘削され、14世紀以降には段丘面で数度発生した水流に伴って埋没旧河道上に砂礫やシルトなどが局所的に堆積した。さらにそれ以降、篠山川や籾井川などによる下刻が発生し、各河川沿いで段丘化が起こった（完新世段丘Ⅱの形成）。

５．おわりに

雲部車塚古墳の調査区は篠山盆地東部の完新世段丘Ⅰに位置する。この段丘は、盆地東部の平野において最も高位の地形面にあたり、篠山川の支流である高野川沿いにのみ認められる。完新世段丘Ⅰは、約7,400年前以前に形成された扇状地がそれ以降に埋没し、段丘化したものである。段丘化は扇状地の埋没後2,500年前までのある時期に起こり、段丘面はその後洪水のほとんど及ばない安定した環境となった。

こうした完新世段丘Ⅰの南部にみられる埋没旧中州上には、弥生時代中期に方形周溝墓が数多くつくられ、古墳時代中期には雲部車塚古墳の墳丘と陪塚が築造された。これは、段丘面の環境が安定していたことに加えて、埋没旧中州上が排水されやすい高燥な環境であったためと考えられる。とくに、雲部車塚古墳の立地については、そこが付近一帯の平野において唯一存在する最も高い地形面であり、南に広がる篠山川沿いの平野を眺望するのに適していたことも大きい原因に数えられる。他方、埋没旧河道上とその側（埋没旧中州末端上）には、８世紀と13世紀に井戸が掘削された。これは、埋没旧河道での地下水位が比較的高かったことに起因すると考えられる。本遺跡では、以上のような人間活動と地形環境の深い係わりが認められるのである。

註

1）兵庫県教育委員会『小谷追谷口遺跡・宮ノ前向井遺跡・井ノ上森垣内ノ坪遺跡』、2010年

2）拙稿「小谷追谷口遺跡、宮ノ前向井遺跡および井ノ上森垣内ノ坪遺跡の地形環境」、兵庫県教育委員会『小谷追谷口遺跡・宮ノ前向井遺跡・井ノ上森垣内ノ坪遺跡』所収、2010年

3）この放射性炭素年代測定値は(株)加速器分析研究所によるものである。

4）前掲3）

第５章　まとめ

第１節　雲部車塚古墳について

１　地形

昭和58年度の篠山町教育委員会による調査（第１～３地区）と平成17年度の兵庫県教育委員会による調査（Ａ～Ｇ区）の２度の本発掘調査で、弥生時代中期、古墳時代、平安時代、鎌倉～室町時代の遺構を検出した。これらの遺構の検出面は第２地区とＣ区が最も高く、そこからは東西に高さを減じ、第３地区とＥ区で最も低くなり、Ｆ・Ｇ区で一旦高くなった後、高野川に向かって下がっていく。遺構検出面の標高はＣ区で229.7ｍ、西端のＡ区で228.9ｍ、Ｅ区で228.8ｍとなっており、約90cmの高低差がある。さらに、Ｃ区の遺構検出面は耕作土直下であり多少の削平を受けているのに対し、Ｅ区では現耕作土を含め約70cmの堆積土があり、それほどの削平を受けていないものと思われることから、現在よりは高低差が大きかったものと思われる。最も低いＥ区では旧河道ＳＤ05が検出されており、この旧河道に向けて東西から下がってくる地形を呈していたものと思われる。

宮内庁による雲部車塚古墳の墳丘裾護岸その他の工事に伴う事前のトレンチ調査でも、墳丘下の地山面は大まかには西側の後円部下が高く、東の前方部側が低くなっていることが確認されている。地山面の標高は前方部下がＣ区とほぼ同じ高さとなっていることから、古墳築造以前の地形は後円部下が最も高く、そこから南西方向のＡ区および南東方向のＥ区旧河道に向かって傾斜していたものと思われる。

地形環境分析によると、古墳が立地する完新世段丘Ｉは高野川沿いにのみ認められるもので、この周辺で最も高位の平地を選地していたことが判明した。

２　遺構

検出された遺構のうち、弥生時代中期の遺構は「い号陪塚」から東側で方形周溝墓や土壙墓群などを中心に分布しており、墓域が広がっている。もっとも東のＧ区で柱穴なども検出されており、この付近から北側に居住域が存在する可能性が高い。

古墳時代の遺構はＣ区の溝ＳＤ01とＥ区で検出された旧河道ＳＤ05が該当する。ＳＤ01は現在の周濠と約12ｍの間隔で並行し、約40ｍの長さを検出している。ＳＤ01を西に延長すれば南肩部が後円部背後の周庭帯地割の外縁に連続するかたちとなり、この溝は周庭帯の外縁を区画する外周溝にあたるものと思われる（第７図）。Ｃ区の北に接する第１地区では遺構や盛土が確認されていないことから、ＳＤ01と周濠の間にどういった施設が設けられていたかについては不明と言わざるをえないが、外周溝が検出されている他例からすると、周濠の外堤が存在していたものと思われる。溝内から出土した埴輪片などは外堤上に配置されていた物が落ち込んだものと考えられる。

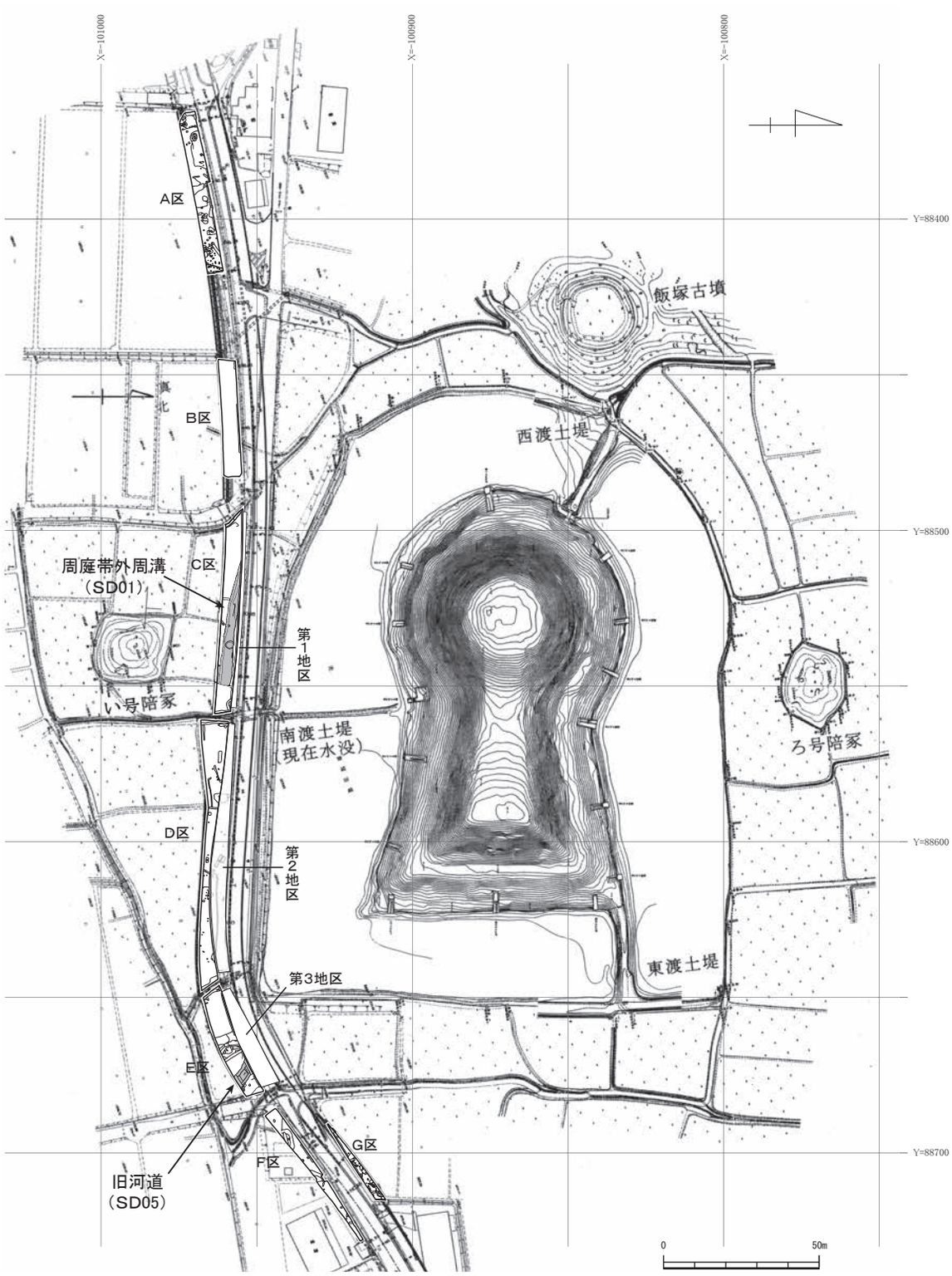
旧河道ＳＤ05は下層に弥生時代中期の土器を、上層に埴輪片を包含することから、古墳築造の際には開口していた可能性が高い。また旧河道周辺には瓦器などとともに多くの埴輪を含む包含層の堆積や溝ＳＤ03・04が確認でき、Ｅ区は中世段階には今回検出したような状態が完成していたものと思われる。

３　小結

以上が調査成果とそのまとめであるが、今回の調査成果の中で最も重要なものはＣ区で外周溝とみられる溝ＳＤ01が検出されたことである。雲部車塚古墳の周濠外側には周庭帯が存在することは従来から

知られていたが、この周庭帯の外側ラインに連続する形で外周溝が検出されたことにより、周庭帯は周濠外側の外堤の痕跡である可能性が高まった。外周溝の検出された位置が「い号陪塚」と雲部車塚古墳の中間である点も重要で、古墳の築造当初は両者の間に外堤が存在したことになる。この発見は、いまだ不明なところの多い周庭帯と陪塚の関係の理解を進める一助となる成果である。

周濠の南東隅に接するＥ区の旧河道ＳＤ05は、周濠の排水機能を担っていたと予想される。



第 7 図　周庭帯と外周溝（徳田ほか 2010 の第 24 図と第 26 図に調査区を合成して作成）

第２節　弥生時代の方形周溝墓群・土壙墓群について

１　方形周溝墓

方形周溝墓は８基を報告するが、全体を検出できたものはなく、埋葬施設も遺存していなかった。そのため方形周溝墓である確証が低い例も含まれているが、昭和58年度の篠山町教育委員会による調査（以下、「昭和58年度調査」とする）によって同時期の墓域であることが判明しており、方形周溝墓群の広がりの可能性を示すという意味合いも込めて、あえて方形周溝墓として取り扱う。

弥生時代の遺構が見つかったのはＣ区～Ｇ区の範囲で、そのうち方形周溝墓はＣ区・Ｄ区・Ｆ区・Ｇ区で散在的に検出されており、墓域が広い範囲にわたっていることがうかがえる。一方、Ｆ区・Ｇ区では土坑・柱穴の密度も高いため、居住域も重複しているものと考えられる。

周溝の形状は、方形のもの（ＳＸ02・04・06～08）、隅丸方形のもの（ＳＸ03）、円とも方ともとれないような形状（ＳＸ01・05）があり、そのうちＳＸ04・06・08は隅が途切れるタイプとみられる。ただし概して遺構の残存状況が悪く、ＳＸ02・05なども途中で溝が消えてしまうが、それが陸橋部の存在を示すものかどうか不明である。

周溝に囲まれた墳丘部分の規模については不明な点が多いが、それを推測するうえで、溝の大きさが１つの手掛かりとなる。最大のＳＸ07は、溝の幅が約２ｍ、深さ0.5～0.6ｍで、周溝の東西の内法が8.5ｍである。それに次ぐ大きさのＳＸ03～05は、溝の幅が約１～1.5ｍ、深さ0.25～0.4ｍで、周溝の内法は一辺４～５ｍ程度かと予想される。ＳＸ01・02・06・08は溝の幅が約0.5～１ｍ未満、深さ0.1～0.3ｍ程度で、辛うじて削平を免れた部分も多い。周溝の内法はＳＸ02の東西幅が5ｍ以上あるが、それ以外はより小規模かと予想される。

それぞれの方形周溝墓は溝を共有することなく、また密集することもなく単独で築かれている。ただしＳＸ04はＳＸ03の墳丘部分を切っており、通常の周溝墓のあり方からすると異様な状況である。方位に関しても、ＳＸ01と02、ＳＸ03と04、ＳＸ06と08については共通性が認められるが、全体としてはまちまちで一貫性がない。

２　昭和58年度調査との関係

昭和58年度調査では、今回のＤ区の北側に隣接する第２地区において５基の墓壙が検出された。これらの埋葬遺構は周囲を区画する溝などを伴わない土壙墓群であったとみられ、そのうち３号土壙墓は木棺墓であったとされる。１～３号土壙墓の延長線上にはＤ区の土坑ＳＫ01が存在しており、両者には何らかの関係があったと推測できる。

この他、第２地区の２号土壙に続く落ち込みはＤ区でも検出されており、遺構の対応が確認できる。しかしＤ区のＳＸ02・ＳＤ02の延長は第２地区では見つかっておらず、Ｃ区・Ｅ区にそれぞれ隣接する第1地区、第3地区にいたってはまったく遺構が検出されていない。そこでそれぞれの遺構検出面のレベルから、両調査の関係を検証することとした。ただし両調査で用いられた基準高が同一とは限らないため、近接する遺構の検出面のレベルを比較して、まずその差を算出する。

もっとも近接する第２地区の１～３号土壙墓とＤ区のＳＫ01については、前者がおおよそ229.1ｍ、後者が228.95ｍの標高で検出されており、昭和58年度調査の基準高の方が今回のものに比べて約15cm高かったと判断できる。これを踏まえて他の調査区の遺構検出面を換算すると、第１地区の229.95ｍ

は229.8ｍ、第3地区の229.0～229.1ｍは228.85～228.95ｍに相当することになる。それに対してＣ区では229.7ｍ、Ｅ区では228.8ｍで遺構を検出しており、昭和58年度調査の第１・３地区では遺構面に達していなかった可能性が考えられる。

３　時期

方形周溝墓ＳＸ02～08・土坑ＳＫ01から出土した弥生土器を、同じ丹波地域の大集落遺跡である七日市遺跡(丹波市)、土器の共通性が強い播磨地域の玉津田中遺跡(神戸市)の土器編年と比較検討する。

ＳＸ03出土の広口壺(53)は、頸部に４本の断面三角形突帯を貼り付けており、玉津田中遺跡の土器分類（以下、「玉津分類」）の広口壺Ａに相当する。口縁端部は拡張して外側に面をとるものの、大きくは垂下しない。

ＳＸ04出土の高杯(46)は、鉢状の杯部に水平口縁をもつもので、玉津分類の高杯Ｆに相当する。水平口縁の端部は垂下していない。

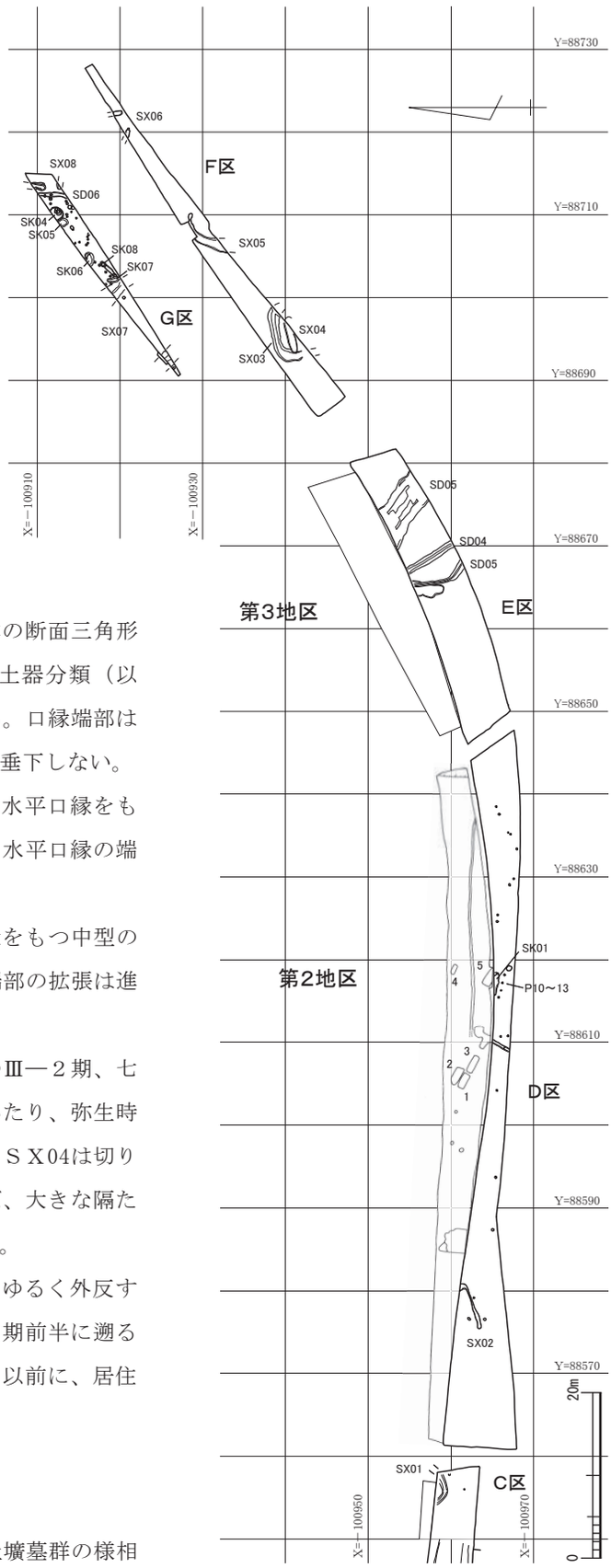
ＳＸ02出土の甕(41)は、「く」字状口縁をもつ中型の甕で、玉津分類の甕Ｃに相当する。口縁端部の拡張は進んでいない。

以上の特徴は玉津田中遺跡の土器編年のⅢ―２期、七日市遺跡の土器編年のⅢ―２期の段階にあたり、弥生時代中期中頃の様相を示している。ＳＸ03とＳＸ04は切り合い関係をもつが、土器の形態からみれば、大きな隔たりはなく、１つの形式に収まるものである。

なお、Ｇ区の柱穴Ｐ14出土の甕(67)は、ゆるく外反する口縁の端部にキザミメを施していて、中期前半に遡る可能性がある。Ｆ区・Ｇ区は、墓域となる以前に、居住域として利用されていた可能性がある。

４　小結

車塚の坪遺跡における方形周溝墓群・土壙墓群の様相は、周溝墓の規模に格差があり、土壙墓（木棺墓）のみのまとまりもあるものの、全体としては散在的で、大きなグループを形成しないという点が指摘できる。



第８図　弥生時代の遺構

それに比べて丹波市春日盆地の中央に位置する七日市遺跡では、階層差をもった複数の周溝墓群が形成されており、木棺墓群も別区画にまとまるといった、より複雑な様相を示している。ただし七日市遺跡の場合は造墓活動が中期末まで長期間継続した結果ともいえ、無条件で比較するわけにはいかない。

今回の調査結果はあくまで、中期中頃の墓域の一部が見えているだけに過ぎない。弥生時代の包含層の広がりは、雲部車塚古墳の墳丘の下にも続いており、少量ではあるが前期や後期の土器も含まれているので、各時期の居住域・墓域は、谷の奥側の微高地を中心に広がっていることが予想される。

第３節　おわりに

全長140ｍ以上の前方後円墳を調査する機会は滅多にないものだが、兵庫県ではこの雲部車塚古墳に続いて、平成20～22年に朝来市池田古墳が発掘され、周濠・渡土堤・葺石・大量の埴輪など大型前方後円墳の多様な内容が明らかとなっている。雲部車塚古墳においても、県教育委員会の調査と同時期に実施されていた宮内庁による陵墓部分の調査、明治時代に後円部の竪穴式石槨から出土した副葬品の京都大学考古学研究室と考古博物館による共同研究が相次ぎ、その成果は『兵庫県立考古博物館研究紀要　第３号　雲部車塚古墳の研究』に結実した。

本報告の調査概要もその中で、調査の主担当であった吉識雅仁によってレポートされているが、吉識は平成22年２月に急逝したため、報告書作成には関われなかった。そこで「第３章第１節　概要」「第５章第１節　雲部車塚古墳について」で、上記レポートの内容に一部加筆修正のうえ再掲して、その意を汲んだ。ただし編集者の力量不足のため、全体として不十分な点が多々あると思われるが、調査データを提示することで、今後の検討に委ねたい。

参考文献

篠山町教育委員会1984　『雲部車塚古墳－道路改良工事に伴う周庭帯の発掘調査報告書－』

篠宮　正1996　「第3節　弥生時代中期中頃から後半の土器（Ⅲ・Ⅳ期）」『玉津田中遺跡―第6分冊（総括編）―』（兵庫県文化財調査報告第135-6冊）兵庫県教育委員会

多賀茂治2002　「兵庫丹波における弥生土器の様相（予察）」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

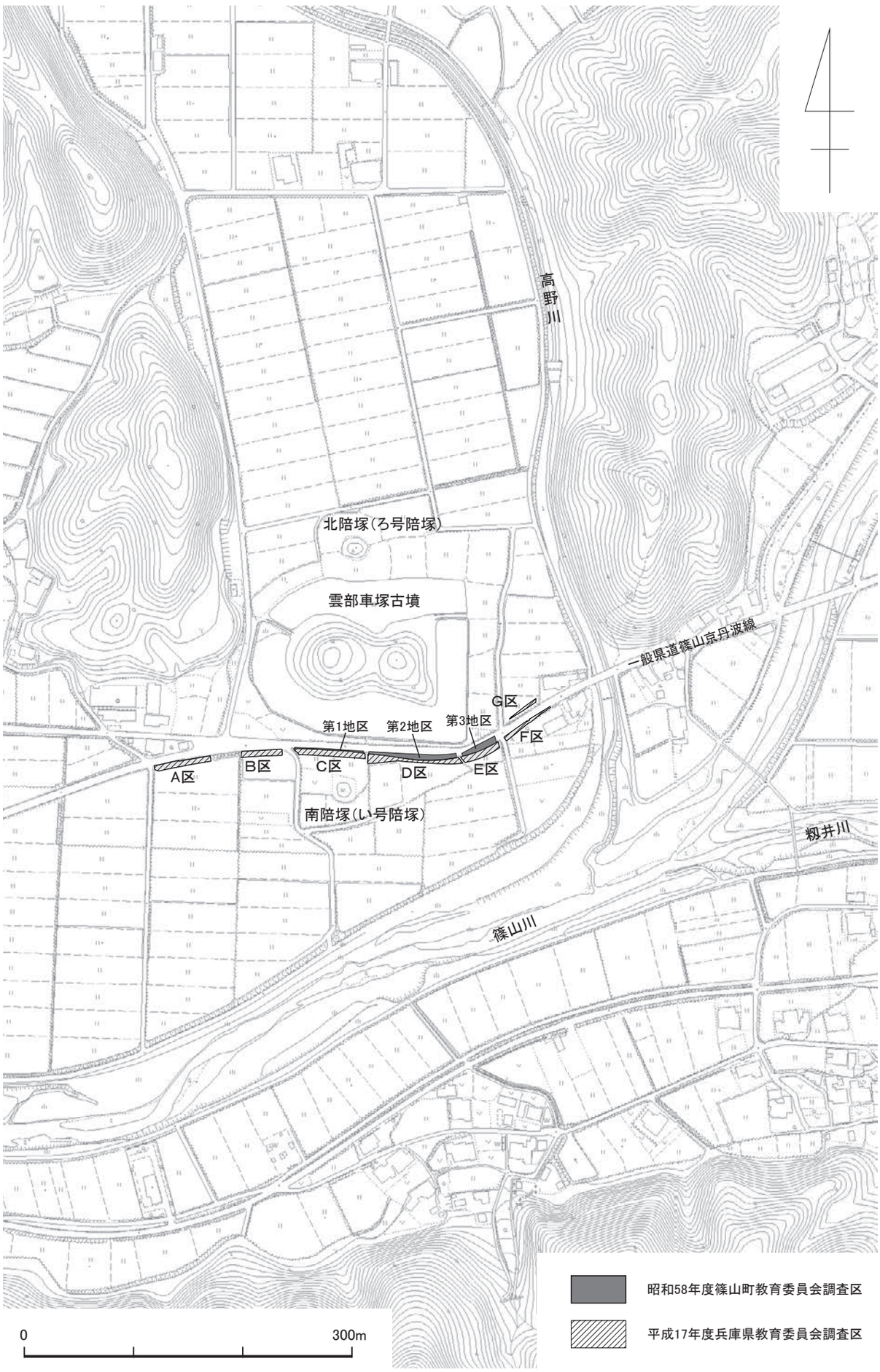
徳田誠志・有馬　伸・加藤一郎2006　「雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第57号　宮内庁書陵部

徳田誠志・有馬　伸・加藤一郎2010　「宮内庁書陵部による調査－2004（平成16）年」『兵庫県立考古博物館研究紀要　第3号　雲部車塚古墳の研究』兵庫県立考古博物館

兵庫県立考古博物館2010『兵庫県立考古博物館研究紀要　第3号　雲部車塚古墳の研究』

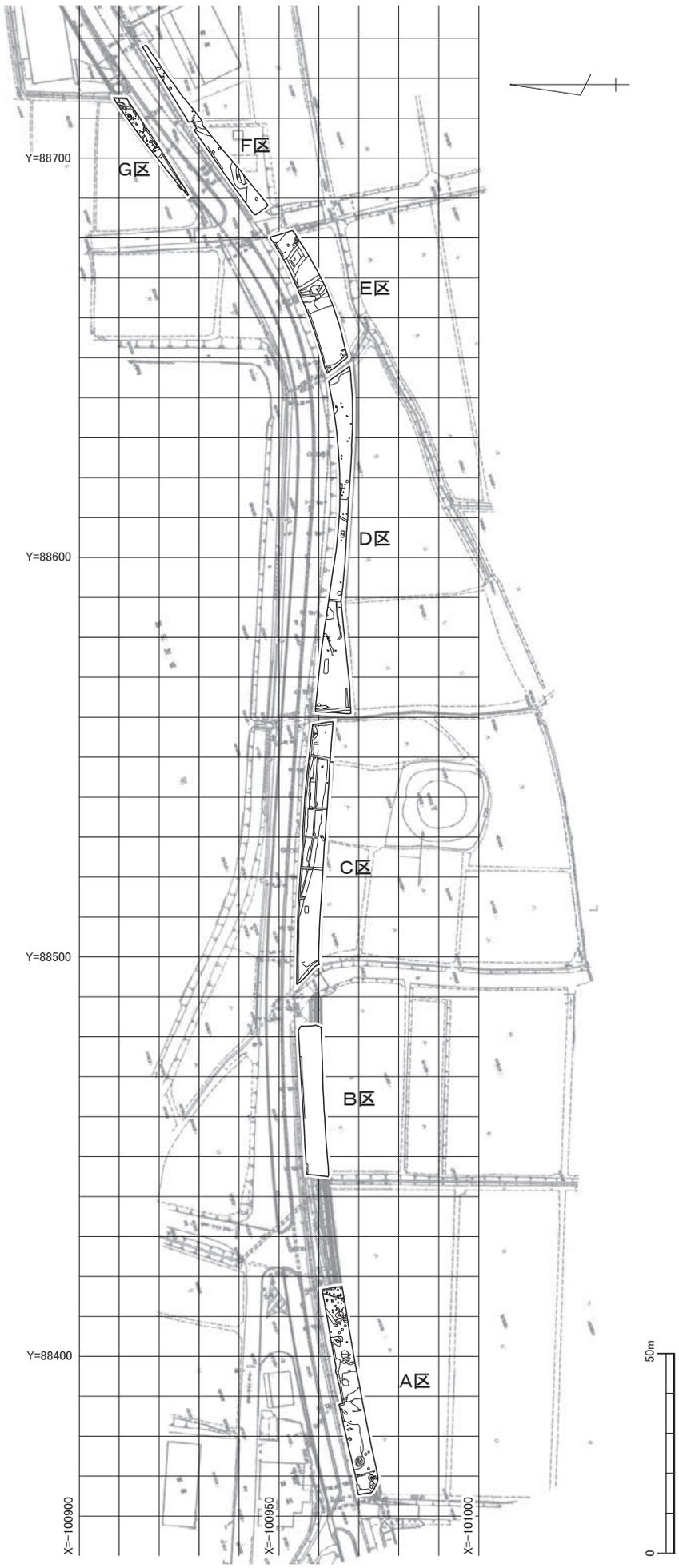
吉識雅仁2010　「古墳周辺の発掘調査－1983（昭和58）年・2005（平成17）年」『兵庫県立考古博物館研究紀要　第3号　雲部車塚古墳の研究』兵庫県立考古博物館

図　版

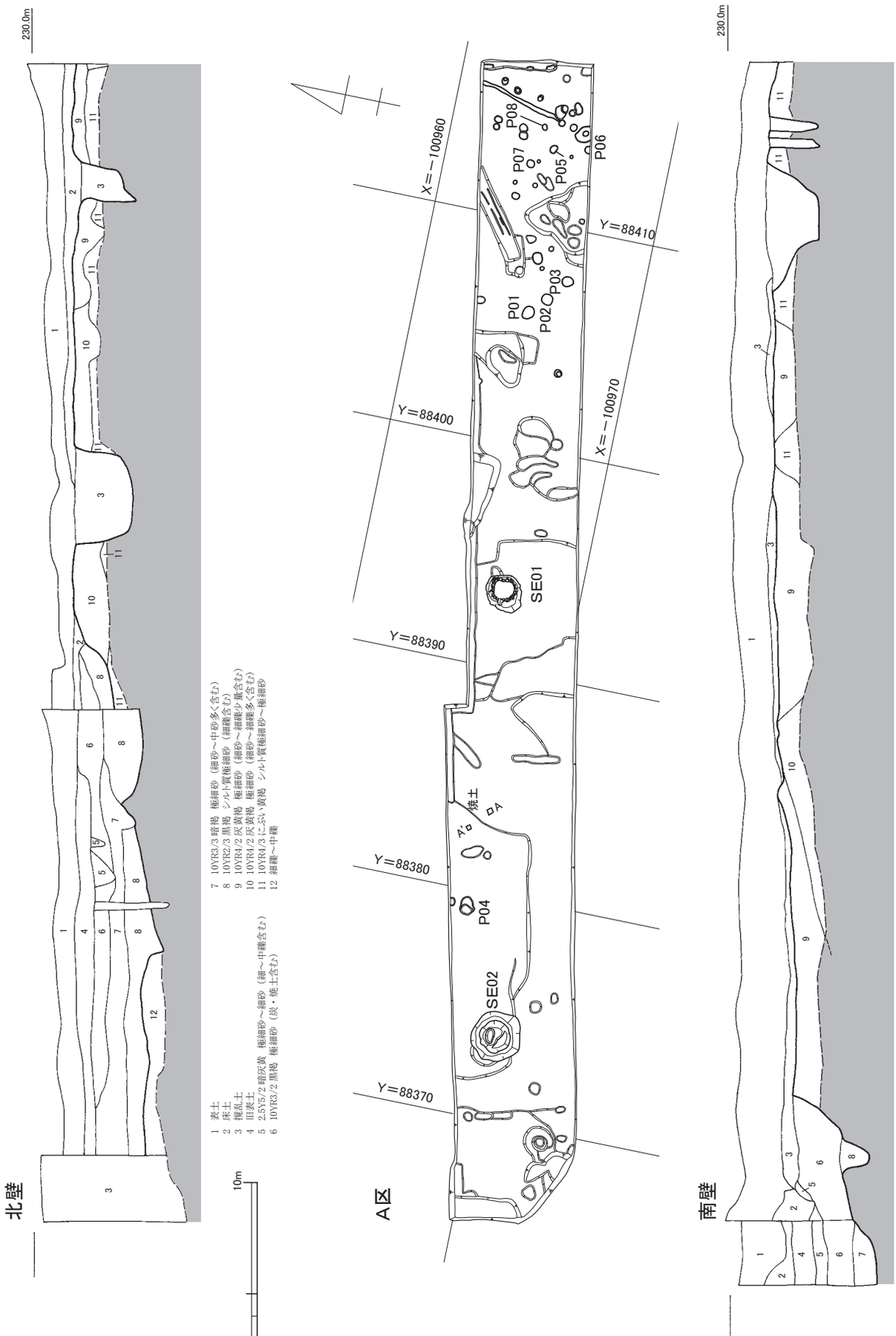

高野川
北陪塚(ろ号陪塚)
雲部車塚古墳
一般県道篠山京丹波線
G区
第1地区
第2地区
第3地区
F区
A区
B区
C区
D区
E区
南陪塚(い号陪塚)
籾井川
篠山川
0
300m
昭和58年度篠山町教育委員会調査区
平成17年度兵庫県教育委員会調査区

遺跡の位置

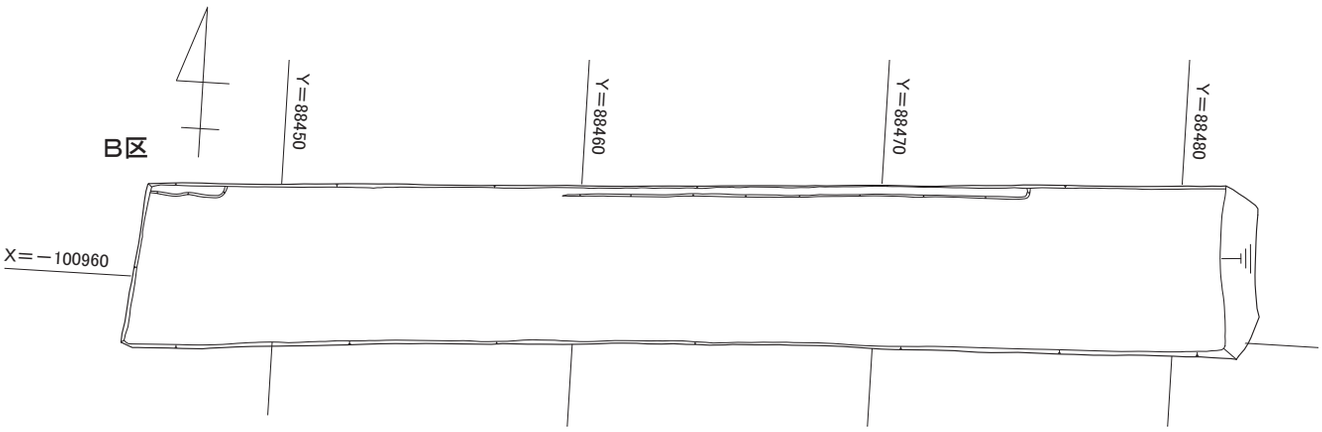
図版 2

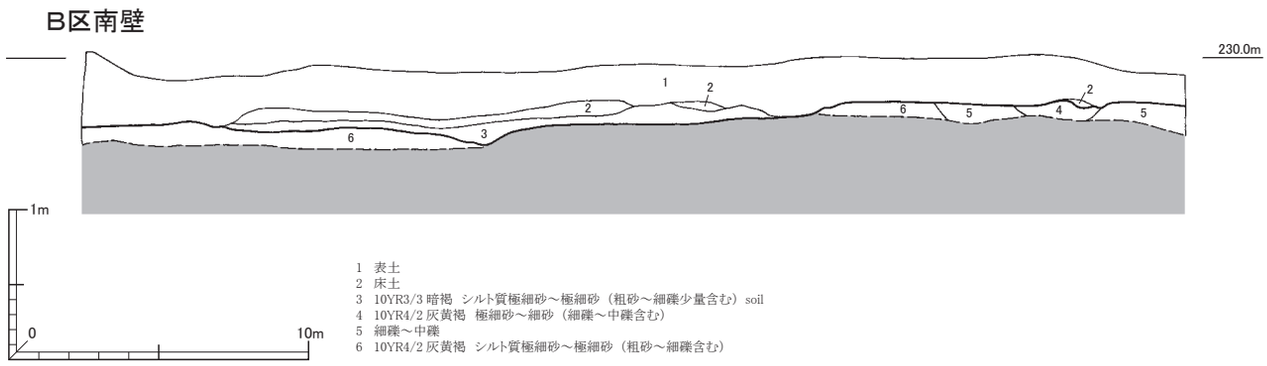

F区
G区
E区
D区
C区
B区
A区
Y=88700
Y=88600
Y=88500
Y=88400
X=−100900
X=−100950
X=−101000
0
50m

調査区の配置

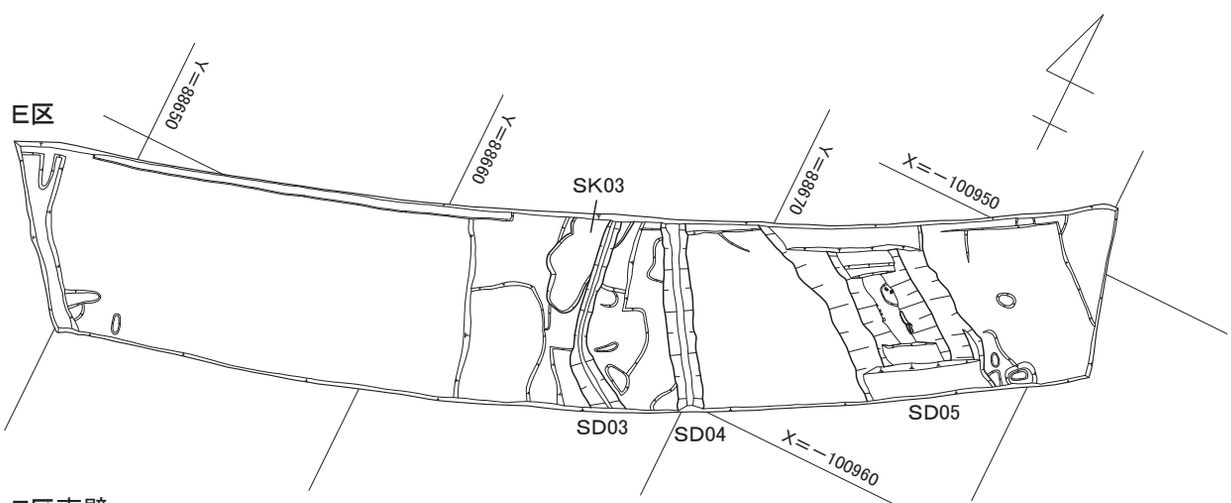

北壁
230.0m
1 表土
2 床土
3 攪乱土
4 旧表土
5 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～細砂（細～中礫含む）
6 10YR3/2 黒褐 極細砂（炭・焼土含む）
7 10YR3/3 暗褐 極細砂（細砂～中砂多く含む）
8 10YR2/3 黒褐 シルト質極細砂（細礫含む）
9 10YR4/2 灰黄褐 極細砂（細砂～細礫少量含む）
10 10YR4/2 灰黄褐 極細砂（細砂～細礫多く含む）
11 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～極細砂
12 細礫～中礫
0
1m
10m
A区
X=−100960
X=−100970
Y=88410
Y=88400
Y=88390
Y=88380
Y=88370
P01
P02
P03
P04
P05
P06
P07
P08
SE01
SE02
焼土
A
A'
B
B'
南壁
230.0m
1 表土
2 盛土
3 床土
4 旧表土
5 床土
6 10YR3/2 黒褐 細砂（粗砂～細礫含む、炭多く含む）
7 中砂～中礫
8 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂（細砂～細礫含む）
9 細砂～中礫
10 10YR3/3 暗褐 シルト質極細砂（粗砂～中礫含む）
11 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂（粗砂～細礫含む）

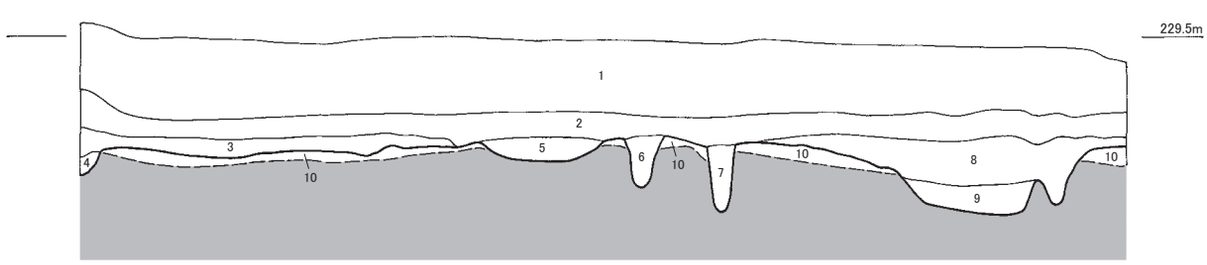
A区 平面図・断面図

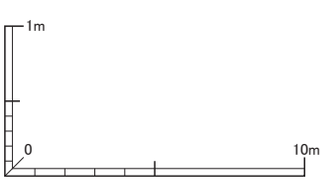




1 表土
2 床土
3 10YR3/3 暗褐 シルト質極細砂～極細砂（粗砂～細礫少量含む）soil
4 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂（細礫～中礫含む）
5 細礫～中礫
6 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂～極細砂（粗砂～細礫含む）



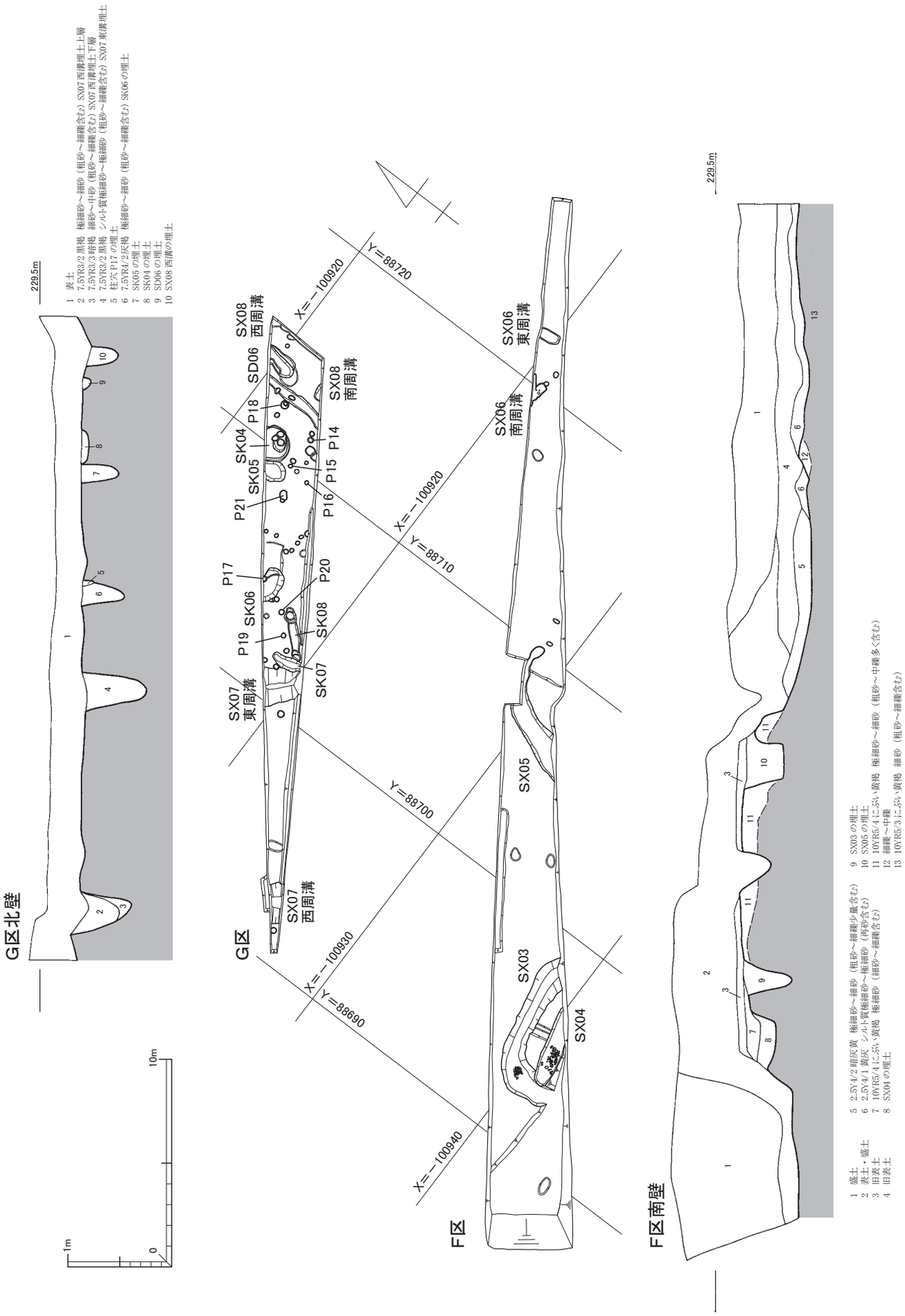




1 表土
2 2.5Y5/1 黄灰極細砂（細砂～細礫少量含む）
3 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂～極細砂（粗砂～細礫少量含む）
4 7.5GY5/1 緑灰 シルト質極細砂
5 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂（粗砂含む）
6 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂（粗砂含む）SD03 の埋土
7 7.5YR4/2 灰褐 シルト質極細砂（粗砂～細礫含む）SD04 の埋土
8 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂（粗砂含む）SD05 の埋土上層
9 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂～細砂（粗砂～細礫少量含む）SD05 の埋土下層
10 10YR5/6 黄褐 細砂～極細砂（細礫多く含む）

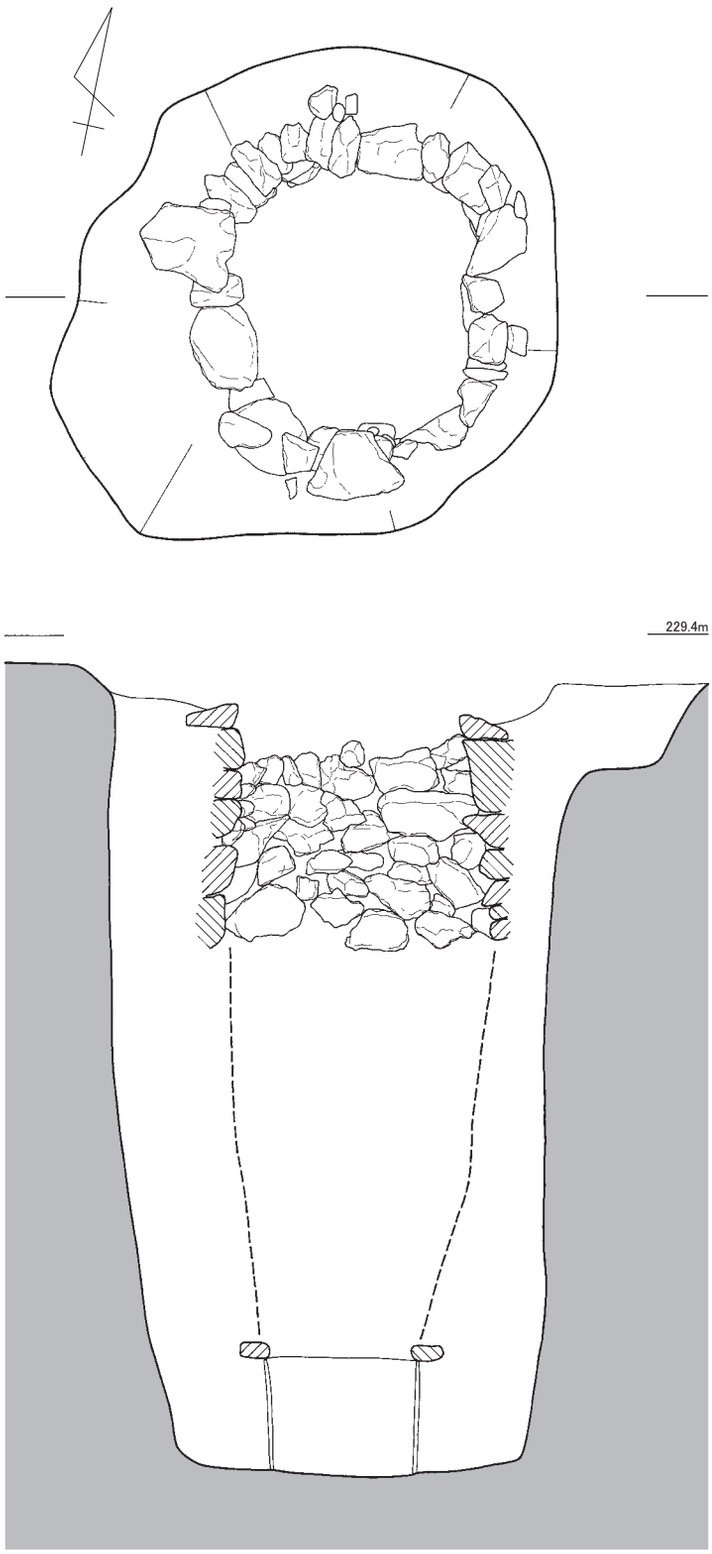
B・E区 平面図・断面図

図版 6



F・G区 平面図・断面図

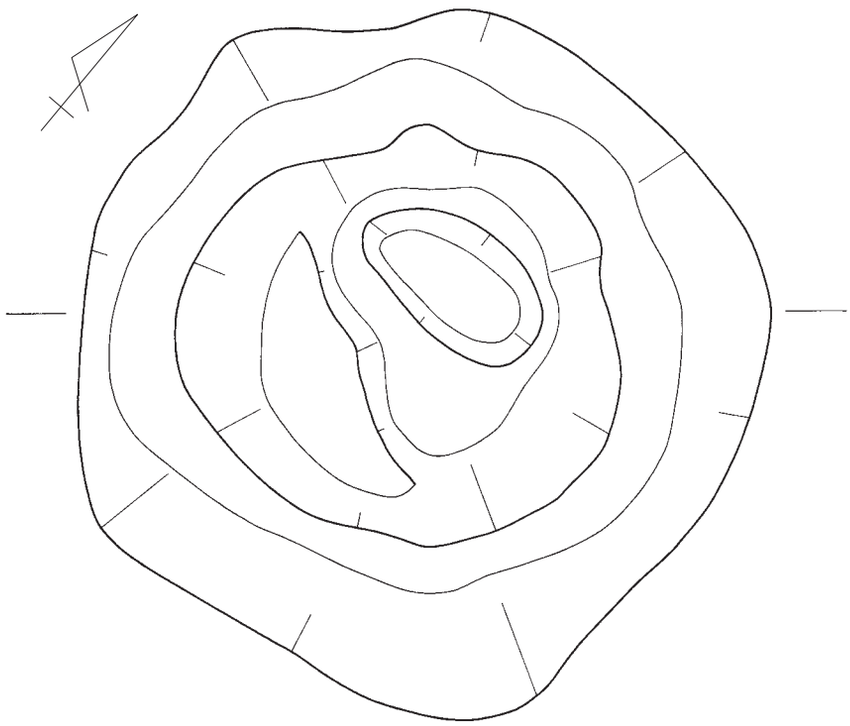
A区　SE01

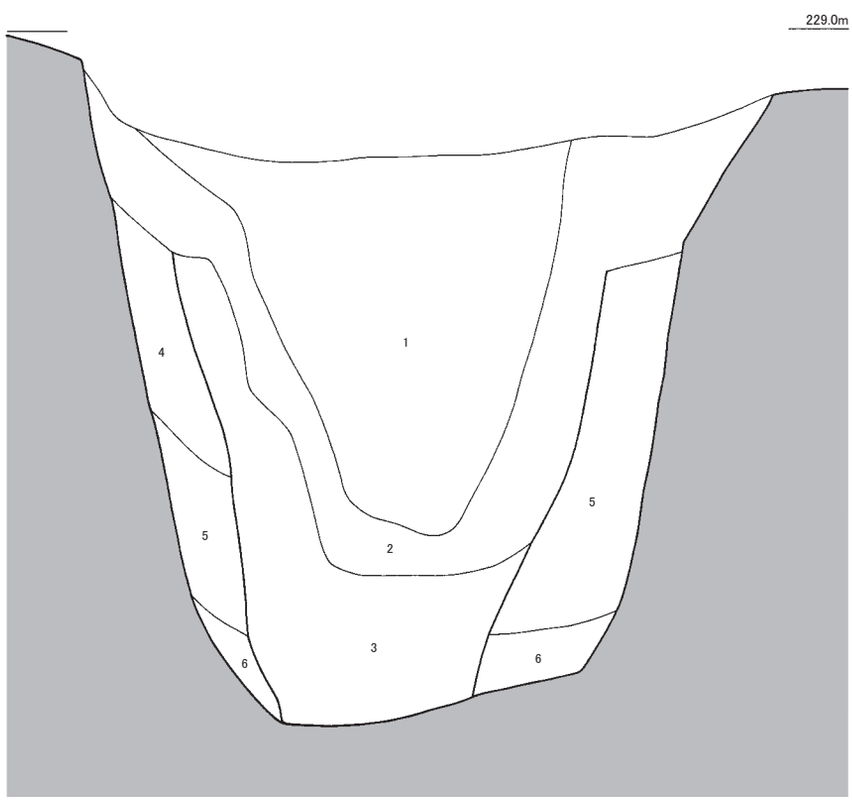


遺構(1)　井戸SE01

図版 8

A区　SE02

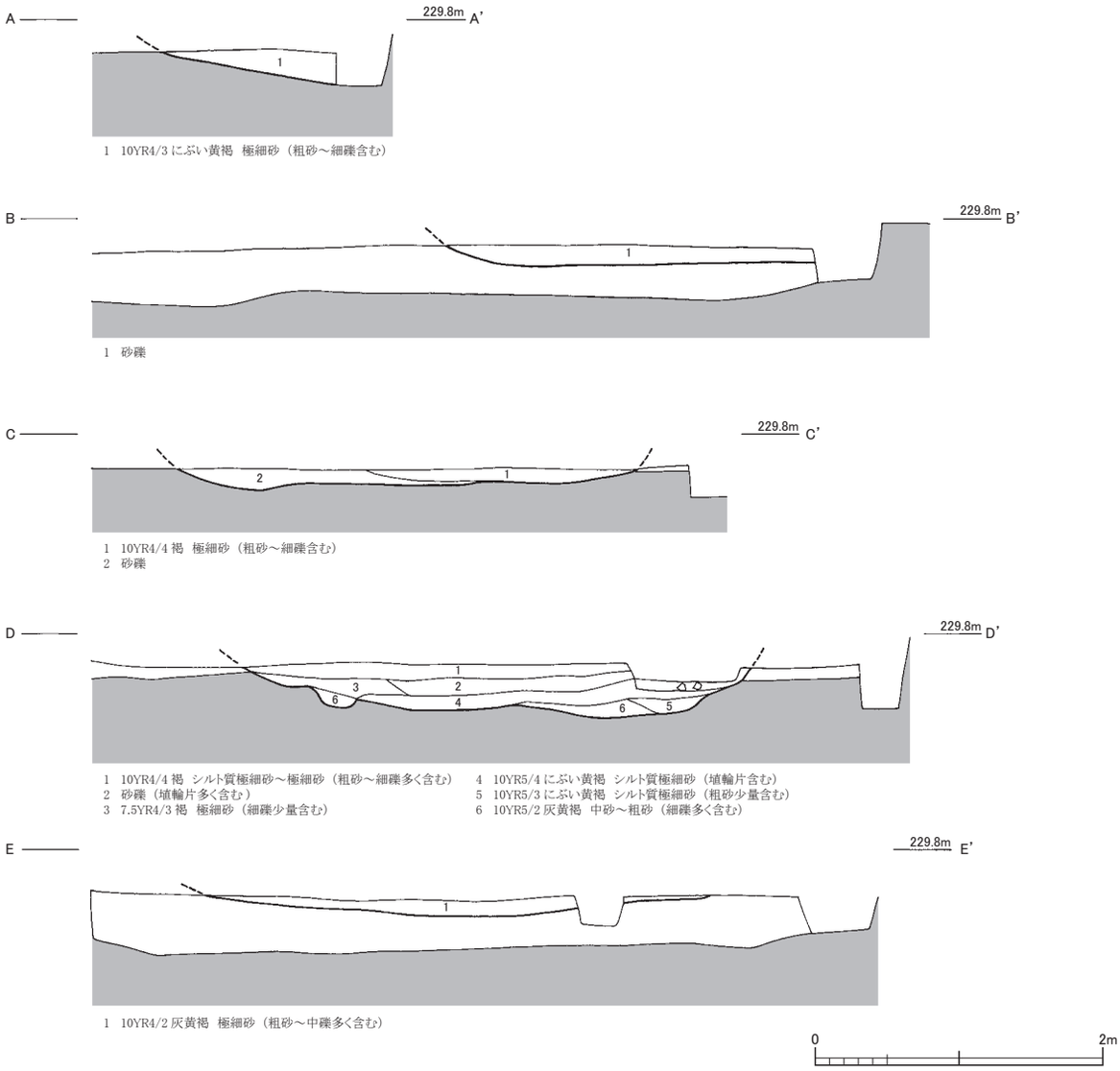


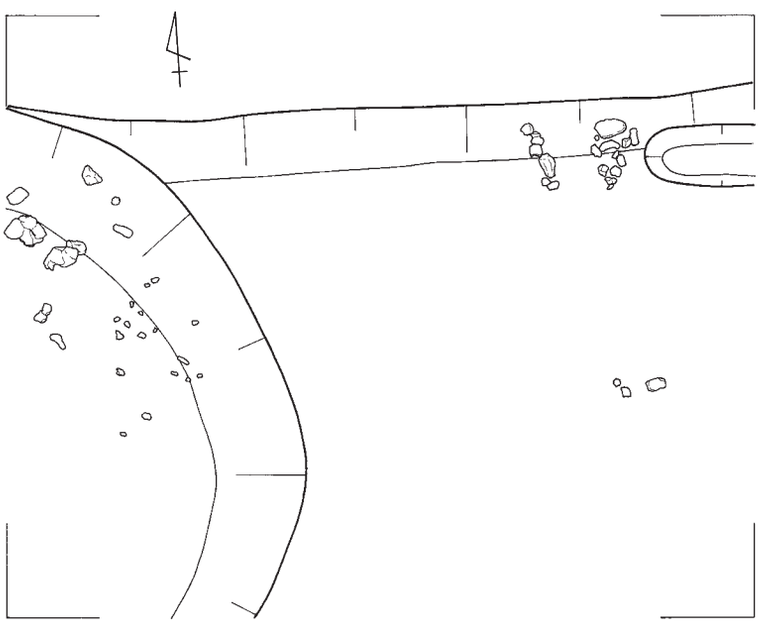


1　砂礫
2　10YR3/3 暗褐　シルト質極細砂～極細砂（細砂～中砂多く含む）
3　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂（粗砂、 黄色土ブロック含む）
4　10YR5/6 黄褐　シルト質極細砂（粗砂含む）
5　10YR3/3 暗褐　シルト質極細砂（粗砂～中礫含む、 炭含む）
6　N4 灰　シルト質極細砂（粗砂～細礫含む）

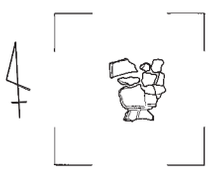
遺構（2）　井戸SE02

C区　SD01





土器出土状況 1



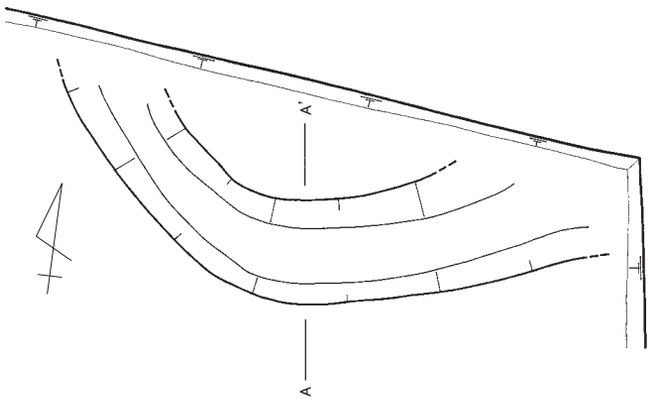
土器出土状況 2

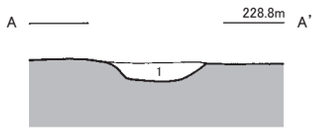
0　1m

遺構(3)　古墳の外周溝SD01

図版 10

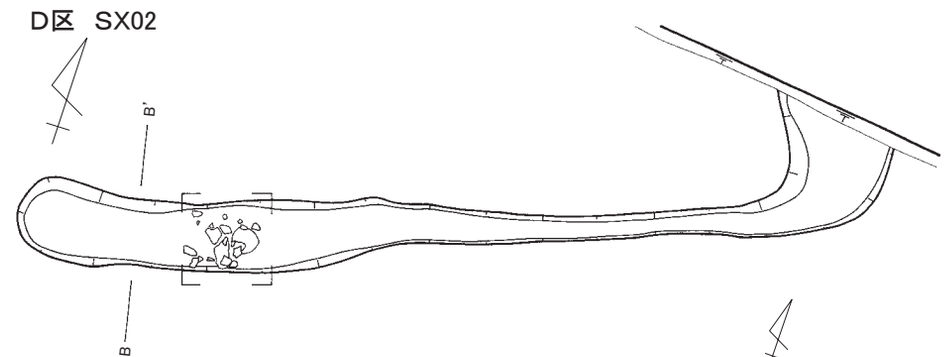
C区　SX01

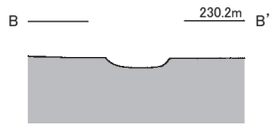


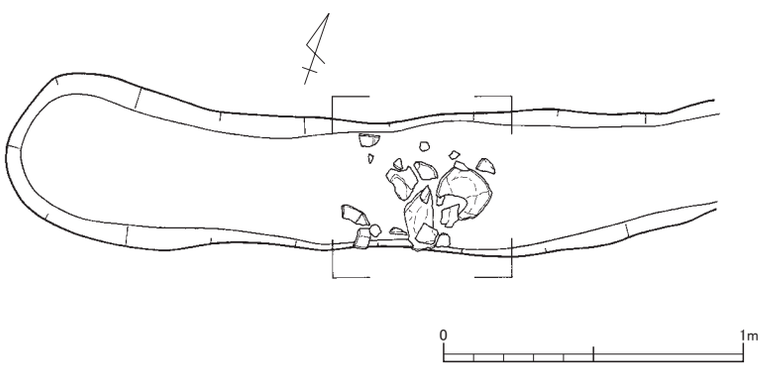


1　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂（細礫少量含む）

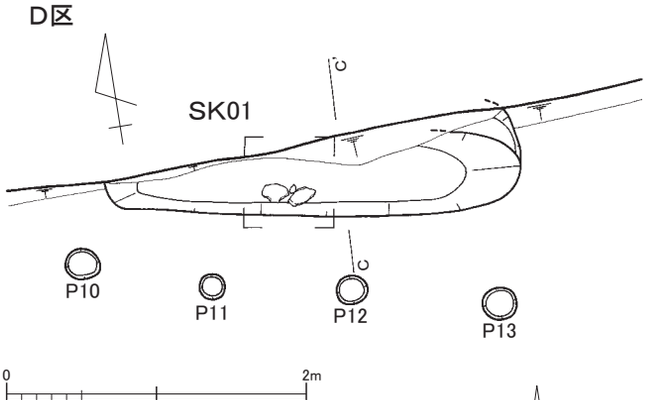
D区　SX02

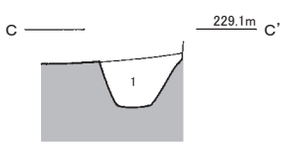




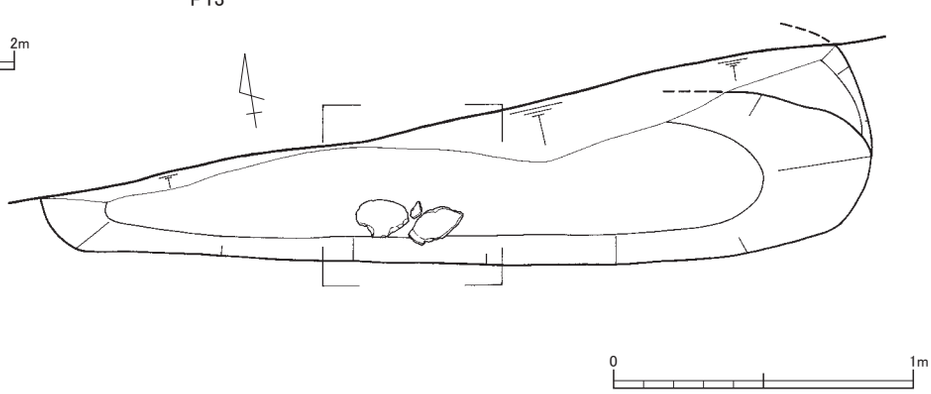


D区



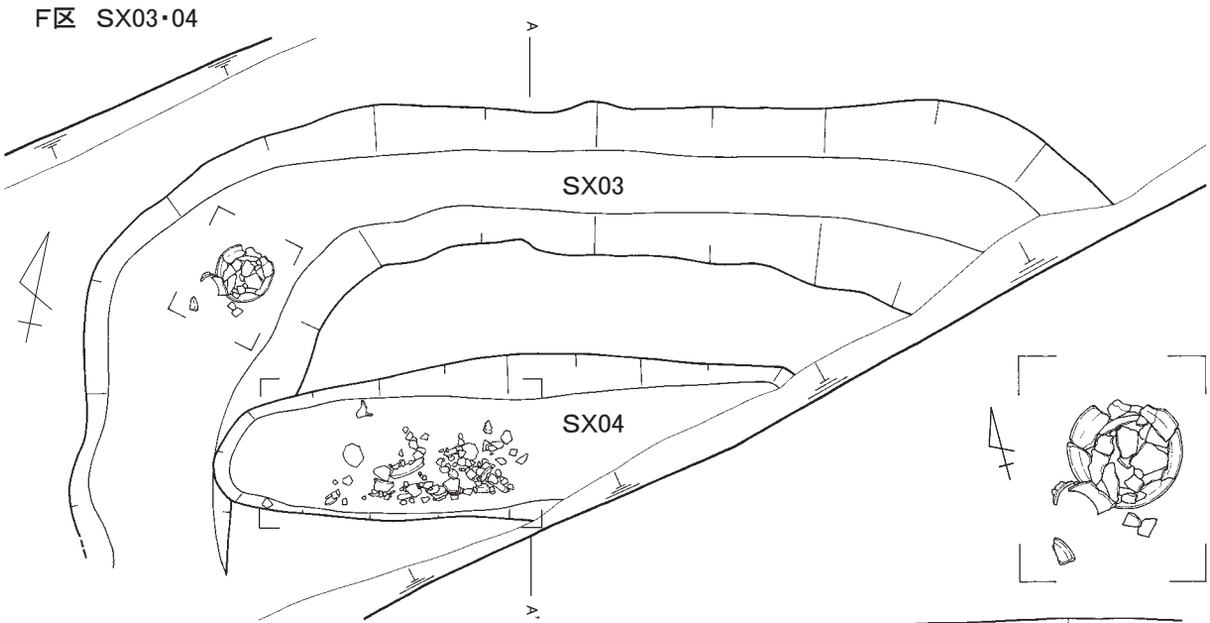


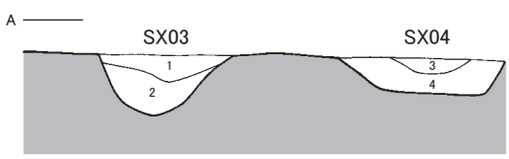
1　10YR4/2 灰黄褐　極細砂（粗砂含む、細礫少量含む）



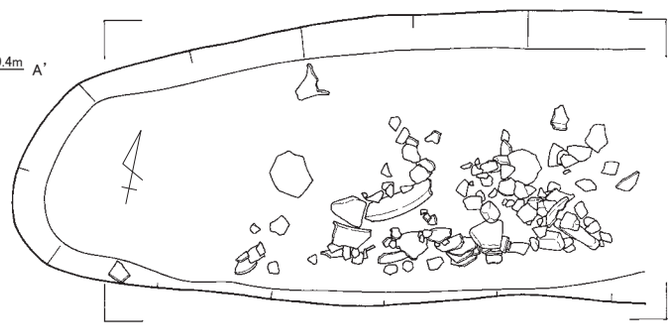
遺構（4）　方形周溝墓SX01・02、土坑SK01

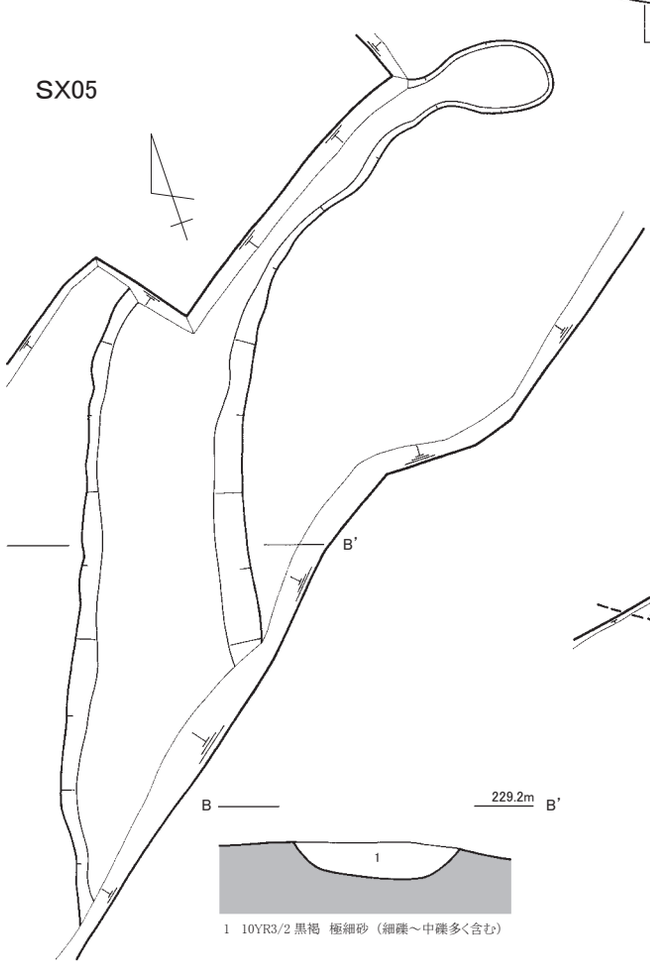
F区　SX03・04

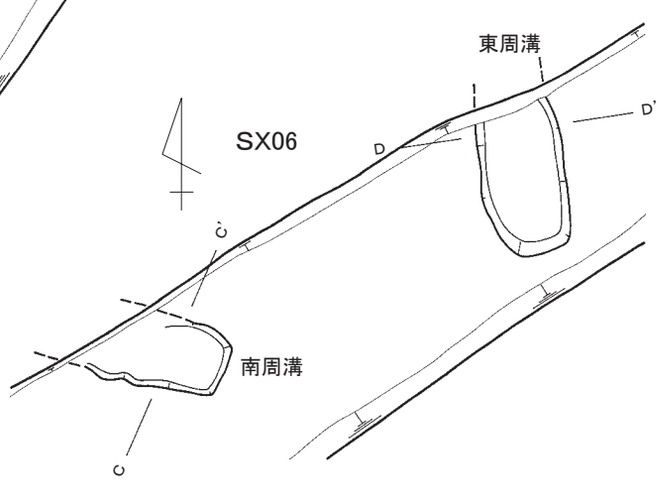




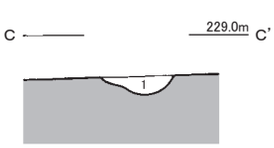
1　10YR4/4 褐　極細砂（粗砂～細礫多く含む）SX03 の埋土上層
2　10YR3/2 黒褐　極細砂～細砂（粗砂～細礫多く含む）SX03 の埋土下層
3　10YR5/4 にぶい黄褐　極細砂（粗砂含む、細礫少量含む）SX04 の埋土上層
4　10YR4/2 灰黄褐　極細砂（粗砂～細礫含む）SX04 の埋土下層



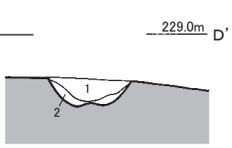




1　10YR3/2 黒褐　極細砂（細礫～中礫多く含む）



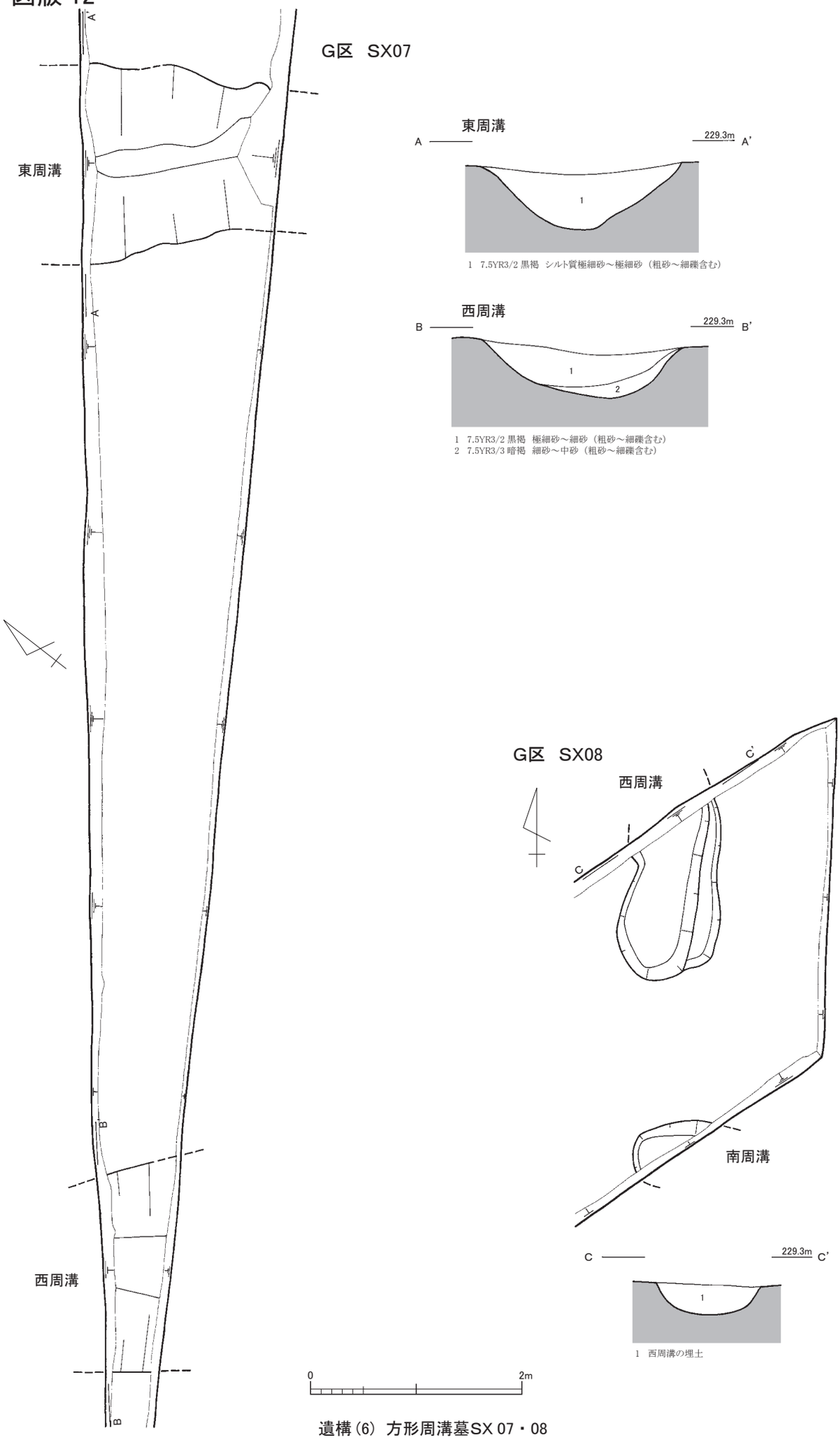
1　10YR4/2 灰黄褐　シルト質極細砂～極細砂（粗砂～中礫含む、炭含む）



1　10YR3/1 黒褐　シルト質極細砂（炭含む）
2　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト質極細砂

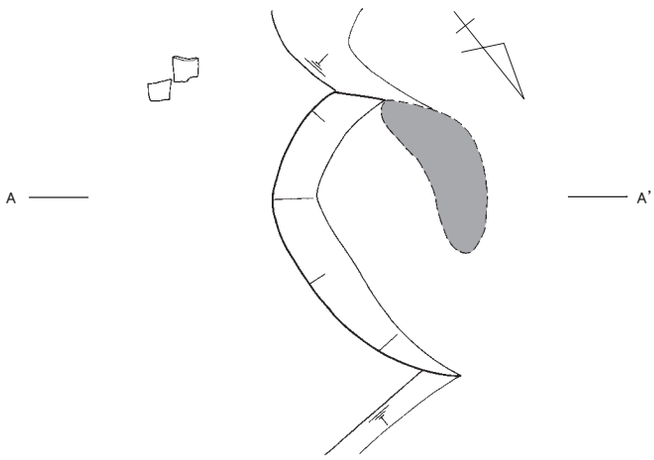
遺構 (5)　方形周溝墓SX 03 ～ 06

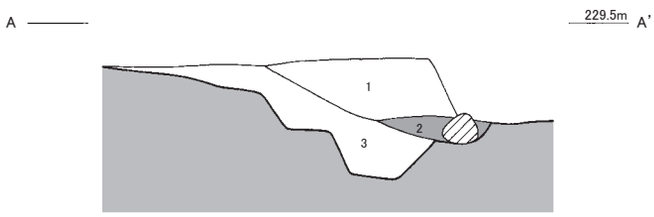
図版 12



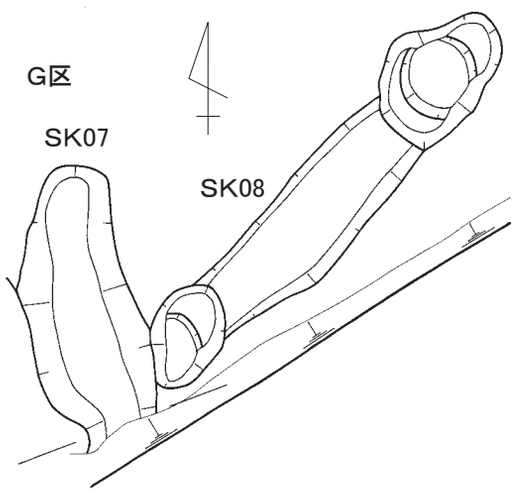
遺構（6）方形周溝墓SX 07・08

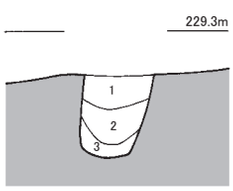
A区　焼土



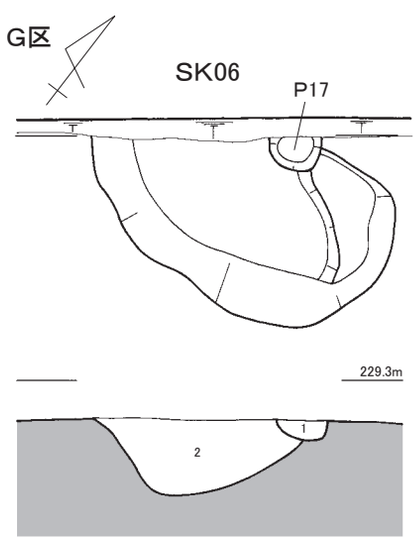


1　7.5YR3/3 暗褐　シルト質極細砂（焼土多く含む）
2　5YR4/6 赤褐　極細砂（被熱して硬化した焼土）
3　7.5YR4/3 褐　極細砂（細礫含む、焼土多く含む）

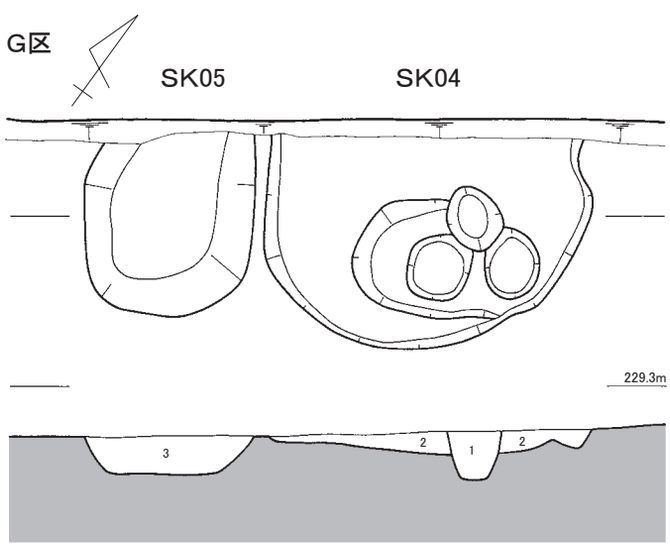




1　10YR3/1 黒褐　極細砂（粗砂含む、炭含む）
2　10YR3/2 黒褐　細砂～中砂（粗砂含む）
3　10YR4/1 褐灰　シルト質極細砂～極細砂



1　ピット 17 の埋土
2　7.5YR4/2 灰褐　極細砂～細砂（粗砂～細礫含む）

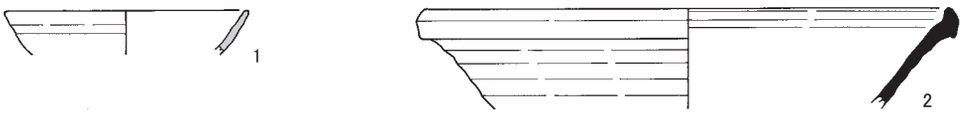


1　10YR3/2 黒褐　シルト質極細砂（粗砂～細礫含む）ピットの埋土
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト質極細砂（粗砂～細礫含む）SK04 の埋土
3　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト質極細砂（粗砂～細礫含む、マンガン沈着）

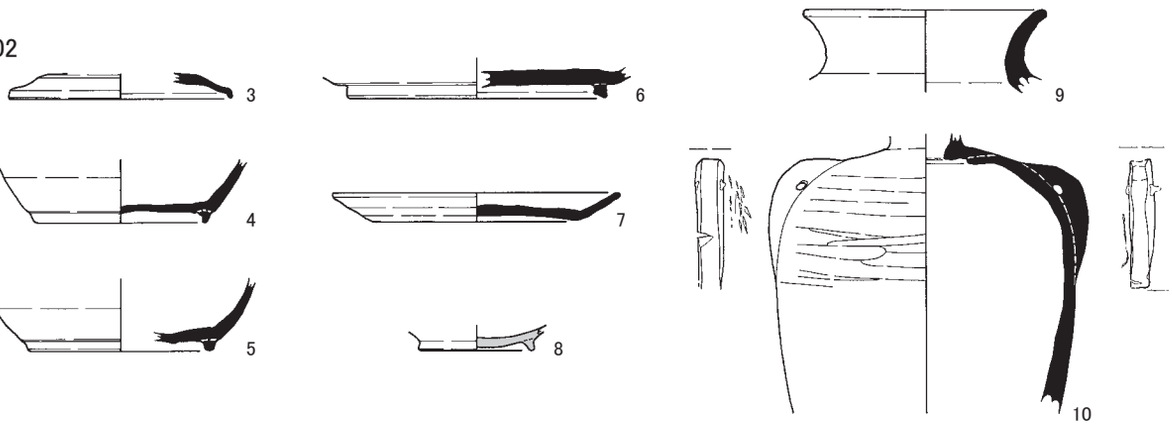
遺構（7）焼土・土坑SK 04 ～ 08

図版 14

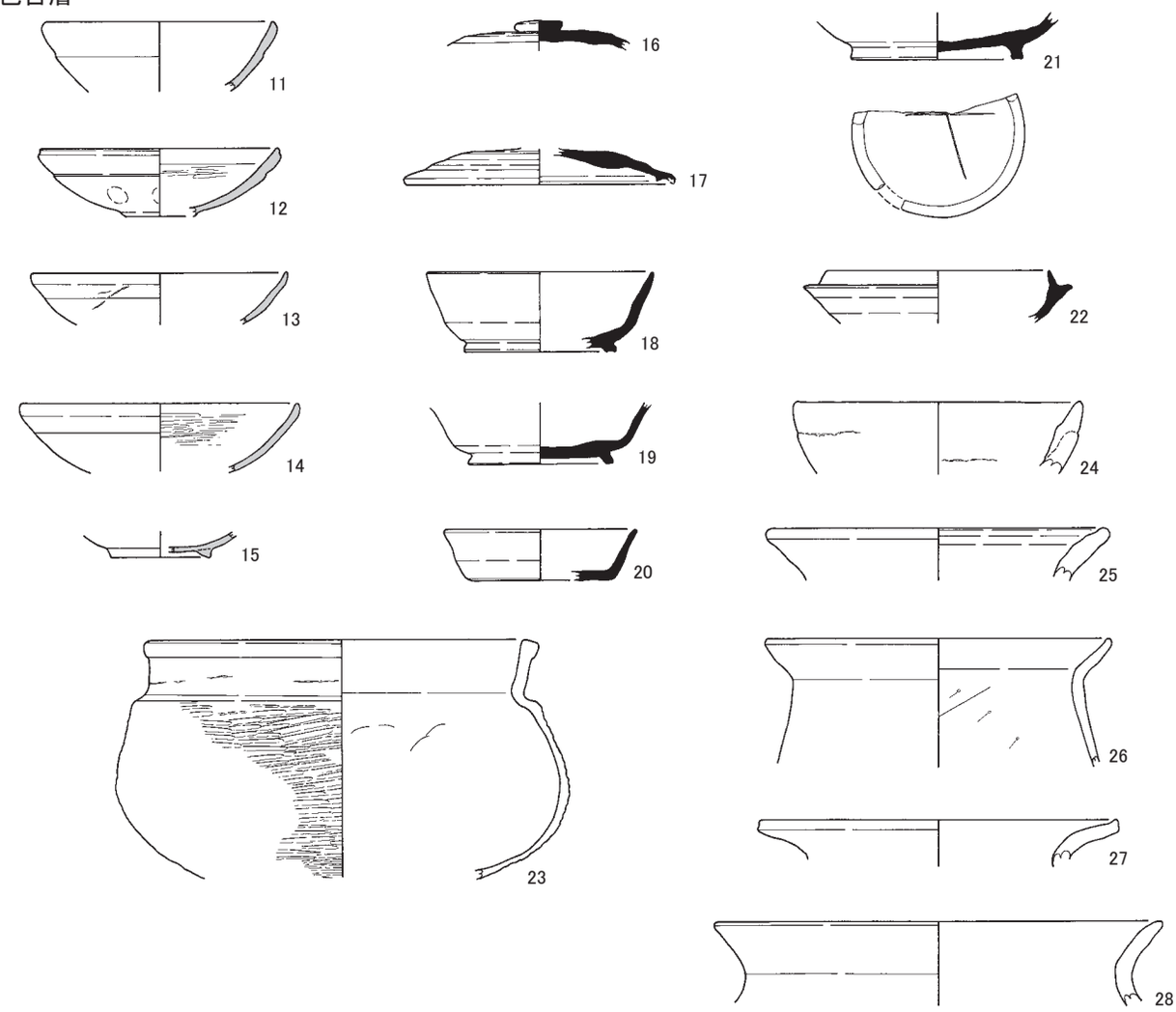
A区　SE01



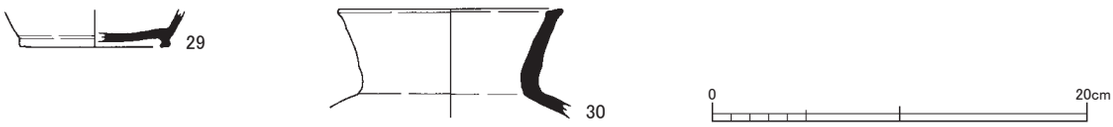
SE02



包含層

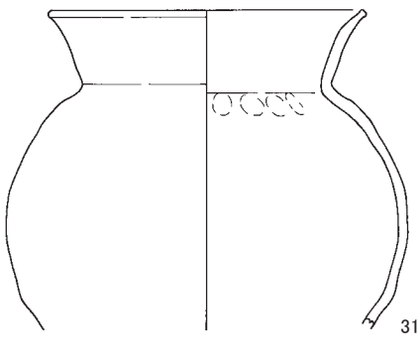


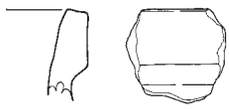
B区　包含層

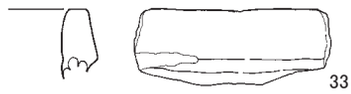


土器 (1)

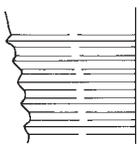
C区　SD01

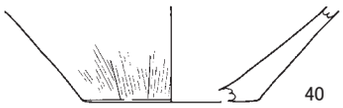




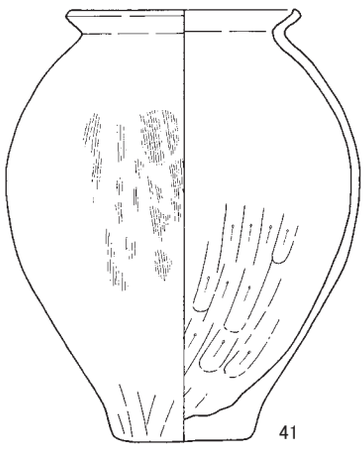


D区　SK01

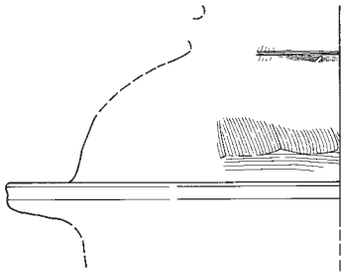


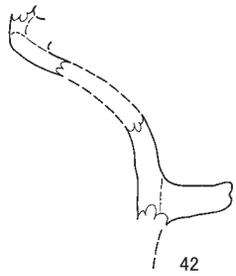


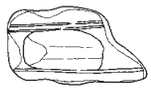
SX02



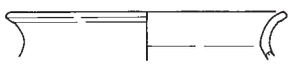
E区　SD05

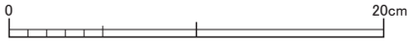


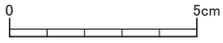




SD04

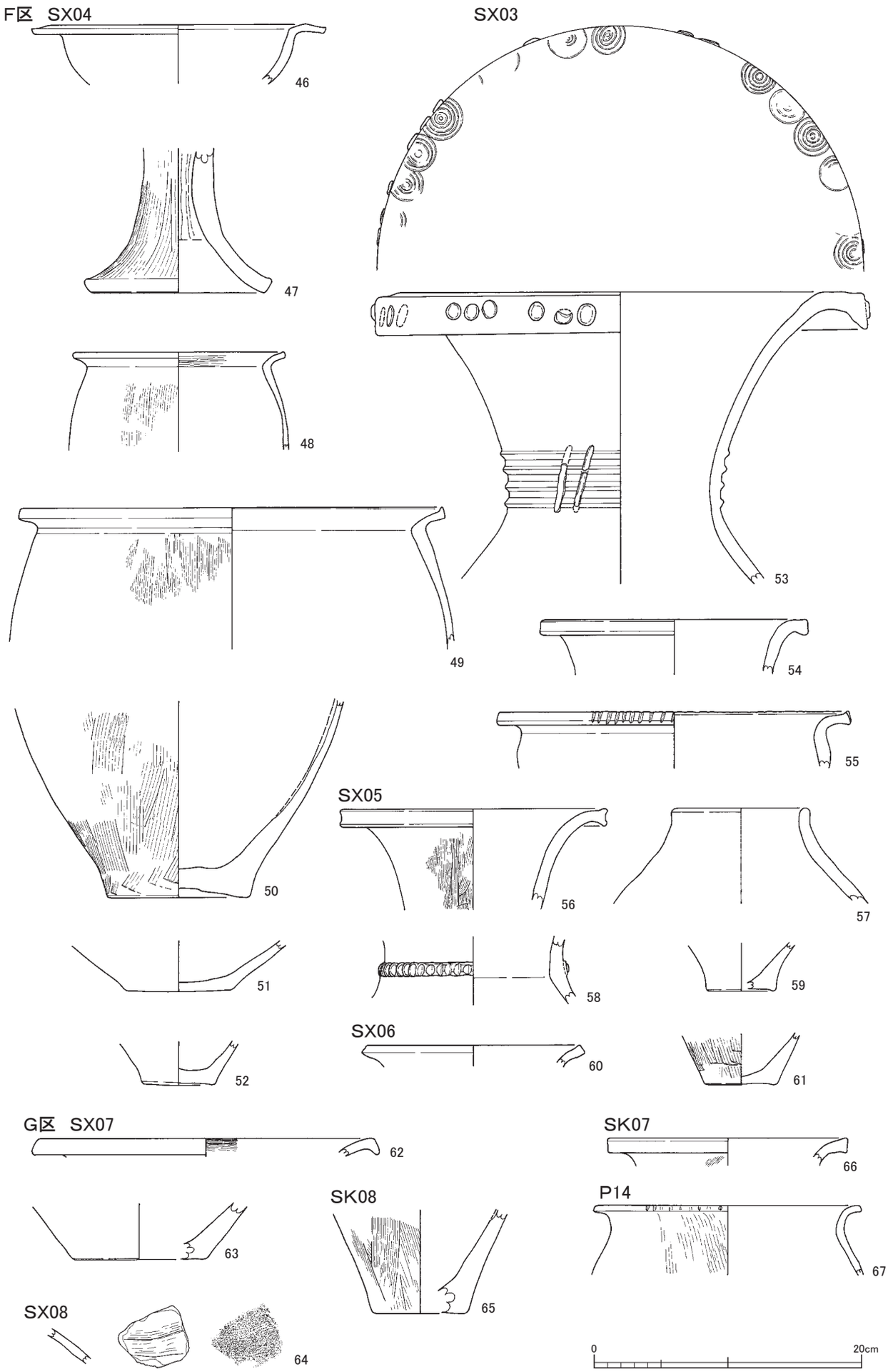




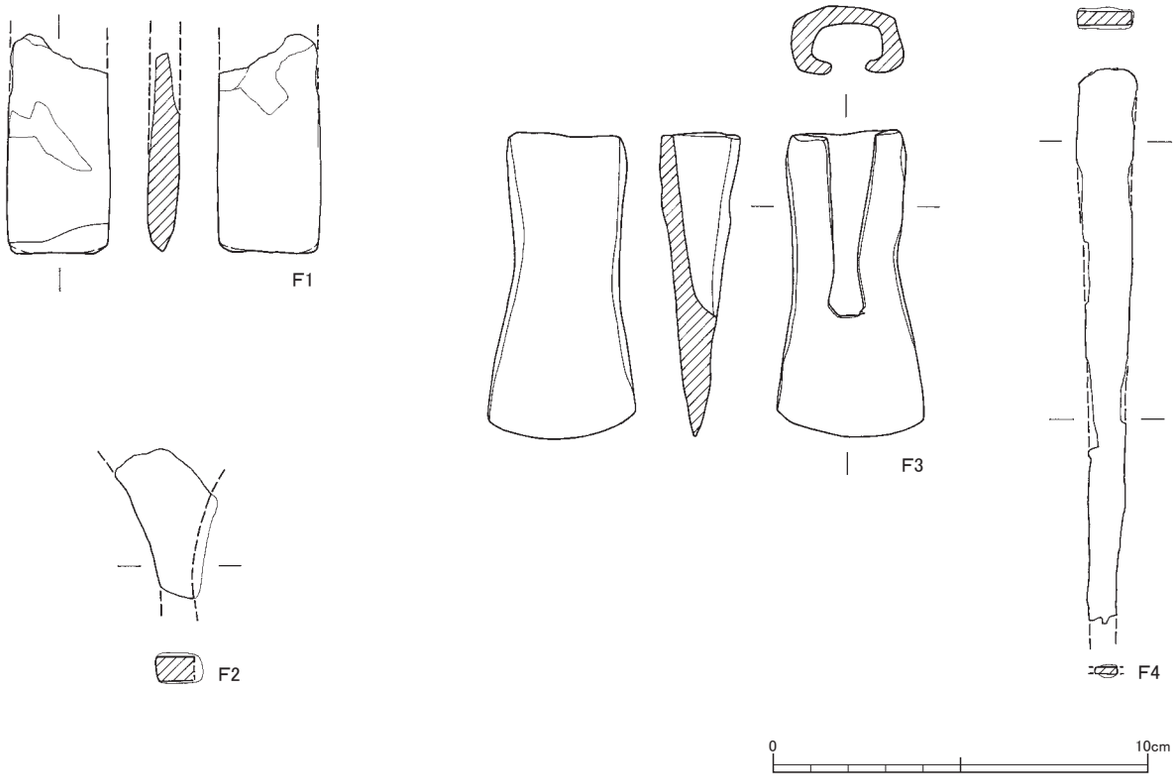


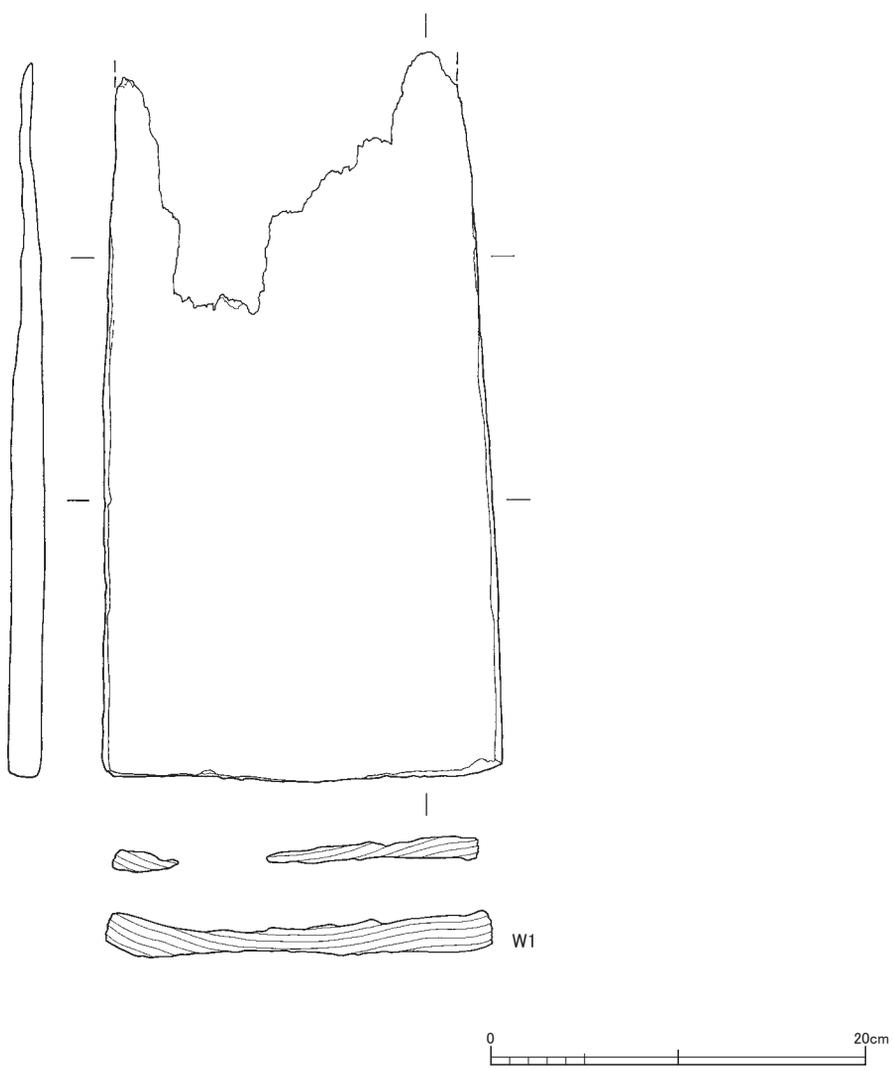
土器 (2)

図版 16


F区 SX04
SX03
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
SX05
56
57
58
59
SX06
60
61
G区 SX07
62
63
SX08
64
SK08
65
SK07
66
P14
67
0
20cm

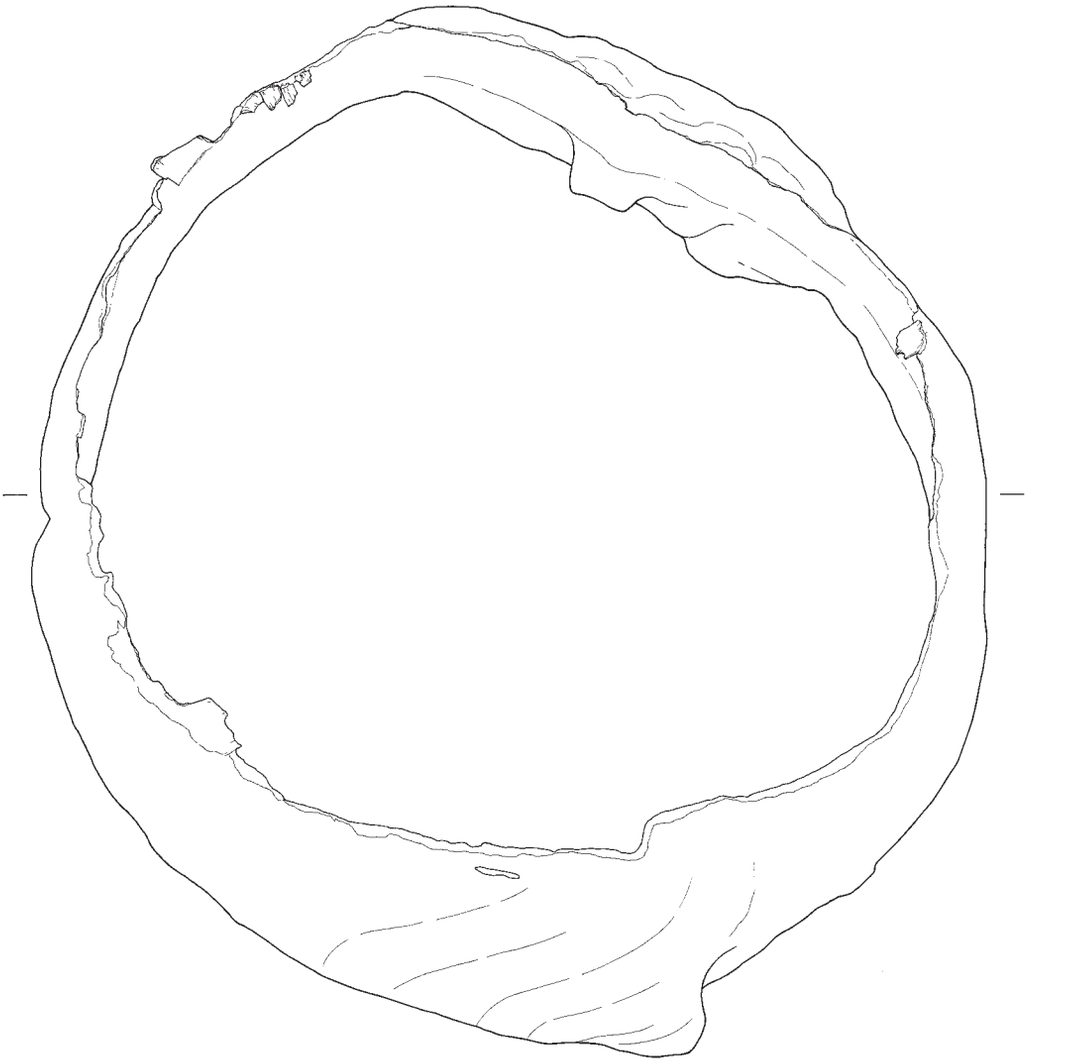
土器 (3)

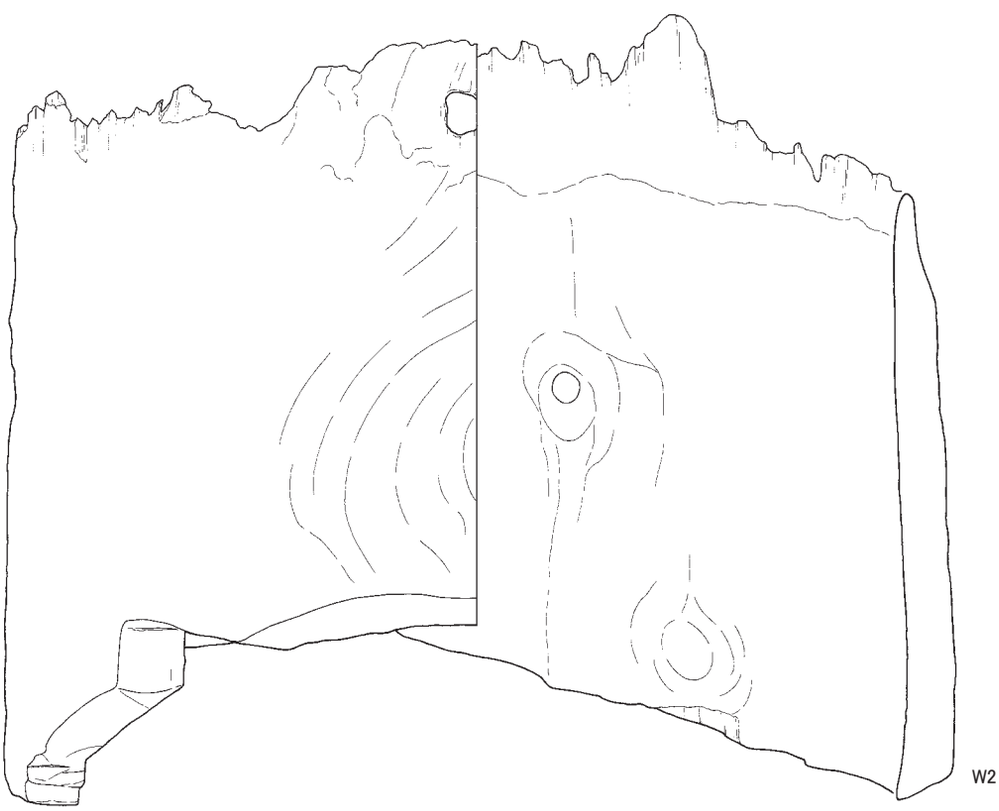




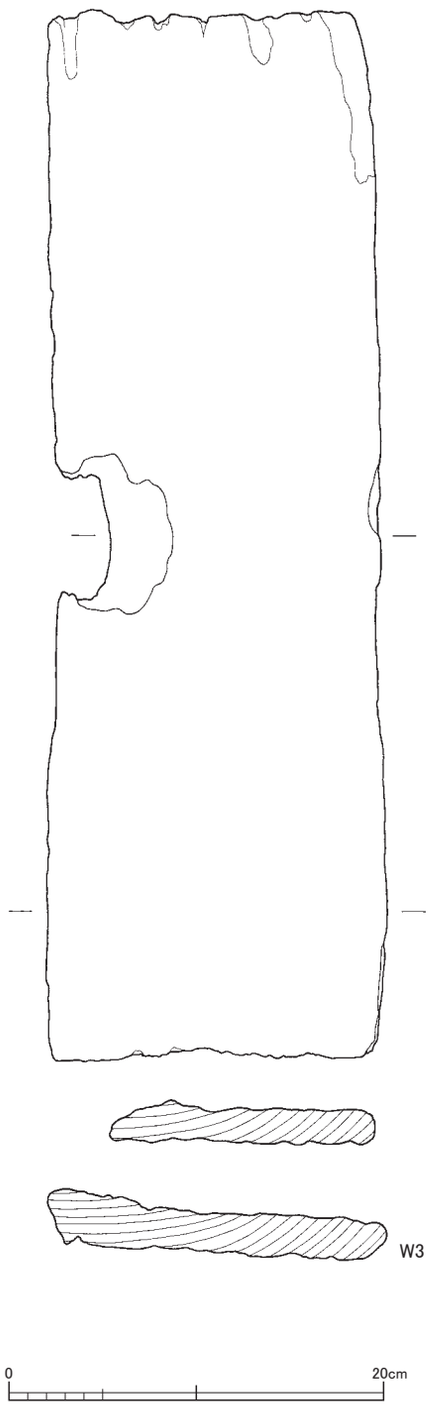
鉄器・木器 (1)

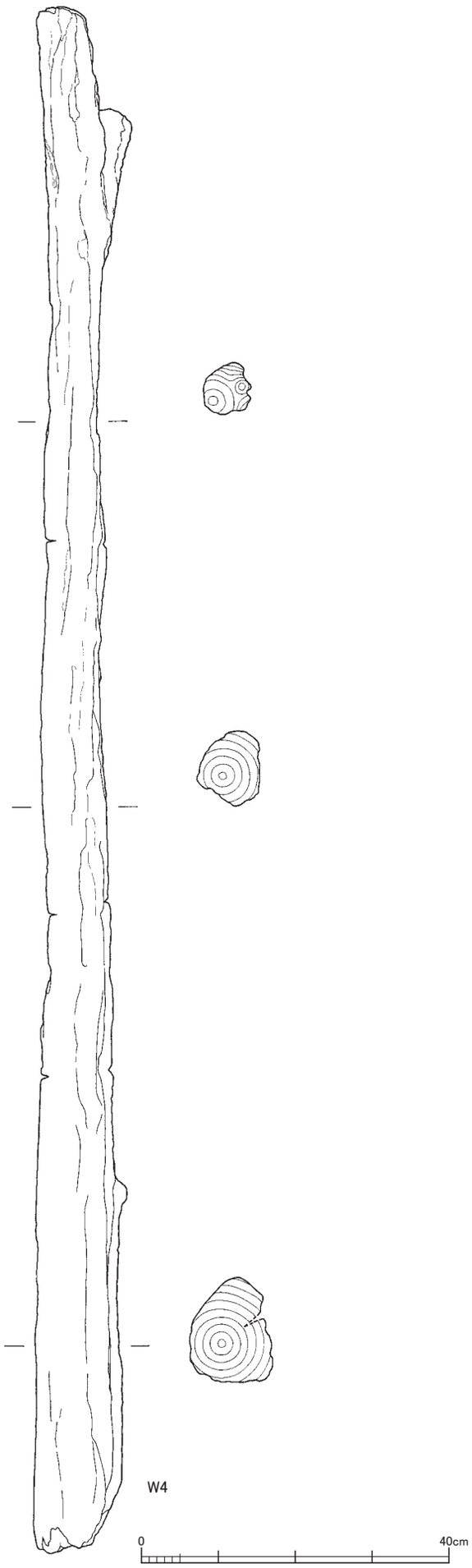
図版 18





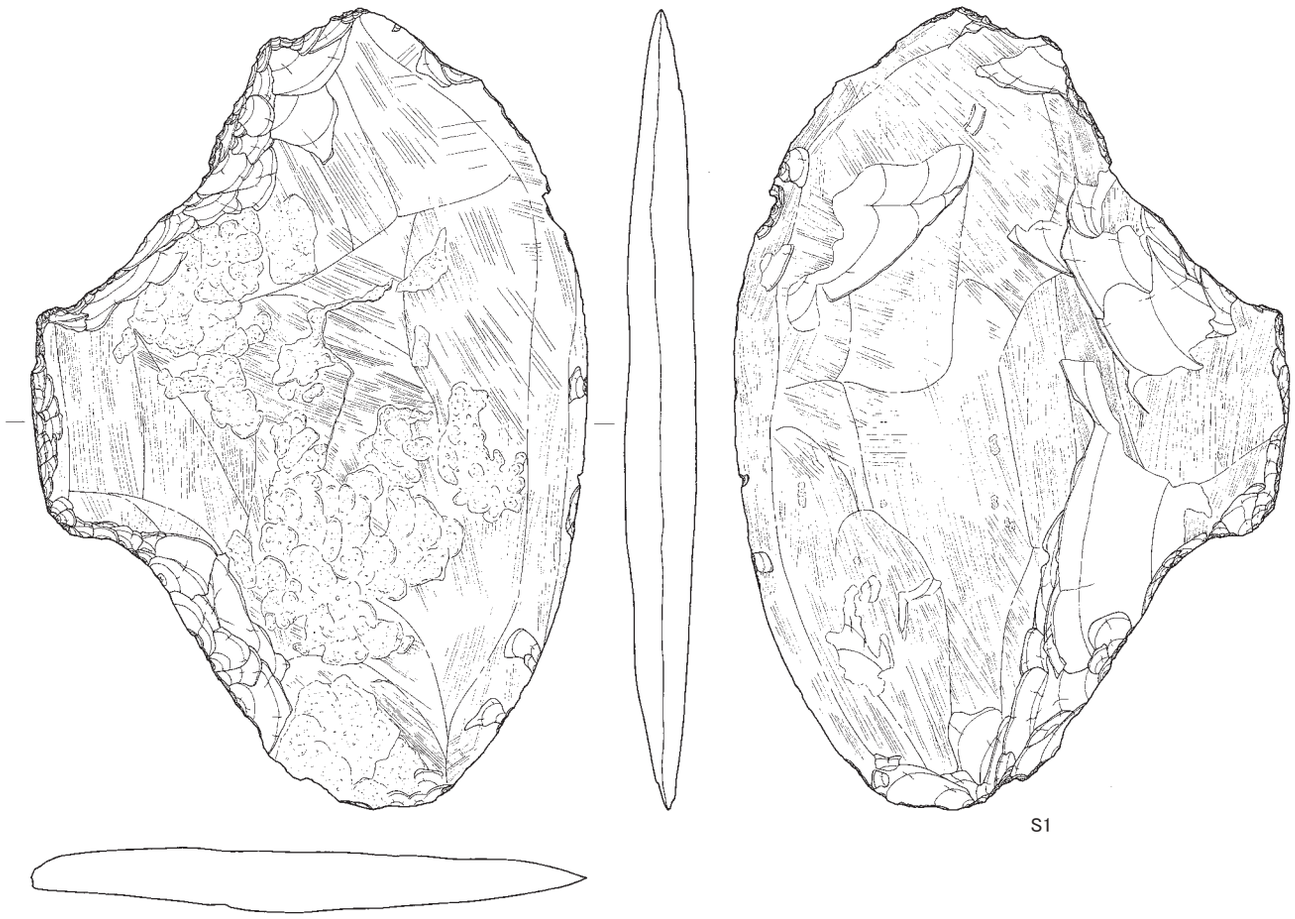
木器 (2)

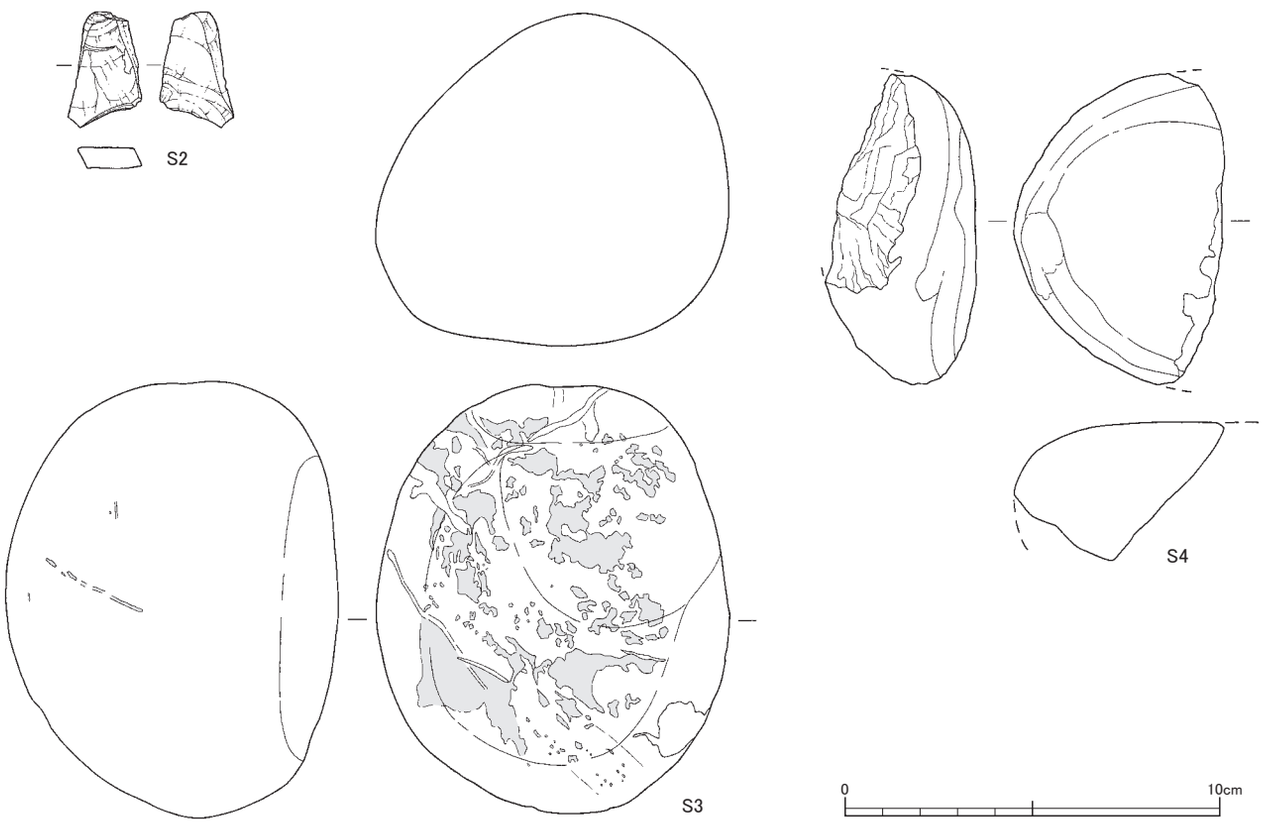




木器 (3)

図版 20





石器

写 真 図 版

航空写真

1．遺跡遠景（南から）

2．同上（南東から）

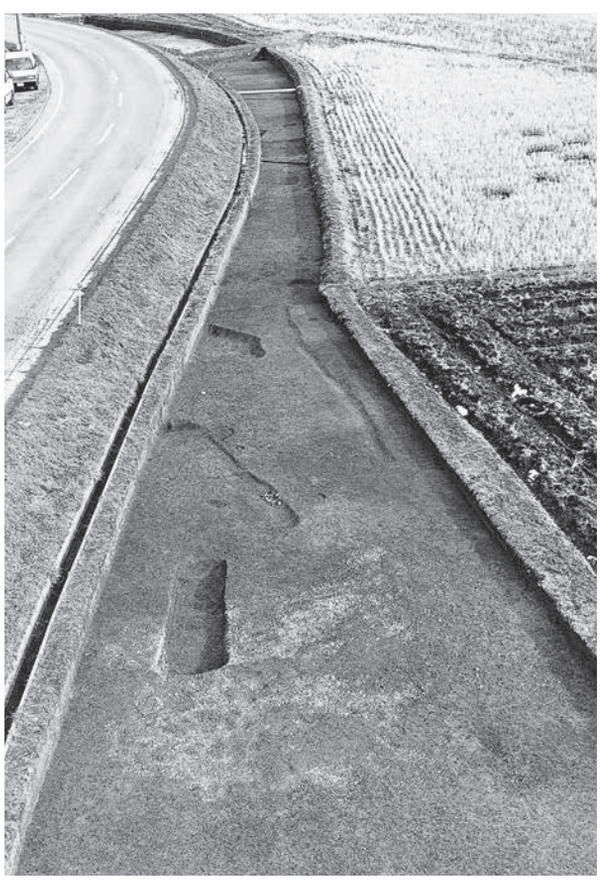
写真図版 2

調査区全景 (1)

1．A区（西から）

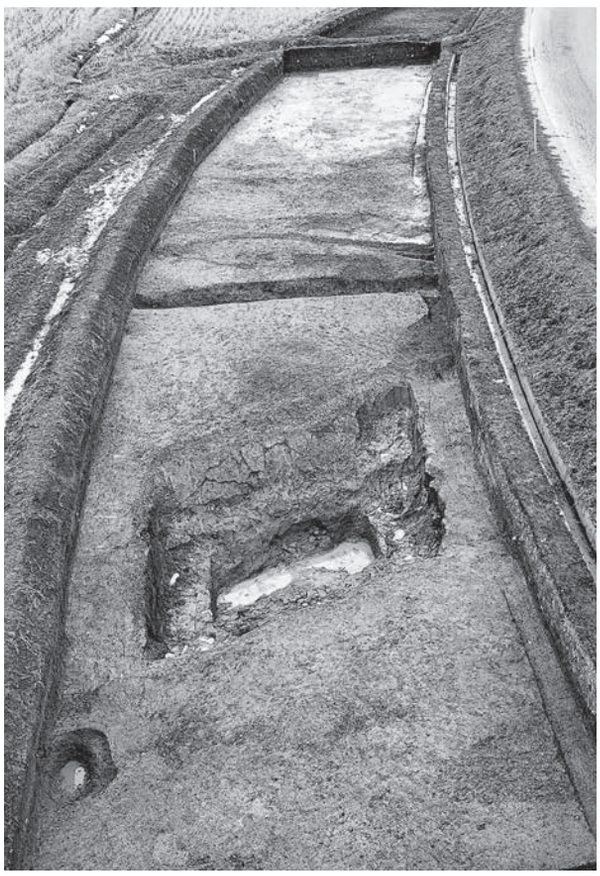
2．B区（東から）

3．C区（東から）



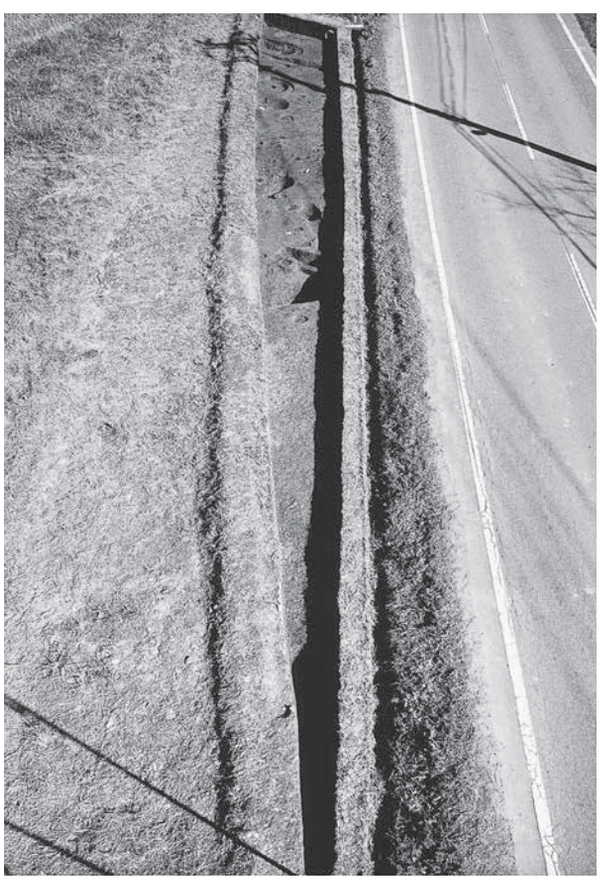
4．D区（西から）

調査区全景 (2)



1．E区（東から）

2．F区（西から）



3．G区（西から）

写真図版 4

井戸跡

1．SE 01（北から）

4．SE 02（北から）

2．同上　埋土断面（南から）

5．同上　埋土断面（北から）

3．同上　断ち割り断面（南から）

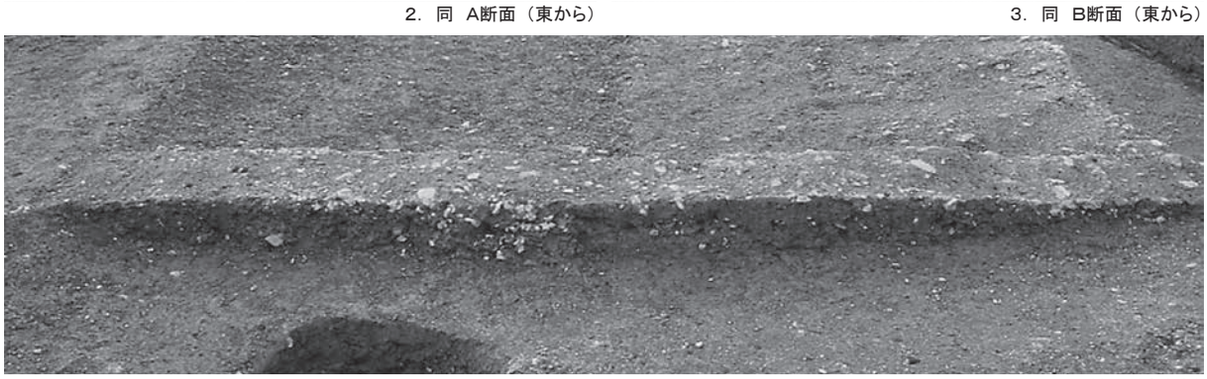
6．同上　断ち割り断面（南東から）

古墳の外周溝（1）

1．C区外周溝SD 01（東から）

2．同 A断面（東から）

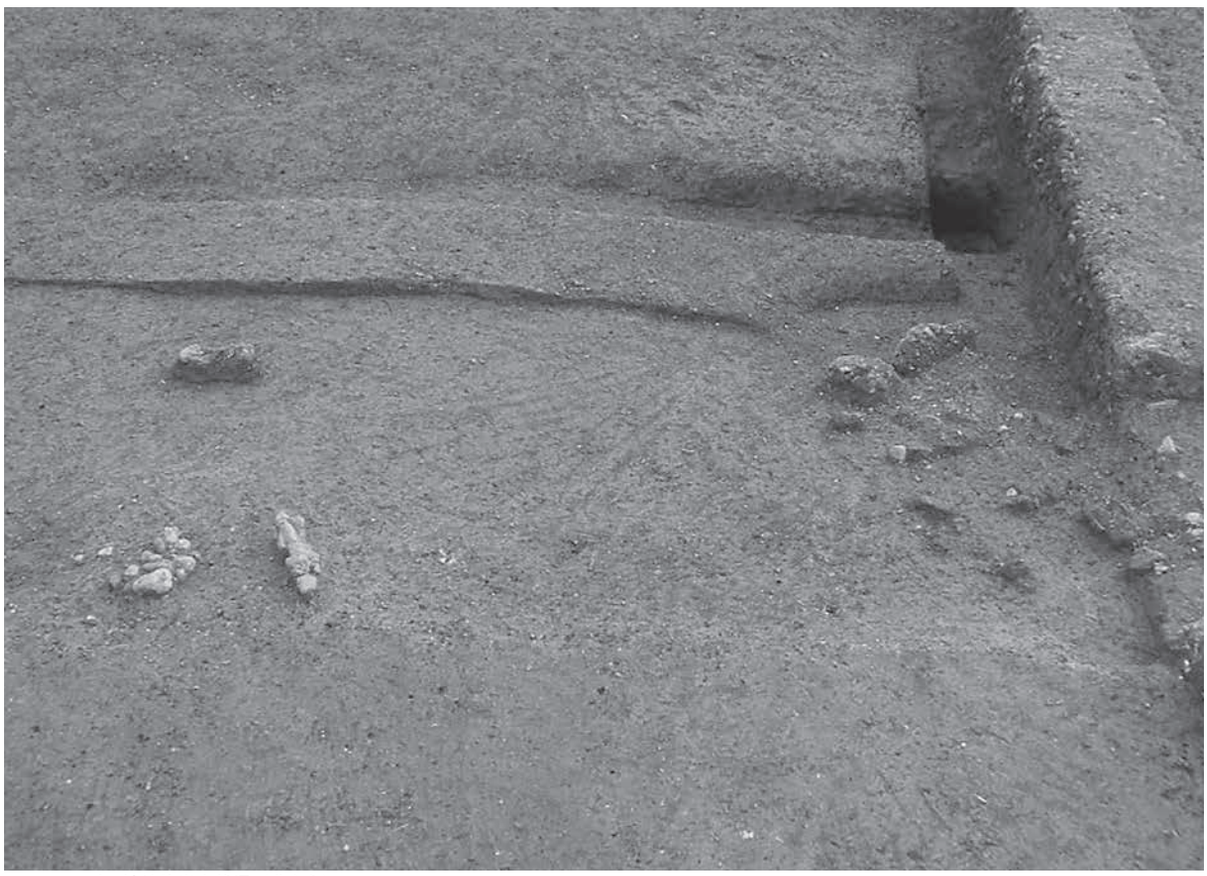
3．同 B断面（東から）



4．同 C断面（東から）

5．同 D断面（東から）

古墳の外周溝（2）



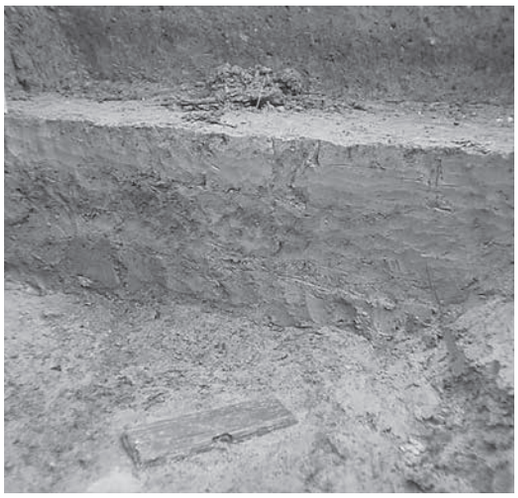
1．SD 01 内　埴輪片出土状況（北から）

2．同　土器出土状況（西から）

3．同　鉄斧出土状況

旧河道・溝

1．E区　旧河道SD 05（東から）



2．SD 05 内木製品出土状況（南から）

3．同上（北東から）

4．E区　溝SD 03・04（北から）

弥生時代の墓（1）

1．C区　方形周溝墓SX 01（南西から）

2．同上　断面（東から）

4．同右　土器出土状況（北東から）

3．D区　方形周溝墓SX 02（南西から）

弥生時代の墓 (2)

1．D区　土坑SK 01（東から）

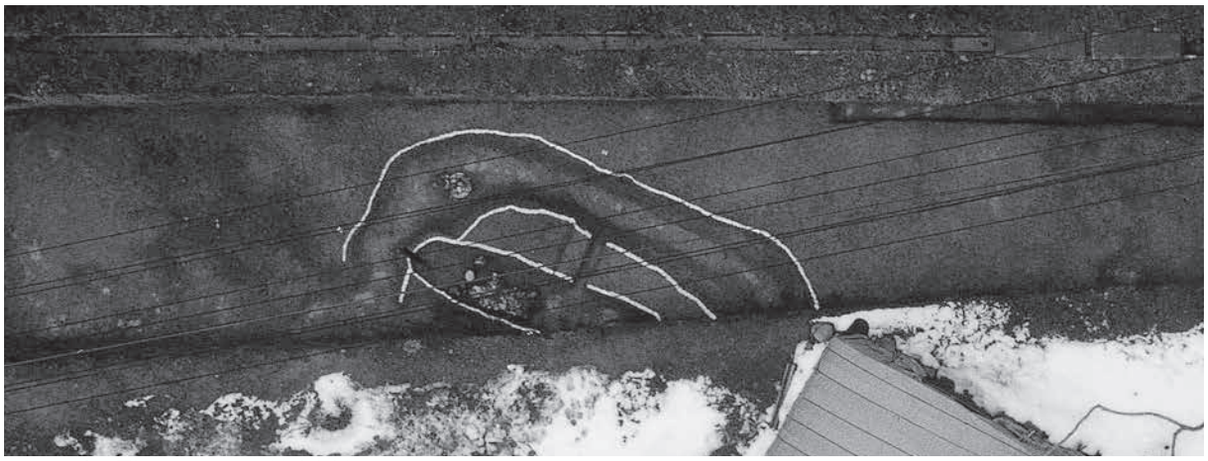
2．同上　遺物出土状況（北から）

3．同上　断面（東から）

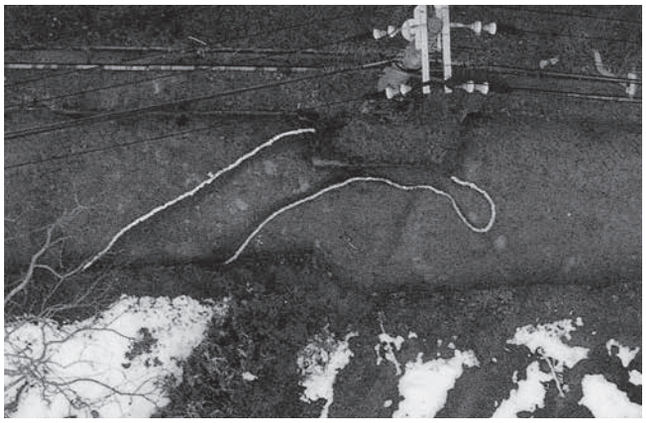
4．柱穴P 13　断ち割り断面（南から）

写真図版 10

弥生時代の墓 (3)

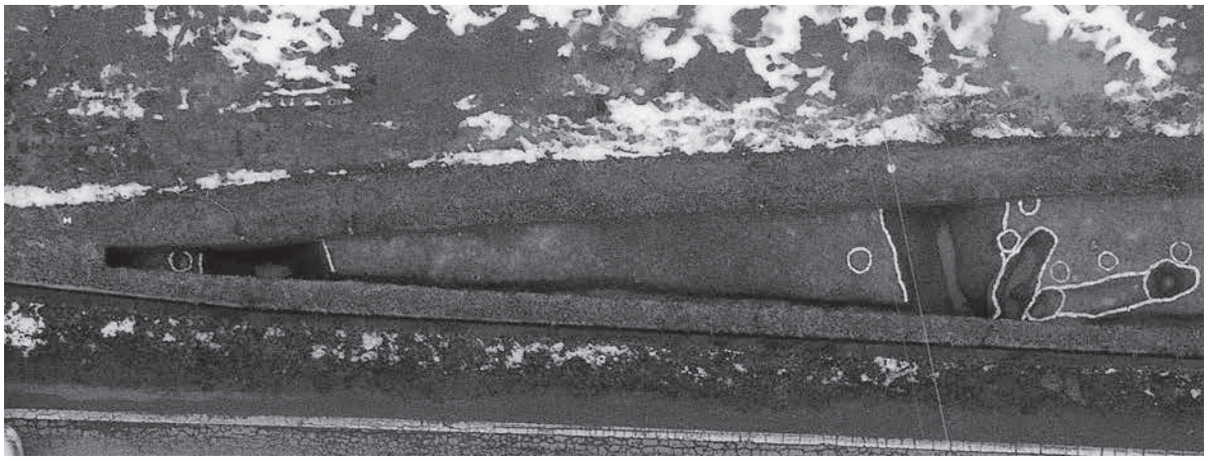


1．F区　方形周溝墓SX 03・04（真上から）

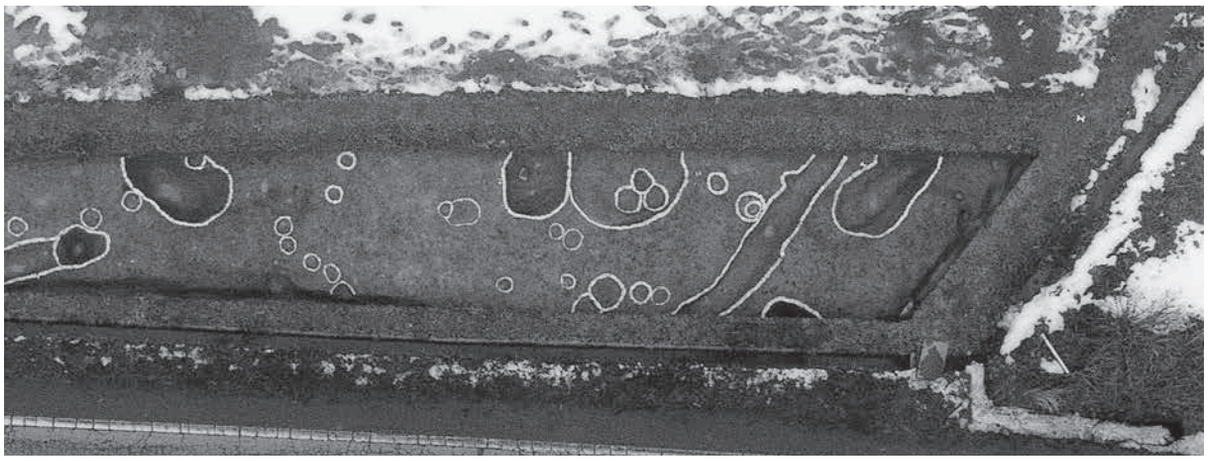


2．F区　方形周溝墓SX 05（真上から）

3．F区　方形周溝墓SX 06（真上から）



4．G区　方形周溝墓SX 07（真上から）



5．G区　方形周溝墓SX 08と周辺の土坑群（真上から）

弥生時代の墓(4)

1．F区　方形周溝墓SX 03・04（南西から）

2．SX 04 周溝内土器出土状況（東から）

3．SX 03 周溝内土器出土状況（北から）

4．同上　周溝断面（西から）

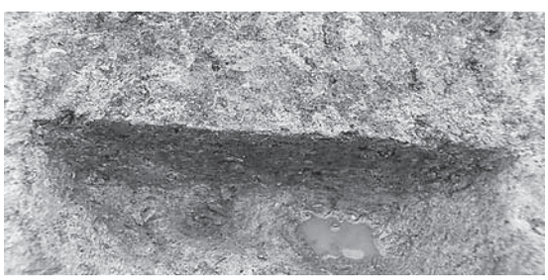
5．SX 04 周溝断面（西から）

弥生時代の墓(5)

1．F区　方形周溝墓SX 05（北東から）

2．同左　断面（南から）

3．SX 06 南周溝断面（南東から）



4．SX 06 東周溝断面（南から）

5．SX 06 南周溝（南東から）

6．SX 06 東周溝（南から）

弥生時代の墓(6)

1．G区　方形周溝墓SX 07（南西から）

2．SX 07 西周溝（北東から）

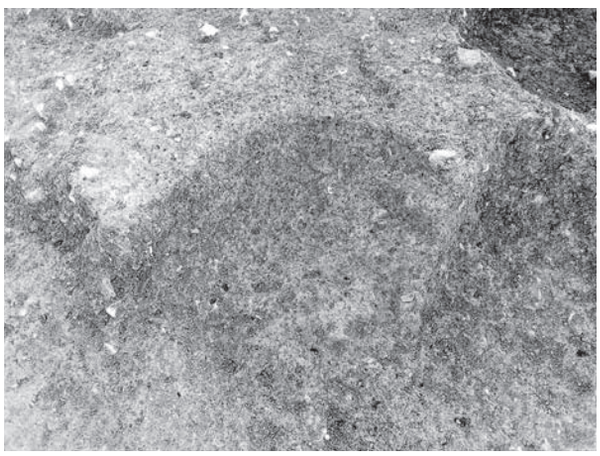
3．同上　断面（南東から）

4．SX 07 東周溝（南東から）

弥生時代の墓(7)、焼土、土坑

1．G区　方形周溝墓SX 08 西周溝断面（南から）

2．同左　南周溝断面（北から）



3．A区　焼土（北西から）

4．同左　断面（北東から）

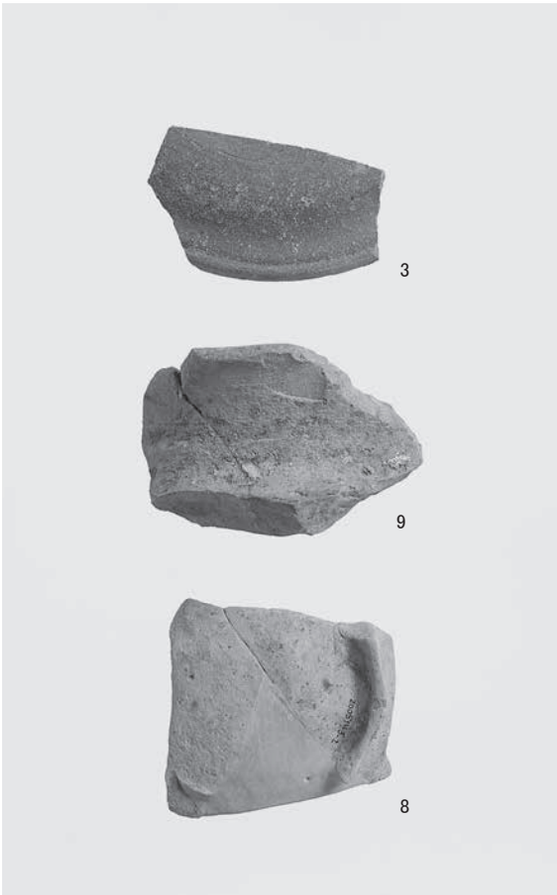
5．G区　土坑SK 05（南東から）

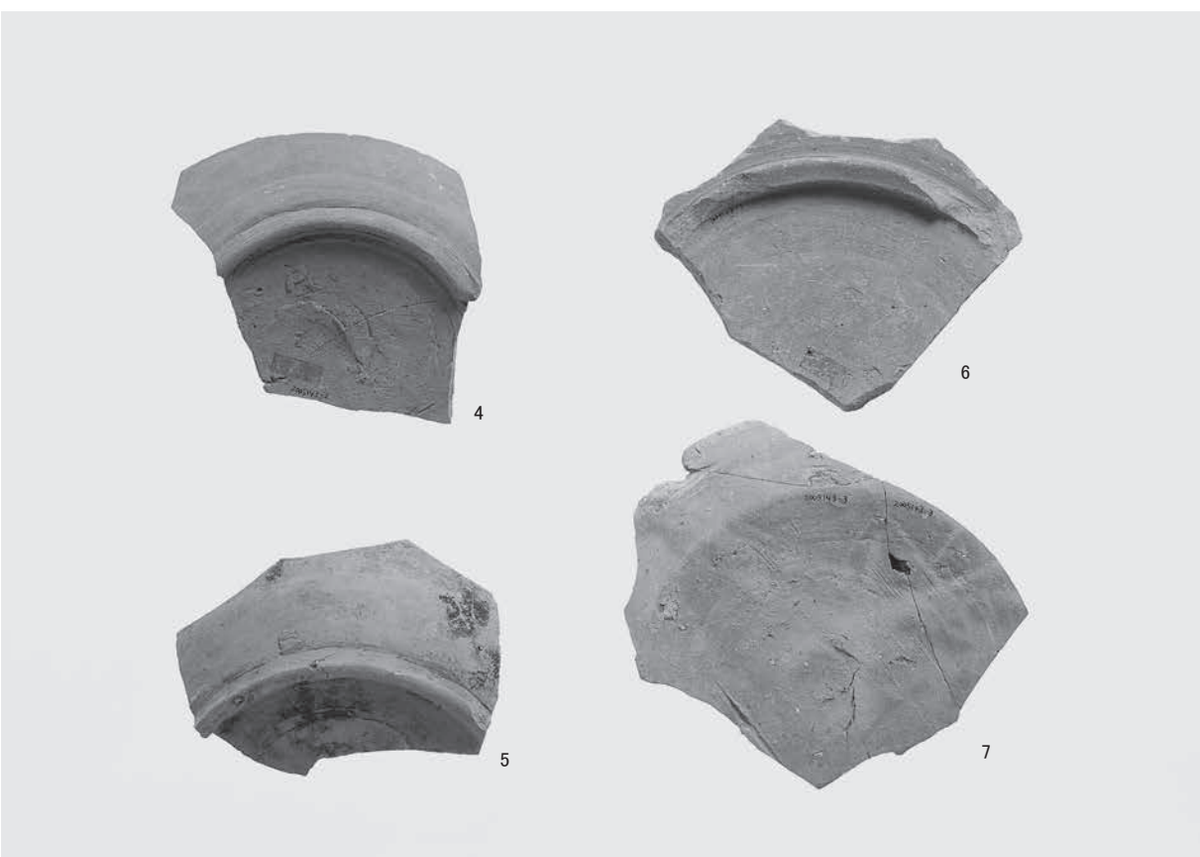
6．G区　土坑SK 04（南東から）

7．G区　土坑SK 07 断面（南から）

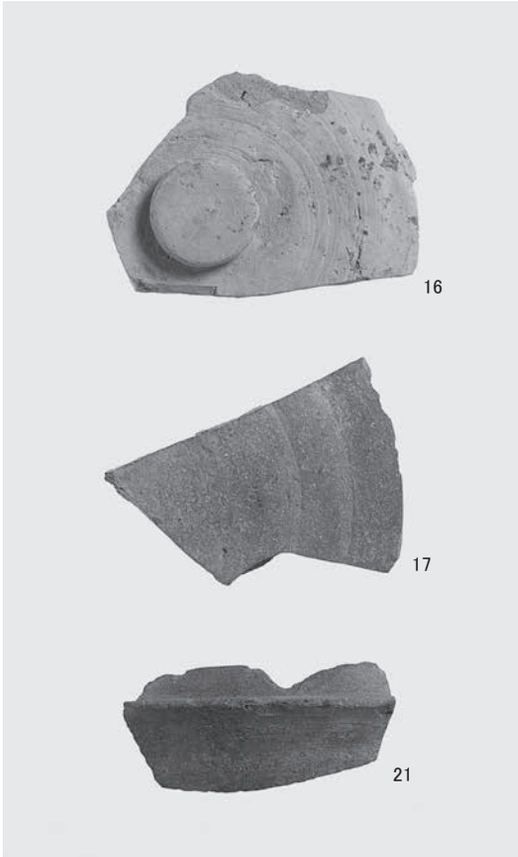
8．G区　土坑SK 08（北東から）

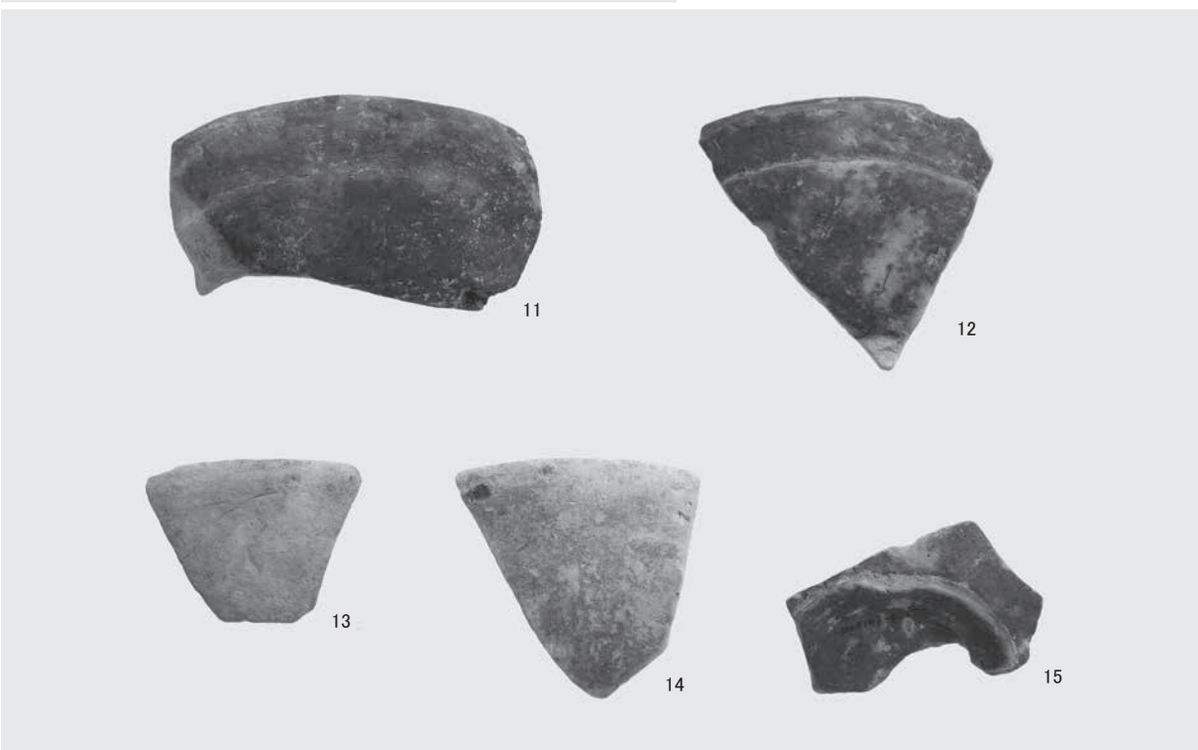
土器 (1)



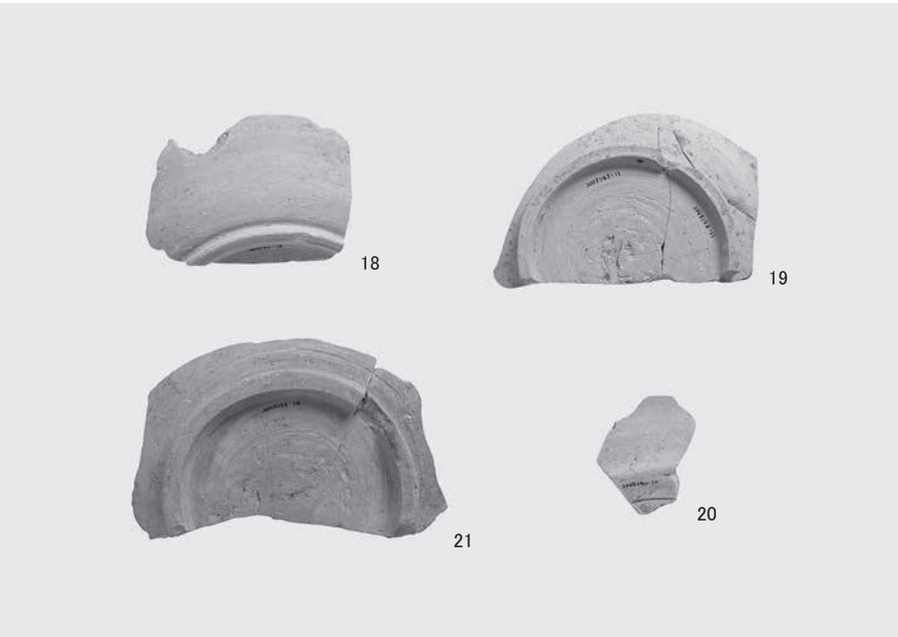


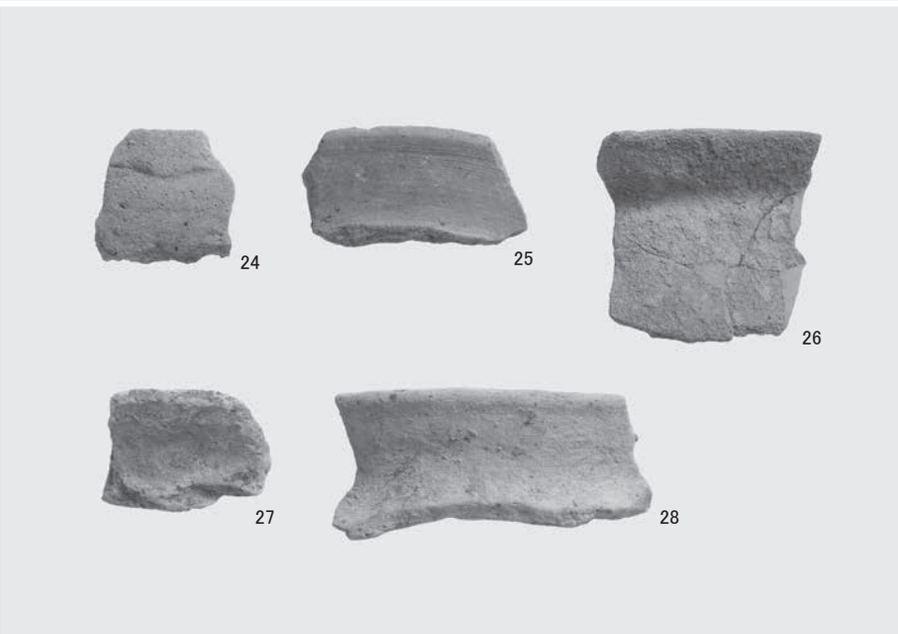
土器(2)





土器(3)





土器 (4)

31

41

38 39

47

49

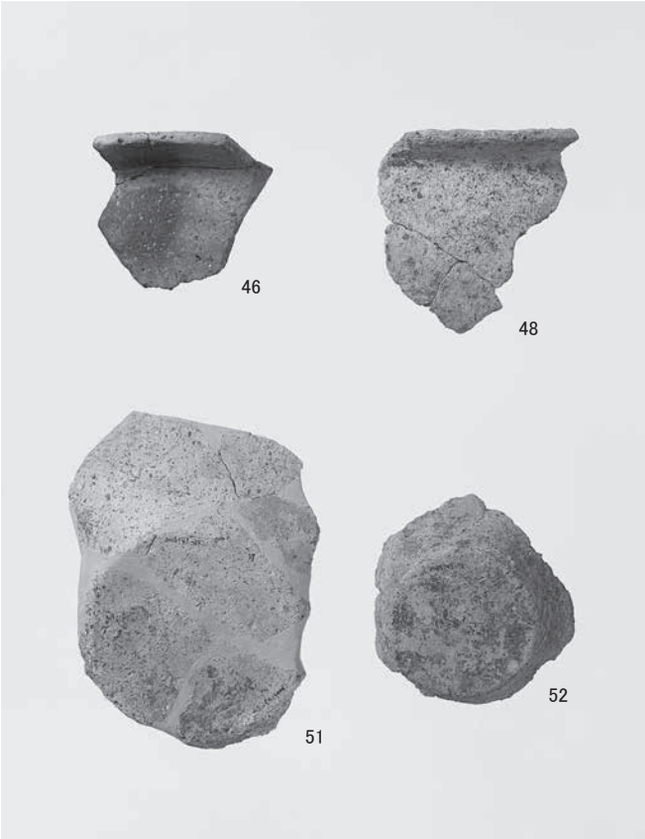
50

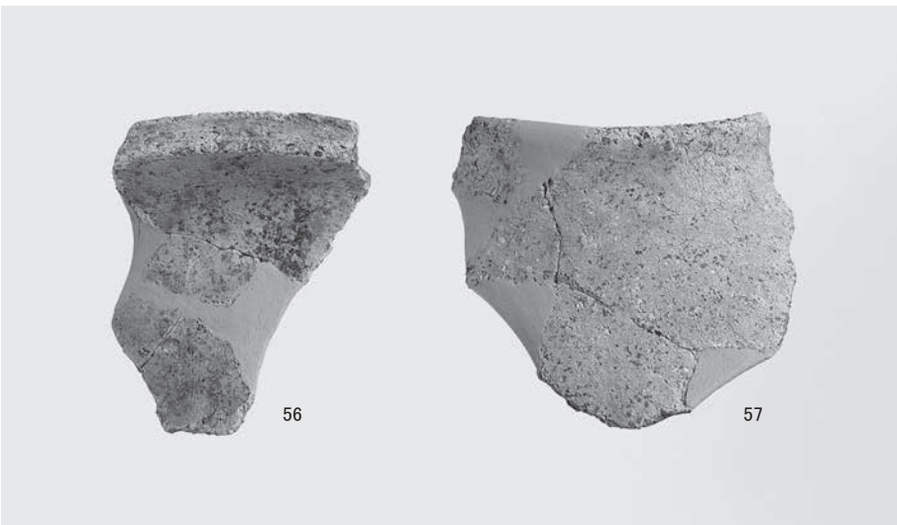
土器 (5)

53

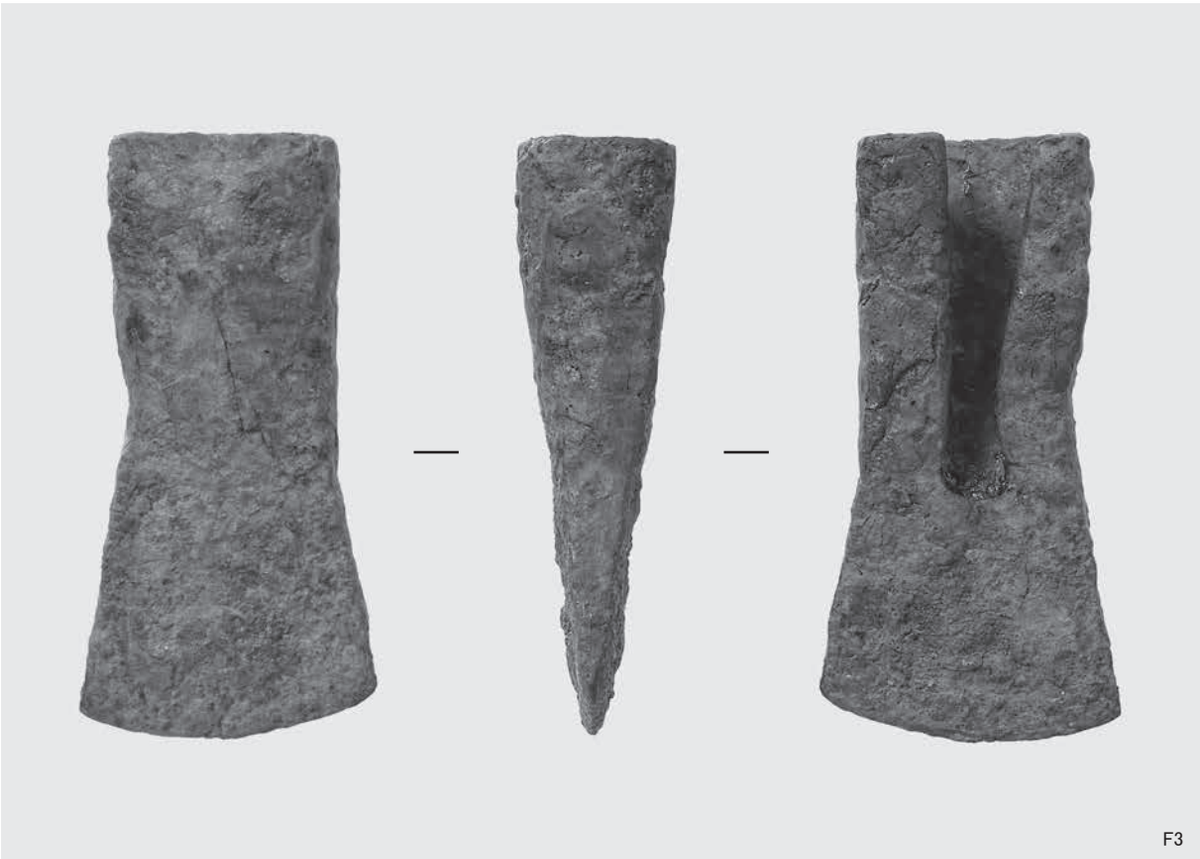
53 文様アップ

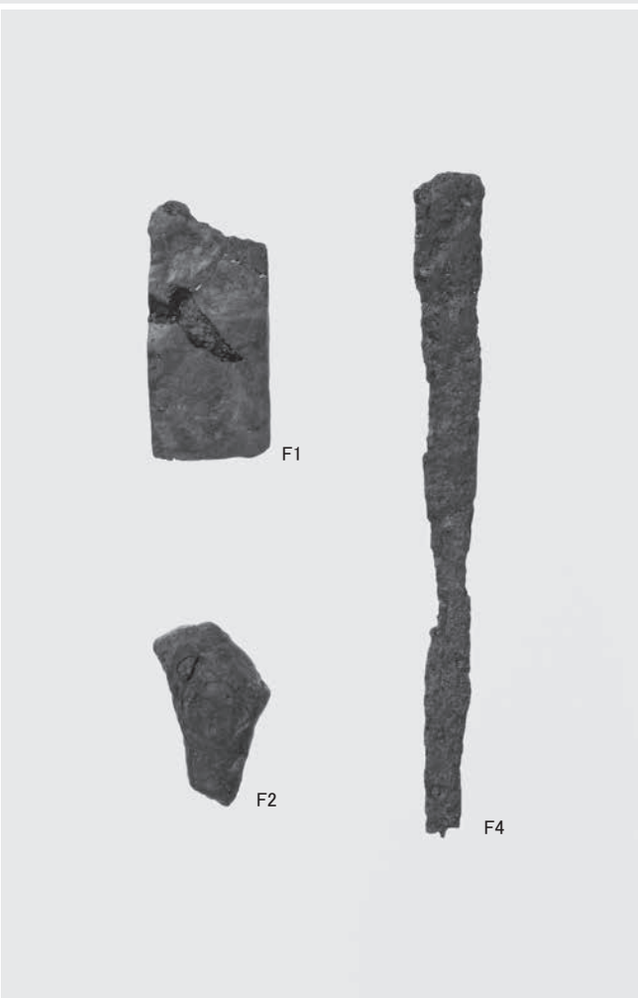
土器 (6)





鉄器





木器

W2

W3

W4

石器

報告書抄録

ふりがな	くもべくるまづかこふん　くるまづかのつぼいせき
書名	雲部車塚古墳　車塚の坪遺跡
副書名	（一）篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第450冊
編著者名	中川　渉・（株）吉田生物研究所・（株）加速器分析研究所・青木哲哉
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）　TEL 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL 078-362-3784
発行年月日	平成25（2013）年3月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　TEL 079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
雲部車塚古墳	篠山市東本庄	28221	820870	35°5′10″	135°18′16″	20051028～20060127（2005143）	1,536㎡	記録保存調査
車塚の坪遺跡			820873			20051028～20060127（2005144）		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雲部車塚古墳	古墳	古墳時代	周庭帯外周溝	埴輪・土師器・鉄器・木器	壺形埴輪
車塚の坪遺跡	集落	弥生時代	方形周溝墓・土坑・柱穴	弥生土器・石器	大型石包丁
		奈良時代	井戸・柱穴	土師器・須恵器	
		中世	井戸・柱穴	土師器・須恵器・瓦器・木器・鉄器	井戸枠

要約

陵墓参考地である「雲部車塚古墳」の南側に接する、県道の拡幅工事に伴って発掘調査した結果、古墳の周庭帯の外側を画する外周溝を検出した。

同古墳と重複して存在する車塚の坪遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓群8基を検出した他、奈良時代と中世の井戸も見つかった。

兵庫県文化財調査報告　第450冊

篠山市

雲部車塚古墳
車塚の坪遺跡

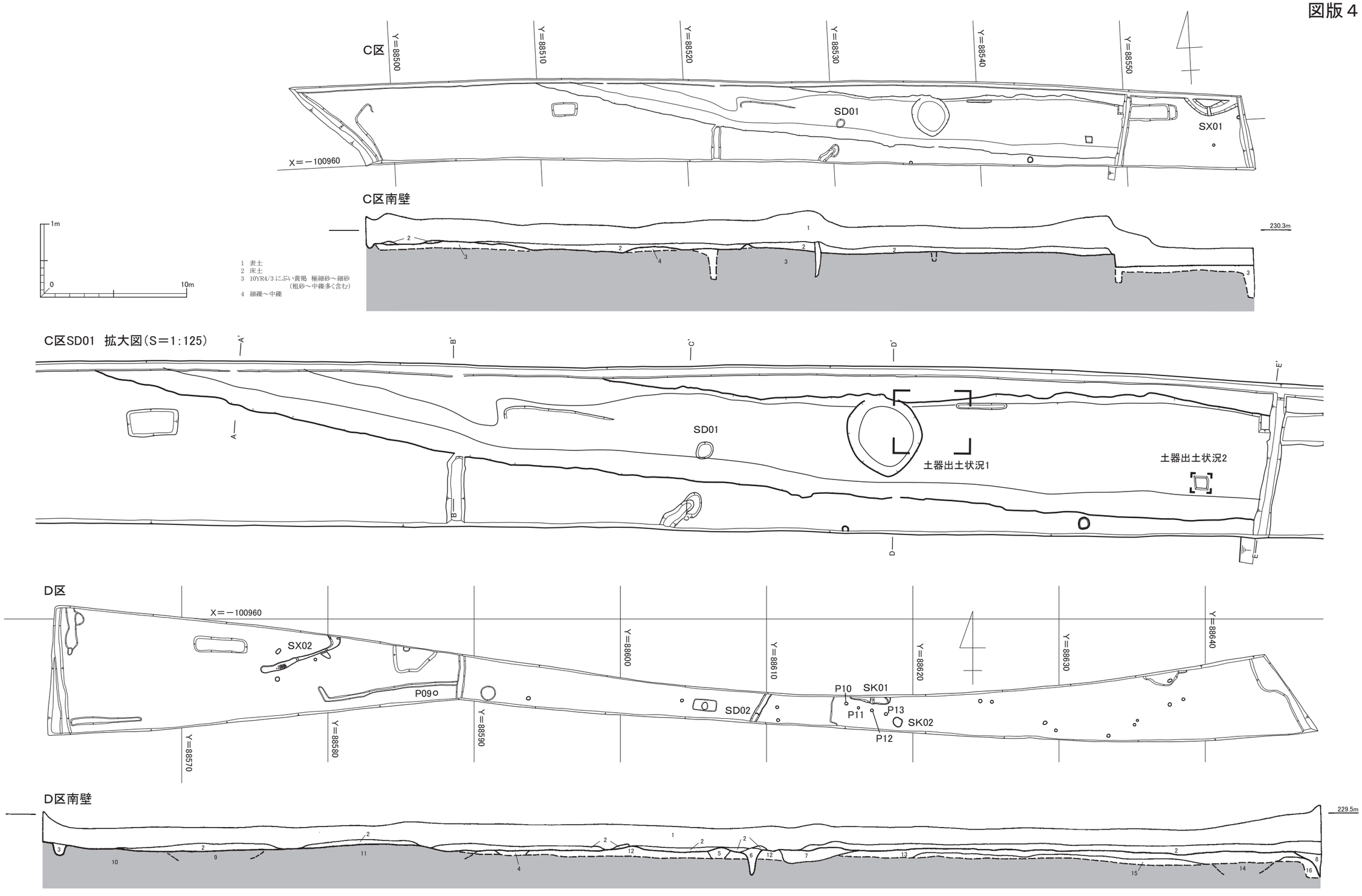
―（一）篠山京丹波線特定交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成25（2013）年3月28日発行

編 集　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）

発 行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷　㈱ 岸本印刷所
〒676-0805　兵庫県高砂市米田町米田400－1


C区
Y＝88500
Y＝88510
Y＝88520
Y＝88530
Y＝88540
Y＝88550
SD01
SX01
X＝－100960
C区南壁
230.3m
1m
0
10m
1 表土
2 床土
3 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂～細砂（粗砂～中礫多く含む）
4 細礫～中礫
C区SD01 拡大図（S＝1:125）
A'
B'
C'
D'
E'
A
B
D
E
SD01
土器出土状況1
土器出土状況2
D区
X＝－100960
SX02
P09
Y＝88570
Y＝88580
Y＝88590
Y＝88600
Y＝88610
Y＝88620
Y＝88630
Y＝88640
SD02
P10
SK01
P11
P13
SK02
P12
D区南壁
229.5m
1 表土
2 床土
3 5Y5/1 灰 極細砂～細砂
4 10YR5/6 黄褐 極細砂～細砂（粗砂多く含む）
5 10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂（細礫含む）
6 10YR3/3 暗褐 シルト質極細砂～極細砂（粗砂～細礫含む）SD02 の埋土
7 10YR4/6 褐 極細砂（粗砂含む）
8 10YR3/2 黒褐 極細砂（粗砂～細礫含む）
9 粗砂～中礫
10 10YR4/4 褐 極細砂（粗砂～細礫含む）
11 10YR5/2 灰黄褐 細砂～粗砂（細礫含む）
12 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂（粗砂～細礫少量含む）
13 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～極細砂（粗砂含む）soil
14 粗砂～中礫
15 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂（粗砂少量含む）
16 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト質極細砂

C・D 区 平面図・断面図